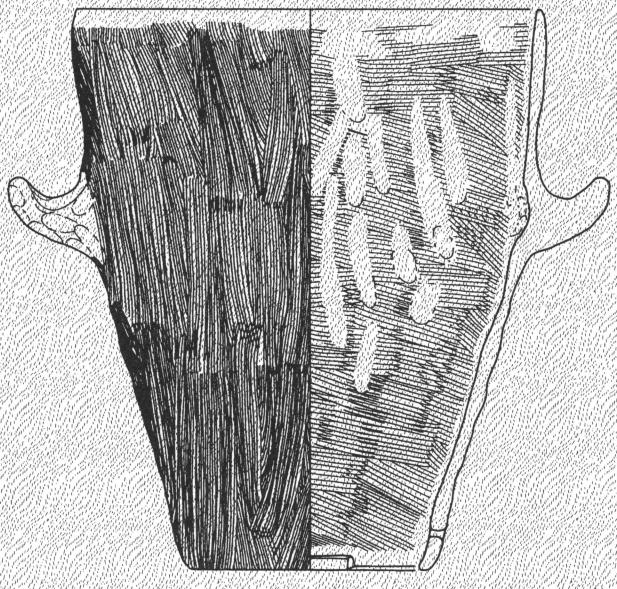
III 調 査 研 究



居館と囲郭集落のあいだ

伊勢湾地方を中心として

石黒立人

Ⅰ．集落研究概観

弥生時代の集落は決して単純ではなく、さまざまな類型に区分できる。

瀬戸内海地方に特に集中する、海や平野を丘陵などの高所からのぞむ位置にある集落は小野忠熙氏によって「高地性集落」とよばれ、その消長が軍事的緊張に関係するとして「倭国大乱」の議論にまで及んだ(1)。

また、弥生時代の遺跡を調査するとしばしば検出される〈住居跡群を囲む溝〉は、その溝を環濠とよび、環濠によって囲まれた集落を環濠集落（あるいは環溝集落；わたしは囲郭集落とよんでいる）とよぶことによってその一般性が浮き彫りにされた結果、集落の基本施設として認識されることになった。環濠集落が多数検出された関東地方では環濠がすべての集落に伴わないことから、環濠をもつ集落ともたない集落の差について関心を向けさせることになり、両者は田中義昭氏によって拠点型と周辺型に区分して整理された(2)。

関東地方では大規模な開発にともなう発掘調査が進行して集落全体が明らかになることが多かっただけでなく、歳勝土・大塚遺跡のように集落と墓を同時に考えることのできる環濠集落の実例は、登呂遺跡以後の弥生集落の典型のようにさえ扱われるようになった。

それに対して西日本では集落の全体を調査することはまれで、そのため調査が小規模でも遺跡の有無によって識別できる「高地性集落」という概念は有効であった。だが、「高地性集落」集中地域における集落の区分は決して十分に行われているとはいえず、この点では石野博信氏による「高城と水城」(3)という対比に示されるような「高地性集落」に平野部の「環濠集落」を対比させようという動きは評価されるものであった。

近畿地方では安満遺跡や池上遺跡の調査もあって環濠集落への関心は一定程度あったものと思われるが、大多数は部分的な調査に終始したために、研究の盛り上がりに欠けるところがあった。環濠集落とはいっても単に大溝を検出したにすぎない例もあり、目に見えるかたちでの集落の把握はなかなか困難であったからだ。そのこともあって、特に社会的緊張を語る場合には環濠集落ではなく「高地性集落」に焦点があてられることが普通であった。そうした近畿地方にあって集落研究は、内部構造よりは外形や大小、継続性の分析に基づくモデルを中心とした研究に重心をおく以外になかったように思われる。

原口正三氏は大阪府安満遺跡とその周辺の遺跡を関係づける概念として母村／子村とい

う関係モデルを提出されたが[4]それもこうした事情によるものであろう。このモデルは一見するところ関東地方における拠点型集落／周辺型集落という区分の提示と一種平行的ではある。けれども、拠点型・周辺型という区分が環濠集落に焦点があるとはいえ、集落の動態と無関係に現象を整理するための固定的なモデルとして提示されているためにスタティックであるという印象は免れない。それに比べて近畿地方のそれは、環濠集落と高地性集落との関係をも議論の射程に入れており、よりダイナミックに発展させることができる可能性を秘めていた。

このように、「高地性集落」はもっぱら西日本の瀬戸内海周辺地方で、「環濠集落」は北部九州・近畿地方・関東地方で研究の蓄積をみた。

さて現在。弥生集落論が低迷する中で、拠点集落については酒井龍一氏が社会分析の基点として注目し、セツルメントシステムの構築を行っている。しかし、酒井氏の拠点集落概念はきわめて類型的で一般的な集落という意味が強く、均質な要素以上のものにはなっていない。集落の内容が明かではない状況でのモデルといえる[5]。

最後に。吉野ヶ里遺跡の調査以降、一般的な集落と首長の居住する居館との区分が新たな問題として浮上してきた。居館については古墳時代の事例が関東地方で多数調査され、三ツ寺遺跡に代表されるように突出部をもつ〈方形館〉に集約される傾向をみせている[6]。こうした方形館は古墳時代初期の例が大分県小迫原遺跡で検出されるに及び、弥生時代との連続性を見いだすことができ、武末純一氏は福岡県比恵遺跡や佐賀県千塔山遺跡なども居住区が方形プランを呈することから居館である可能性を指摘するとともに、弥生集落を円形、居館を方形にたとえて両者が重なる弥生時代から分離する古墳時代への動きをモデル化した[7]。吉野ヶ里遺跡はそうしたなかにあってヤマタイ国ヒミコと関連づけられたためにセンセーショナルな話題を提供したが、中心居住区が方形に近似したプランであることと突出部をもつことが居館であることを示していると見なされているようだ。

以上関係する部分を概観した。弥生集落の研究は、当初遺跡立地に始まり、その規模や構造など、さらには社会を探るための動態的な把握へと進んだ。そして酒井龍一氏のように集落個々の特性を表面化させることなく社会復元モデルの構築を目指す立場がある一方で、下条信行氏のように地域・環境特性に基づいた村落の成立を弥生社会の分業体制を視点にすえて把握する方向も出されている[8]。私も村落の存立基盤を環境との相互作用におく立場で伊勢湾地方を中心として若干のモデルを提示したが、内容については今後の検討に委ねなければならないという限界があった。

私は、現在の弥生集落研究は、集落相互の関係から社会を復元するだけではなく、集落がいかにその時代を語るか、断片的な考古学的事実が集落によってどのように説明される

かという点に焦点が絞られる必要があると考えている。弥生集落と言えば、それですべてが説明できるわけではないだろうから。その点で居館は、集落を語る上で無視できないものである。それは環濠に代表される排除の論理が典型的に現象化されたものだからである。

以下では、居館を視点にすえて議論の展開を図ることにする。

II．弥生時代の居館と可能性

A．一般的な集落とそうでない集落

集落が人工的であることにだれも異存はないであろう。しかし、集落にもさまざまあって、それぞれ人工的といえる程度にも差がある。

「高地性集落」と「環濠集落」を比較した場合はどうか。遺跡の位置が高いか低いかは生産基盤や居住地などの自然環境条件との関係によって決定されることもあり、ただ単に高いところに集落が営まれている場合もあるのに対して、集落を囲む溝を掘るか掘らないかの決定は自然環境条件ではなく集落を営む集団固有の条件や社会環境条件に規定されるものである。そして「高地性集落」とされたものの中にも環濠をもつものともたないものの差があることを重視するならば、「高地性集落」自体にすでに性格の差があることになる。ただ高い位置にあるというだけの遺跡と、低地と同様の性格をもった高地の遺跡という差である。

してみれば、概念的にみて環濠集落のほうが高地性集落に比べて人工的な集落としての意味あいが強いものとなる。そして人工的である環濠集落にも環濠プランが自然地形（等高線ライン）に一致して卵型や楕円形などの曲線区画を呈するものと、自然地形と一致することのない方形（幾何学的）区画とに区別が可能であり、これについて自然適応的プランと計画先行的プランという言い換えが可能かもしれない。そして後者の計画先行的プランが一般的な集落に対応しないのであれば、そこに非一般的な集落をみる視点をおくことができることになる。問題はそれが「居館」として扱えるかどうかである。

一般的な集落とそうでない集落という対比を行うときの困難は、一般的な集落の存立基盤をただ水田耕作を中心とした体制に求めれば良いのかという点である。可耕地近傍に集落が営まれること、このことは一見当り前のようであるが、発掘調査によって対応関係が明確になった例はきわめて少ないのが実状である。弥生集落の近傍には可耕地があるはずだとして地図上に復元することも試みられているが、可耕地が推定できるからといって実際にそこで水田耕作が行われたと断定できないわけだから、なんら問題の解決にはならない。かえって問題を増やすだけだ。(9)

一般的な集落とは、ある意味で酒井龍一氏がいうところの拠点集落としておくのが便利であるようにも思える。だが、そうすると平野からはずれた山間部や平坦地の少ない海岸部にある集落は一般的ではないことになる。この点については、酒井龍一氏のいう拠点集落に問題がある。拠点集落は平野・平地に占拠する集落に限定されているのであり、それ以外を含めて大きく議論されているわけではないからだ。

以下では一般的な集落と一般的ではない集落についての区分を試みることにしよう。

ａ．弥生時代前期

伊勢湾地方では近年遠賀川系土器を出土する遺跡の調査例が増加している。それらの内、集落としての形式が把握できたものは、いずれも環濠を伴っている。そこで注目すべきは、台地縁辺に位置する永井・大谷・高蔵（おそらく白石も）は２条の溝が平行して掘削されている多重環濠のグループであるのに対して、平野微高地に位置する中之庄・松河戸・山中、そして現在調査中の月縄手は１条の溝が掘削されているのみであるという差である。遺跡は削平されているものが多いので溝の規模などを比較するわけにはいかないが、１条と２条という差は、立地差とも相関しており無視できないものがある。そして、このうちもっとも重要と思われるのが高蔵遺跡の様相である。高蔵遺跡のあるあたりは名古屋台地の南に続く熱田台地で、当時の海岸線からみて伊勢湾に半島状に突き出た部分に相当すると考えられる。つまり、水田稲作との関連を考えることはできないということである。

高蔵遺跡は全貌を伺うには困難も大きいが、これまで調査された範囲から規模を推定すると南北200ｍの広がりはあったと思われ、他が100ｍ以下であるのにくらべて格段に規模が大きい。高蔵遺跡は周囲に可耕地が推定できないにもかかわらず大規模であるという点において、一般的ではない集落と言うことができる。

ｂ．弥生時代中期

弥生時代中期では、朝日遺跡が一般的ではない集落の代表である。中期初頭の環濠区画以外にも大溝で区画される居住区が複数並存する居住域、大型方形周溝墓の存在、玉作・貝の加工などの複数の生産部門、他地域からの土器の搬入など、複雑な内容をもっている。中期末にも少なくとも３重の環濠を巡らし、南部外郭には柵や逆茂木を備えている。

朝日遺跡の南西約５kmにある阿弥陀寺遺跡は、中期末に環濠が造成され部分的には多重化が行われている。朝日遺跡では観察できなかった竪穴廃絶後の土器などの廃棄も認められ、居住域内部空間の自由度が朝日遺跡に比べて幾分かは高い印象を受ける。

阿弥陀寺遺跡北西約1.5 kmにある森南遺跡では、ほぼ同時期の集落が調査されている。全体像の復元は困難だが、中期末に環濠の造成は行われておらず、当該期には移動した模様である。移動先が近接した阿弥陀寺遺跡であるかどうかは不明だが、阿弥陀寺遺跡よりは

下位に位置づけることができそうだ。

これら朝日・阿弥陀寺・森南の3遺跡は尾張平野南西部の平野低地部において5㎞圏内で近接して並存する遺跡であるから、その差は遺跡の性格の差として見ることは可能であろう。朝日遺跡に比肩できる遺跡はおそらく他にないと思われる。阿弥陀寺遺跡は酒井龍一氏の言う拠点集落の要件をみたしているようであり、普通の集落と位置づけておこう。

c．弥生時代後期

弥生時代後期には名古屋台地周辺に注目される遺跡が出現する。瑞穂遺跡は遺構検出面での幅5～6m、深さ約4mという大規模な溝が2条検出されており、見晴台遺跡が同程度の溝があるとはいえ1条であることに比べて特筆される。ほかに2条検出されている例には山王山遺跡がある。平野部微高地では朝日遺跡以外それほどでもない。いずれも部分的であり、全体像はわからない。

弥生時代後期では、静岡県浜松市伊場遺跡が注目される。伊場遺跡は南部の一部が未調査であるが、ほぼ全体像を復元することができる遺跡である。居住域内部に各種遺構の検出はできなかったようだが、環濠は3条あり、しかも特異なプランをなしている。おそらく、これだけの要素をみるだけで一般的ではないと言えるだろう。

さて、伊場遺跡環濠のプランはいびつな瓢箪形を呈している。しかし、北部にある東西の環濠屈曲部分に注目するなら、これらがほぼ相対する位置にあり、この部分を結ぶと略方形区画が浮かび上がることを重視する必要がある。しかも南側の残りの部分も略方形のように見えるのである。このように、伊場遺跡のいびつなプランは二つの方形プランが連結した可能性を示しているのである。つまり、伊場遺跡の環濠は、その内部が主郭・副郭に分かれるのであり、その境界が未検出であるのは溝ではなく、柵あるいは土塁による区画が行われていた可能性が高いからだと考えることができる。

伊場遺跡の主郭は、おそらく居館であろう。しかし、これが居館の分離しつつある姿であるのかどうか。私は、これはそうではなく、これが弥生時代集落のうち、居館を含む集落（あるいは居館そのもの）の基本形態ではないかと考える。

B．集落と居館

a．囲郭集落の類型

囲郭集落は以下のように大きく3つの類型に区分できる。

第1類型：居住域が溝などによって囲まれるだけのもの

第2類型：居住域が溝などによって囲まれるだけでなく、居住域内部も溝などで区画されて複数の居住区に分かれるもの

第３類型：複数に分かれた居住区の中に中心居住区（主郭）が識別できるもの

これらは、第１類型が複数集まったものが第２類型、第２類型の区画のあり方から中心居住区が想定できるものが第３類型というように、一定の階梯関係にある。

この区分によれば、ヒミコの居館と騒がれた吉野ヶ里遺跡は、複数の居住区に分かれるわけではないけれど、中心が識別できる点で第３類型として把握されることになる。吉野ヶ里遺跡は、内容はきわめて単純で、外郭（副郭）・内郭（中心居住区：主郭）の区分が同心円構造をなしている。ある意味では単純に検出されたために理解しやすかったということになろう。

弥生時代の集落で環濠集落とされているものは第１類型がほとんどで、第２・第３は極めて少ない。ただ、この第２・第３類型は広範囲に調査しなければわからないのだから今後も増加するかどうかは心許ない限りである。

さて、第２類型、第３類型については、それぞれ該当する遺跡があるので触れておこう。

朝日遺跡では、環濠区画とそれとは別に区画された複数の居住区が並存している。つまり、大きくみれば朝日遺跡は環濠区画が主郭、それ以外が副郭という区分ができるわけで、この点で伊場遺跡が主郭・副郭の単純モデルとして、両者を一種相似的な位置関係に置くことができる。第３類型にあてはめることは可能である。

奈良県唐古遺跡は、大環濠帯と呼ばれる外郭をもち、内郭は何条もの溝が走って区画されている。区画単位の実態についてはあきらかではないけれども、区画のどれかが主郭である可能性がある。いちおうは第２類型と考える。

長野県長野市松原遺跡は、これも溝によって区画された複数の居住区が並存している。主郭相当が存在するのかどうか詳細な検討は報告に委ねなければならないにしても、東日本の集落としては特筆されるものである。第２類型である。

伊場遺跡は上述したように、主・副２つの居住区の並存が考えられ、第３類型であるか、居館そのものということになるが、吉野ヶ里遺跡を含めて考えれば弥生時代中期と後期では第３類型の形が異なる可能性もある。後期はより単純化している様相が窺えるのであり、つまり中期の複雑性から後期の単純性への変化、これは社会そのものの成層化の新しい段階に対応しているのかもしれない。

弥生時代前期はこれまでのところ第１類型が圧倒的である。だが、高蔵遺跡では弧状溝に交差する溝が検出されているから、あるいは第２類型である可能性がある。

以上のように、囲郭集落の第１類型と第２・第３類型の間には大きな格差が存在する。そして、居館が第３類型のなかに存在する可能性の高いことはほぼ認めることができるだろう。あるいは、現状の調査限界で第２類型ではあっても、実は第３類型であるという場

合も当然でてくるであろう。第2類型であることは、一方では集落としての求心力が要請されるわけだから、そのことだけでも中心の存在、それの実体化されたものとしての中心居住区（主郭）の存在は予想されるからである。

居館は、第2類型、第3類型に含まれている（あるいは第3類型自体が居館である）状況のほうが考えやすいが、といって単独に存在することがないということもできないのである。

b．居館と大形建物

弥生時代には大形建物がある。もちろん、弥生時代に限定されるものではなく、縄文時代・古墳時代にもある。しかし、ここで問題にしたいのは、集落の内容としての住居様式で居館が識別可能かと言うことである。あるいは、掘立柱建物、とくに高床倉庫の存在によって居館が識別できるかどうかである。

上述したように、弥生時代に居館が想定できるとしても、それは集落に内属しており、独立して把握することは難しいであろう。実際のところ環濠集落において居館が想定されているのは九州の例に限定されているといっても過言ではない。その場合には、倉庫群の存在が指標とされているようだが、近畿以東ではそうした事例に接することはほとんどない。倉庫自体の認定が難しいのである。

そこで、大形建物に注目することにしたい。大形建物には2種類あって、竪穴式系と平地式（あるいは高床式系）がある。最近滋賀県内では後者の大形建物が検出されているようだが、しかし床面の確定は遺跡の遺存状態しだいで困難なこともあり、柱穴が6本以上であるから平地式・高床式である、ということにもならないから、大形建物があるというにとどめておいたほうがよかろう。

つまり、主柱が6本以上で、想定される床面積が80㎡以上を典型として考えたい。もちろん、4本柱でも床面積が80㎡以上であれば大形建物とする。この床面積80㎡という点にとくに根拠があるわけはないが、大形建物と言う以上は通常の建物の拡張可能範囲を超えた面積を指標とする必要があると考える。結果的に大形化したものではなく、当初から大形として建てられたものに限定したいからである。

大形建物は、関東地方で検討されたことはあるが、近畿地方以西ではそれほど十分な検討が行われてはいない。そして、九州の居館も大形建物の存在によって示されているわけではない。

大形建物の性格については、集会の場、共同作業の場、などいろいろいわれている。集会の場は、何らかの機会に集団成員が集まるために必要であり、居館の場合にも当然必要になろう。同じく集会の場としては広場があり、これも同様に居館の要素にあげることが

できる。この２つが第１類型に見られれば、居館の可能性はかなり高くなるのではないかと考える。それに倉庫が加われば完全であろう。

大形建物が共同作業の場である場合は、それが集落のどこに位置するかが問題となる。第１類型であれば、居館との関わりを考えることは難しくなるが、第２類型、第３類型では居館を構成する要素であることも考えれるからである。つまり、居館内部か、居館近傍か、居館から遠いか、ということになる。この点は通常の工房跡の取扱にも関わってくる。

このように、居館の指標を倉庫の存在に求めるか大形建物の存在に求めるか、こうした問いが設定できること自体からみても、居館は自律的に決定できるものではないのだ。

ｃ．居館と工房

朝日遺跡では玉作遺構あるいは玉作が行われたと考えられる地点が３ヶ所存在する。そのうち２つが環濠区画内と外縁にあり、主郭内部あるいは近傍に設けられているといえる。残りの１つは東墓域下層にあり、その南には大小２棟１単位の掘立柱建物３単位からなる掘立柱建物群がある。この場合には、掘立柱建物群に隣接して玉作工房を含む竪穴建物群が存在すると言うほうが適切かも知れない。すなわち、掘立柱建物群から構成されるこの地区が中心居住区である可能性も生じることになる。しかし、仮にそれが中心居住区であったとしても、区画の溝は検出されていないから、これまで述べてきたような〈居館〉とは区別されることになる。これまでのところ、居館に内属する工房の存在を窺うことができる資料は得られていない。

Ｃ．居館と集落の関係

弥生時代の居館を単独で把握することはおそらくかなり難しいだろう（吉野ヶ里遺跡にしてもだれも当初居館とは考えなかったであろう）。また、居館を古墳時代の事例から遡らせて類型設定することも、方法的には正しくないであろう。弥生時代の居館は弥生時代の集落の中に位置づけられて初めて意味をもつのだから。

弥生時代の集落は囲郭集落と非囲郭集落にわかれ、前者に居館が関係しそうであることは上述したとおりである。そして、囲郭集落でも内部が複数の居住区に区画され、そこにその地域の他の集落にはない生産部門が属している場合、その囲郭集落に居館が内属している可能性が高いと考えた。複数の居住区、複数の生産部門を抱えるという複雑性は、内部の不均質さを示しているのであり、そうした不均質な部分が分解に至らないための求心力を生じる中心が、集落にあっては居館ではないか、というよりそうした部分が複雑性を必要としているとも言えようか。あるいは、居館というのが不適切なら単に中心と言い替えてもよい。

囲郭集落が通常の集落形態となっている段階には第２・第３類型に居館が存在する可能性のあることを指摘したのであるが、非囲郭集落が通常となっている段階には居館はどのようになっているのであろうか。

伊勢湾地方ではＡ期：弥生時代中期初頭、Ｂ期：中期中頃から後半、Ｃ期、中期末から後期初頭、Ｄ期：後期中ごろ、の４つの時期には非囲郭集落が通常形態となっている(10)。

これらの時期に属す調査例が極めて少ないという現状のなかで、朝日遺跡ではＡ期に上述したような玉作工房の存在する地区を付随させて掘立柱建物群（大のほうは梁間２間であるから相対的には大形建物と言うことができようか）が存在し、またＣ期にも南北両面に庇のついた掘立柱建物を中心的建物とする一群の地区があり、溝による区画の存在は不明確だが、特異な存在として注目される。

これらは囲郭集落としての居館ではないけれども、弥生時代の居館がすべて区画を有していたといえるほど確定的ではない現状では、これらも〈類居館〉として把握しておくことにしたい。

Ⅲ．居館の出現と展開についての予察

弥生時代には、何ほどか中心的な部分が現れる。もちろん中心的とはいっても、それがすぐさま居館として認定できるわけではない。しかし、私たちは武末氏が提示したものとは別のモデルを提示することもできる。

まず、中心的部分（居館）が一般的な集落とは別に独立して存在する局面を局面Ａとして位置づける。一般的な集落から中心（居館）が析出するのではなく、一般的な集落の成立と同時に、あるいはすでに何程かの中心が形成されている状況を考えようとするものである。この場合に居館のプランとして強調されている方形区画は、後出的なものとして扱い、当初の居館を規定しないという立場を取りたい。つまり、第３類型の展開の中だけでなく、第１類型の展開の中にも居館の存在を見ようとするものであり、したがって時期的には弥生時代前期をもその射程に含めることになる。しかし、現実的には、局面Ａにおける居館の現れを見極めるのはきわめて困難であるだろう。伊勢湾地方では高蔵遺跡の様相が特異であり、第１類型であるのかそれ以外であるのか、判断に迷うが、とりあえずは農村的ではない点を重視してこれからも注目していきたい。

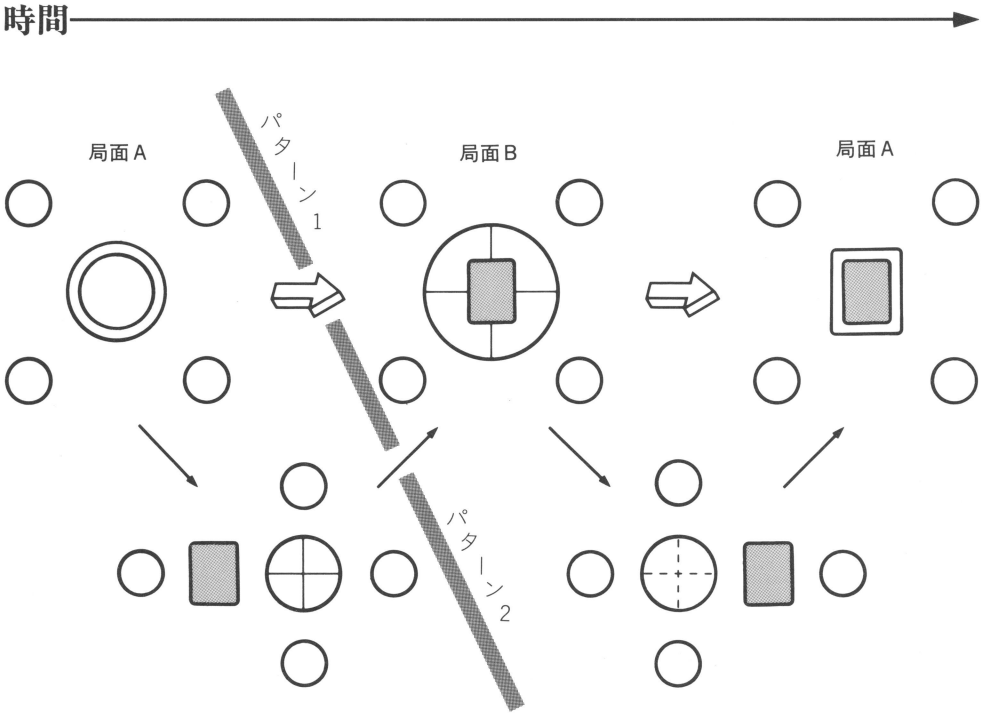
次に、弥生時代中期に典型化する第２類型、あるいは第３類型の囲郭集落の内部に居館が含まれる局面Ｂを考える。ただし、この場合には居館が当初から囲郭集落に内属して第３類型となっている状況と、第２類型の囲郭集落に隣接して並存する状況の二つのあり方を考えることができる。後者は、局面Ａから局面Ｂへの移行にあって、武末氏の提示した

居館が集落から離脱しつつある段階のモデルを反転して、第３類型の囲郭集落形成の直前段階を想定するものである。

つまり、第３類型の囲郭集落形成にあっては、パターン１：居館を中心に第３類型が形成される、パターン２：第２類型が形成されて後に居館が内部に移動して第３類型になる、二つの型を想定する。そして、パターン２については、ａ：第２類型の囲郭集落と居館が並存、ｂ：第２類型の囲郭集落内部に居館が定着して第３類型を形成する、というａからｂへの移行を想定する。そして、この段階になって方形区画が中心を示すものとして定着すると考える。

弥生時代中期には、弥生時代前期にくらべてはるかに集落規模の格差が生じ、成層的な外観を呈している。かりに大形集落の形成が弥生時代前期後半にあるならば、その時点で局面Ｂに移行することも考えられる。(11)

凹線紋系土器波及期は、在来の第２類型（および第３類型）の囲郭集落が崩壊して小集落の分散となる。そして、新たに掘立柱建物を高い頻度で構成要素とする集落が出現する。現状では、居館の実体は不明だが、第２類型・第３類型の囲郭集落が不明確であることから、局面Ａである可能性は高い。



第１図　居館と囲郭集落

弥生時代後期は、一見弥生時代前期と類似した集落の展開が窺える。弥生時代中期のような成層的な集落規模格差は無くなって、第１類型の囲郭集落の展開を基盤に居館が散在するのではないか、と予想される。かりに、規模格差があるとすればそれは成層的ではなく、中期以上に隔絶した(おそらく第１類型と第３類型の鮮明な対立)関係になろう。そして、これまでのところ、居館に相当しそうな集落は第３類型の囲郭集落に限定されており、実際第３類型自体が居館であることも考えられるので、局面Ａとして位置づけられる可能性が高い。

以上、局面Ａ→局面Ｂ→局面Ａという変遷を想定した。非囲郭集落としての居館の様相は把握が困難であるが、囲郭集落時には第３類型に含まれる弥生時代中期と、含まれるとすれば特異であり、第３類型の囲郭集落それ自体が居館である可能性のほうが考えやすい弥生時代後期という大枠の設定を試みた。いずれにしても実態の把握が急務であり、将来あらためて論じることもあるだろう。

註

(1) 高地性集落の研究については、森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究　7　弥生集落』1986、に詳しい。
(2) 田中義昭「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』25－４、1979。
(3) 石野博信「３世紀の水城と高城」『古代学研究』68、1973。
(4) 原口正三『高槻市史』考古編、1973。
(5) 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』３、1984。他一連の業績。
(6) 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』資料編、1988。
(7) 武末純一「紫川の吉野ヶ里－北九州市上徳遺跡－」『古文化談叢』23、1990。26頁第２図参照。
(8) 下条信行「弥生時代の玄海灘海人の動向－漁村の出現と役割」『横山浩一退官記念論文集』Ⅰ、1991。
(9) 遺跡を認定する方法としては不確定要素が大きいだけでなく、自然環境が変化するという基本的認識が欠如している場合もまま見られる。
(10) 朝日遺跡は中期前葉に囲郭集落を形成するが、同時期に囲郭集落化する例は他にない。まだ発見されていないのかもしれないが、私はそれより朝日遺跡の集落設計が大幅に変わるというのが実は個別的事情、つまり朝日遺跡における中心の形成による構造変化である可能性が濃厚だと見ている。それが以下にのべる局面Ｂである。
(11) 大形集落内部に居館が析出される過程は明らかではない。また、大形集落成立の起動因に居館があるかどうかも不明である。しかし、大形集落の形成が人々の集住によるとしても、大形集落は(土器編年の細分問題は留保するとして)長期継続の結果ではなく突如出現することもありまた突如消滅することもあるのだから、単に人口増加を原因とするものではないということは言える。したがって、遠賀川系土器成立以降の時代にあって、当初は平板であり後に社会的成層化が進行するなかでいわゆる首長(層)が析出され、それに対応して居館が成立するというのは、私にはきわめて発展段階的な図式に影響された発想に思える。
　私はそうではなく、逆に何らかの要因によって(この要因を明らかにするのが重要な課題であると考えるのだが)大形集落が形成され、その結果それまで通常の集落とは距離を置いていた部分(後の居館：通常の集落と同時かやや遅れて成立したと考える)が、大形集落の近傍へ引き寄せられ、そして内部に移動し、さらに中心を占めるようになるという、そうした動きも考えたい。すなわち、“並存から共存・共生、そして寄生”、あるいは異質な部分が秩序化されることによる社会の垂直方向への分化。おそらく、その基礎には組織的な武力の保持があったのではないか。

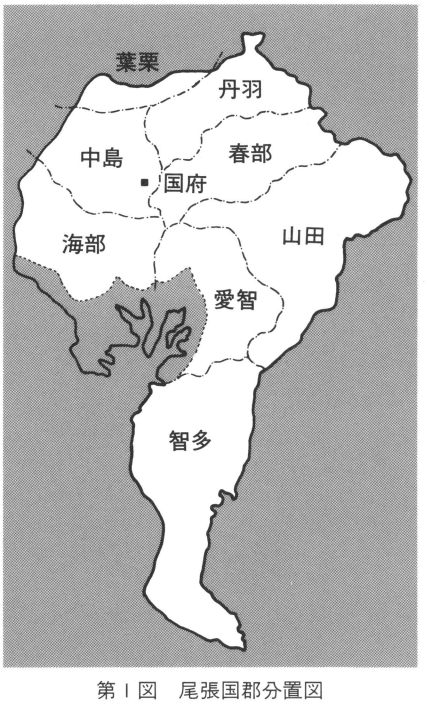
古代尾張をめぐる若干の問題

服部信博

1．はじめに

東西日本のほぼ中央部に位置する「尾張」は、その地理的条件もあって日本史上において何度となく重要な役割を果たす地域として登場する。例えば、…弥生終末期から古墳初頭にかけて邪馬台国と争った狗奴国を伊勢湾沿岸地域（特に「尾張」）に求める考えは最近話題にされることが多い。また、継体天皇即位に関してその強力な後ろ楯となった氏族のなかに「尾張」を支配下においた尾張氏がいた。そして何よりも中世社会を打破し、新たな時代を築き上げる原動力となった戦国の英雄織田信長は、この「尾張」を出発点として天下統一へと羽ばたいていった。…これらの時代については、古くより文献史学の立場から、考古学的にも発掘調査の増加により数々の論文が発表され活発な議論が繰り広げられている。しかしながら、ここで問題とした、古代の「尾張」に関しては、文献学的にも考古学的にみても史・資料が不十分なこともあって、その調査・研究は著しく停滞しているように感じる。

古代の「尾張」は、『延喜式』によると上国とみえ、海部・中島・葉栗・丹羽・春部・山田・愛智・智多の８郡から構成される。その領域は、現在とは若干の変動があるものの概ね、北・西は木曽川、南は伊勢湾（海部郡佐屋町～熱田神宮を結ぶラインが海岸線）、東は境川に挟まれた地域であり、地形的には、木曽三川によって形成された肥沃な濃尾平野域とその東部に広がる洪積台地および丘陵部とに明確に区分することができる。そしてこれらの地域には古代のエクメーネを伝える多くの遺跡が分布している。そこで本稿では、古墳、古代寺院、延喜式内社等の分布状況を概観し、さらに文献史学の成果を援用しつつ、古代「尾張」に関する若干の問題(とりわけ国府の設置に関して)を考えてみたい。



第１図　尾張国郡分置図

2．古墳・寺院・式内社の分布

a）古墳

「尾張」における大型古墳の築造・動向（第2図）に関しては、4世紀半ば頃尾張南部の海岸線沿いの平野部に奥津社古墳（前方後方墳？）・二ツ寺神明社古墳（前方後円墳）が、尾張北部の「東山道」筋の丘陵域に東之宮古墳（前方後方墳）等が築造され、「尾張」も本格的な古墳時代へと突入する。その後大型古墳の築造は、「尾張」東部の洪積台地・丘陵部を中心に展開していき、平野部における造営は現状では確認することはできない。造墓活動の主体は、概ね「東山道」筋を中心とした地域から、5世紀後半頃に庄内川中流域及び名古屋台地へと移動するかのような動きが認められ、6世紀初頭には「尾張」一帯を完全に掌握下におくかのようにヒエラルヒーの頂点として東海地域最大の前方後円墳である断夫山古墳が築造される。

続く後期群集墳・小古墳の分布状況は、第3図に示したように、基本的には大型古墳の分布と同様に引き続き「尾張」東部の洪積台地・丘陵部を中心に展開し、平野部における分布はほとんど認められない。しかしながら、大型古墳の状況と若干異なるのは、一宮市北部の犬山扇状地扇端部周辺（浅井古墳群）や瀬戸市を中心とした丘陵域（穴田古墳群他）等新たに群集墳が築造される地域が登場し、また、海部郡を中心とした当時の海岸線にそった地域にも僅かながらではあるが古墳時代後期の小古墳が築造されるようになる。

これら新たな地域への古墳の出現は、時代の進行とともに未開拓地域への開発が進み、エクメーネが拡大したことを示していると言えよう。

b）古代寺院

「尾張」における7・8世紀代に築造されたと考えられる古代寺院跡または寺院跡の可能性があるものは、第4図に図示したように現在までに41ヶ所ほど確認されている。旧郡別の寺院数は、海部8ヶ所・中島9ヶ所・葉栗3ヶ所・丹羽5ヶ所・春部4ヶ所・山田3ヶ所・愛智7ヶ所・智多2ヶ所である。

寺院跡の分布は、古墳時代の状況とは大きく異なり、ほぼ「尾張」全域で確認することができるようになり、東部の洪積台地・丘陵部から平野部への進出が顕著に認められる。とりわけ古墳の分布が著しく少なかった海部郡・中島郡といった平野部における爆発的な増加は注目に値する。

各寺院・遺跡出土の軒瓦の型式分類を手がかりに、梶山　勝氏が興味深い分析を試みられている。それによると「尾張」国内の白鳳期に属する寺院跡は、以下の大きく3つのグループに分けることができるという。

一つは当地方最古の寺院と考えられる長福寺廃寺を中心とした丹羽郡・中島郡・春部郡にまたがる「尾張」北東部グループ（素弁蓮華文の百済様式の軒丸瓦を使用）

二つ目は、「尾張」北西部の葉栗郡黒岩廃寺を中心としたグループ（複弁蓮華文軒丸瓦を使用）

三つ目は、「尾張」南部の海部郡・愛智郡・智多郡を中心としたグループ（様々な軒丸瓦を使用するが、同型瓦・同笵瓦の分布から一つにまとめることができる）

これらグループの存在に関して、梶山氏は、軒瓦を含めた瓦の供給を通じての、経済活動の結びつきを示しているものとされ、それらグループの接触地域ともいえる中島郡に国府が置かれるのは政治的な配慮がなされたものと推定されている(1)。

c）延喜式内社

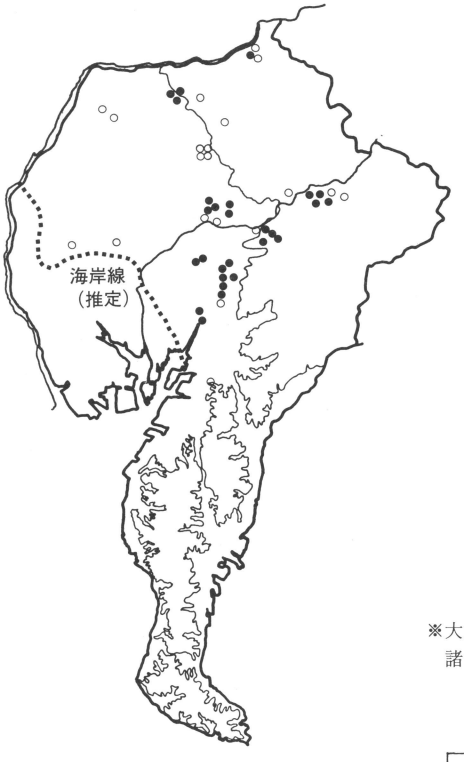
延喜式内社（以下、式内社）は、延長5（927）年に制定された『延喜式神名帳』に記載された神社である。式内社は、長い歴史的変遷の過程で移動したものや廃絶したものが多々あり、その所在地に関しては確定されていないものが多く、分布状況を検討するうえで若干の問題を残す。しかし、この式内社は、確実に10世紀前半以前に存在した神社とみなすことができ、また、式内社の祭神のなかには古代氏族と直接結びつけて考えることができるものもみられ、古代の地方における勢力状況を推察するためには欠くことのできない検討対象であると言えよう。

『延喜式神名帳』によれば、「尾張」における式内社は、第5図に図示したように121座（大社8座・小社113座）を数え、ほぼ同地域にあたる参河の26座・美濃の39座に比して、異常とも言えるほどその設置数は多い。各郡別の式内社数は、海部8座・中島30座（大社3座）・葉栗10座・丹羽22座（大社1座）・春部12座・山田19座・愛智17座（大社4座）・智多3座となる。

この式内社の分布状況は、概ね古墳文化の展開が顕著であった地域とほぼオーバーラップする形で点在しており、海部・智多郡といった海岸部に面する地域には比較的その分布は少ない。しかしながら古墳時代の状況と決定的に異なるのは、最も古墳の分布が希薄な地域であった平野部の中島郡への大量進出であり、30座という式内社の数は他郡のそれと比較して圧倒する。古代寺院の分布のあり方と同様に興味深い。

3．古代尾張をめぐる若干の問題

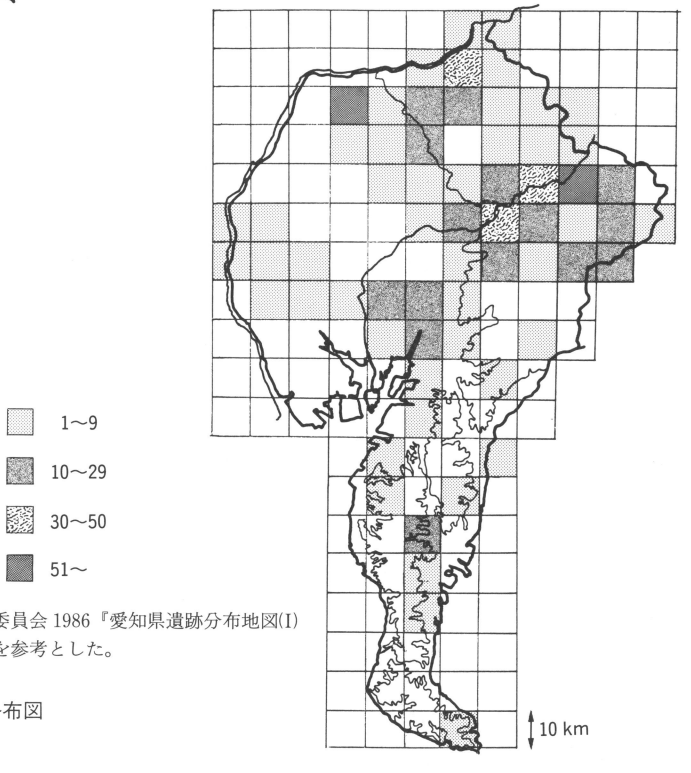
前節で、「尾張」における古墳・古代寺院・式内社の分布状況を外観してきた。その分布状況を簡単にまとめてみると以下のようになる。古墳の分布は、概ね「尾張」東部に広がる洪積台地域を中心に展開しており、平野部への進出は顕著ではなかった。それに対し、



◀ 第2図　大型古墳分布図

○ Ⅰ～Ⅲ期
● Ⅳ～Ⅵ期（須恵器出現以後）

※大型古墳の編年は，赤塚次郎 1989「断夫山古墳をめぐる諸問題」『断夫山古墳とその時代』を参考とした。



※後期古墳の分布図は，愛知県教育委員会 1986『愛知県遺跡分布地図(I) 尾張地区』及び各市町村分布図等を参考とした。

▶ 第3図　後期古墳分布図

▶ 第4図　古代寺院分布図



※古代寺院の分布は梶山勝 1992「尾張の古代寺院と瓦」
『古代仏教東へ―寺と窯―』を参考とした。



● 所在地がほぼ確定している式内社
△ 複数の候補地がある式内社

※式内社の分布は，式内社研究会 1989『式内社調査報告
第8巻尾張国』を参考とした。

第5図　延喜式内社分布図◀

古代寺院・式内社のそれは大きく平野部に進出してきており、古墳と古代寺院・式内社の分布とに見かけ上大きなズレを認めることができる。これは、当然、古墳と古代寺院・式内社との間に時期差のあることを示唆しており、時代とともに進行していった開発の波は、居住域及び生産域を拡大させ、古墳時代に形成された地域間の枠組みを変化させていった状況を物語っているものと考えられる。

しかしながら、先に示した4枚の分布図（第2図から第5図）を詳細に眺めていくと、基本的には古墳文化が発展した地域においては、引き続き古代寺院・式内社が造営されており、分布上のズレはほとんど認められない。例えば、「尾張」において逸早く古墳文化が展開した「東山道」筋にあたる丹羽郡や6世紀初頭に東海地域最大の前方後円墳である断夫山古墳を出現させた愛智郡等は、繁栄に比例するが如く古代寺院・式内社ともにかなりの数が築造されているのである。分布上大きく相違するのは平野部に設置された中島郡である。中島郡では古墳の分布がほとんどみられないのに対し古代寺院・式内社は「尾張」国内で最も多く築造され、全く対称的とも言えるほどの様相を呈している。この中島郡における状況がそのまま4枚の分布図における見かけ上のズレを表示することになった。それは、何よりも中島郡に国府・国分寺といった中央政府の重要な施設が設置されたことと無関係ではないであろう。

「尾張」の国府は、『倭名抄』によると、「国府在中島郡」と記されている。その所在地に関しては、江戸時代以来、種々の説が出され、近年、稲沢市教育委員会による発掘調査も実施されてはいるが、未だ確証となるものは確認されてはいないようである。しかし、現在の稲沢市周辺（中島郡）に設置されていたことは動かし難い事実であろう。また、国府の設置年代に関しては、史料不足もあって判然とはしないが『日本書紀』天武天皇元年（672）の記事に、2度にわたって尾張国司に関連する記載が登場する。この記載よりみて遅くとも672年以前に国府が設置されていた可能性を十分考えることができるであろう。

国府の設置に関して、野村忠夫氏は以下の二つの要因をあげて説明される(2)。一つは、国司の持つ機能を円滑に満たすことができる地域に置かれた…安定した立地条件・防御機能を果たす・交通の要所…。二つ目は、在地の豪族との関係、律令体制内における役割等を配慮して設定された。前者は地理的な要因、後者は政治的な要因と言えようか。

この野村説に基づき、「尾張」国府が設定された地理的・政治的側面を概観してみたい。

まず、地理的な側面について。国府が置かれた中島郡の周辺は、中小河川が網の目のように走り、それに伴う自然堤防の発達も顕著な地域である。その点よりみれば確かに安定した地形と考えられようが、現在確認できる三宅川周辺の自然堤防の形成は、鎌倉時代以降のことであり、国府はその下層に発達する幅狭の沖積上部砂層に立地しているという井

関弘太郎氏の研究成果がある(3)。また、国府設定以前の古墳の分布状況は、先に指摘したように東部の洪積台地・丘陵域を中心に展開し、中島郡を中心とした地域にはほとんど確認されていないという事実がある。このことは、平野部よりも東部の洪積台地・丘陵域の安定性を強く示すものであり、沖積上部砂層上に立地するとはいえ、相対的に、国府の立地を考えた場合、絶好の地とは言えないのではないであろうか(4)。防御的な面も平野の中央部に位置しており良好な場所とは思えない。しかし、従来から国府設定の要因として強調されてきた三宅川を利用した水運の利便性は絶好である(5)。陸路に関しても当時の主要街道であった東海道・東山道よりは遠く離れてはいるが、この両主要道をつなぐ街道沿いに国府が設置されており、水・陸ともに交通の要所であったとは言えるであろう。

次に、政治的な側面について考えてみたい。古墳時代の「尾張」には、かなりの数の豪族が蟠踞していたことが文献史料等よりみてとれる。なかでも尾張（連）氏は、「尾張」国造として巨大な支配権を振っていたことは改めて記すまでもないことであろう。ここで注目したいのは大化改新以降の尾張氏の勢力である。この時期の尾張氏の勢力を伝える史料は乏しいが、愛智・海部・春部・中島4郡の郡司に任命されており、引き続き国内最大の豪族としてかなりの勢力を有していたと考えられる。井上光貞氏は、この時期の国司と地方豪族の関係について、「国司と、郡司ないし郡司級の地方豪族との関係において、顕著にみられる一つの特徴は、国郡司制がすでに整っていたのにもかかわらず、国司があまりにも弱体で、郡司や郡司級の地方豪族を真に把握していなかったことである。」と指摘されており(6)それを具体的に示す事例として壬申の乱に功績のあった尾張国司小子部連鉏鉤の自殺事件をあげられる(7)。この指摘より、大化以後、国郡司制が成立していたにもかかわらず、「尾張」の政治的実権は、尾張氏が握っていたと推定できるであろう。

以上、「尾張」国府が設定された中島郡の地理的な様相及び政治的な背景について概観してきた。これに4枚の分布図からみられた状況を加味して、何故中島郡に「尾張」国府が設置されたのか類推してみたい。まず、第2・3図に示した古墳分布図が、基本的に地方豪族の勢力を現しているとすると、この分布図から、「尾張」東部の洪積台地域を中心に有力豪族が勢力を延ばしていた状況が考えられ、それを裏付けるように、尾張氏・丹羽氏等の豪族はこれらの地域を支配下に置いていたことが文献史料から明らかにされている(8)とすると、古墳分布が希薄な中島郡には、強力な在地勢力は存在せず、新たな勢力が入りやすい環境であったと推定することができ、寺院分布で梶山氏が指摘した複数の系統の瓦が錯綜する状況(9)は、それを端的に示していると思われる。これを当時の政治的な状況と重ねあわせ国府の設定を推定してみると、以下のようになる。

大化以後、国郡司制の成立により、国府設置の必要性が生じる。しかし、「尾張」国内に

おいて立地的に安定した東部の洪積台地上は、尾張氏を中心とした有力豪族が蟠踞しており、直接的に台地部に入り中央集権を行使するのは困難であった。故に、中央政府はそれらの有力豪族と一定の距離を持ち、その動きを牽制することができる地域に国府を置く必要性が生じ、在地勢力が希薄で、新たな勢力が入りやすい環境にあった中島郡に国府を設置することになったと想定することができるのではないであろうか。また、この地域は、従来、指摘されてきたように水運の利便性は絶好の地であった。

4．まとめ

前節で4枚の分布図を基にして、「尾張」国府の設定について考えてきた。従来、国府の中島郡設置に関しては、三宅川水運を利用した交通の利便性のみが取り上げられてきた。しかしながら、国府は中央政府が地方を支配するうえで最も重要な任務を得た官衙であり、その進出にあたって当然地方を支配する旧豪族層との関係は無視できぬことであったであろう。「尾張」国府の中島郡設置は、単に交通の利便性という一要因のみではなく、尾張氏という絶大な勢力を有した在地豪族との関係を配慮した極めて政治的な色彩の強いものであったと推定することができるのではないであろうか。

最後に、森　勇一氏、赤塚次郎氏、蟹江吉弘氏、山中　洋氏には多くの御教示を頂いた。記して謝意を表したい。

註

1）梶山勝1992「尾張の古代寺院と瓦」『古代仏教東へ－寺と窯－』
2）野村忠夫1970「国府と国分寺」『古代の日本』6中部
3）井関弘太郎1983『沖積平野』
4）全く不安定な土地であったわけではなく、沖積上部砂層上に古代寺院・式内社が多数設置されていることより、ある程度の安定性は認められるが、東部の洪積台地上の安定度に比すれば、絶好の地とは言えない。
5）水野時二1971『条里制の歴史地理学的研究－尾張・美濃・越前を中心として－』
6）井上光貞1965「壬申の乱－とくに地方豪族の動向について－」『古代史講座』11
7）この事件は、尾張国司が壬申の乱に大海人皇子方へ参加し功積をあげたにもかかわらず、乱後に自殺してしまったものである。井上氏は、これを尾張国司が自主的に大海人皇子方に参加したのではなく、周囲の事情（在地豪族：尾張氏）により、やむなく決断したためであるとされる。註6文献。
8）新井喜久夫1969「古代の尾張氏について」『信濃』21巻1・2号
9）註1に同じ

尾張猿投窯と尾北窯

～飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相～

城ヶ谷和広

1．はじめに

尾張は古代以来、全国的にも屈指の陶器生産国であった。古墳時代から飛鳥[1)]・奈良時代を通じて絶えることなく須恵器生産を続け、平安時代には灰釉陶器や緑釉陶器を生産する。文献では延喜式に年料雑器として長門と並んで「尾張瓷器」が見える。国内で初の本格的施釉陶器である灰釉陶器生産が畿内ではなく尾張で始まると言うのは大変興味深いことである。中世になると国内で唯一の施釉陶器である「瀬戸」や全国的に流通する「常滑」を生み出す。

古代尾張の須恵器・灰釉陶器生産はほとんど２つの生産地で行なわれていた。最大のものは尾張東部の丘陵地帯に立地する猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯とする）である。猿投窯は古墳時代から中世まで連綿と生産を行っており、窯の数は600基以上といわれている。５世紀中葉には須恵器生産を開始するが、開窯に当たっては技術・形態から和泉陶邑古窯跡群と別の系譜を持つ工人集団が関わっていた可能性がある。奈良時代半ばには須恵器生産を母胎に瓶類を中心とした原始灰釉陶器を生み出し、平安時代には白色の胎土を持つ灰釉陶器椀・皿を完成させる。ところが中世になると猿投窯自体は無釉で在地向けの日常雑器である山茶椀生産に転換してしまう。

尾北古窯跡群（以下、尾北窯とする）は尾張の北東部、庄内川をはさんで猿投窯の北西に位置している。今までは150基ほどの窯が見つかっているが、大きくは猿投窯の流れの中で把握されており、独自の須恵器編年研究は成されていない。生産に関してみると、６世紀前半には開窯するが、操業にいくつか中断する時期があり一定ではない。平安時代には灰釉陶器生産を行うが、古代末には終焉をむかえ、中世には生産が絶えてしまう。

筆者は大学在学中に猿投窯・尾北窯における７・８世紀の窯跡出土遺物の整理に携わる機会を得たが、このとき受けた印象では尾北窯高蔵寺２号窯出土遺物が同時期の猿投窯の製品とは少し違った様相を持つというものであった。それはこの窯自体が特殊な様相を持つものなのか尾北窯と猿投窯との性格の差なのか、当時は２つの生産地の差が明確にされておらず、充分認識することができなかった。

尾北窯については、すでに瓦の研究から中央との結びつきについての指摘がなされている。たとえば、７世紀後葉の尾北窯篠岡２号窯で焼成した瓦が奥山久米寺の瓦と同笵であ

ったり[2]、８世紀初頭の尾北窯高蔵寺瓦窯から出土する瓦が藤原宮のものと同笵で、日高山瓦窯で使用された笵がもたらされたと考えられていることなどである[3]。また、尾北窯の性格については、瓦陶兼業窯として生産を始める篠岡２号窯に対する須恵器を含めた中央からの新しい技術の伝播を想定する意見[4]や国衙との関連を想定する意見[5]もある。しかし、具体的に須恵器生産の面から尾北窯の性格が検討されたことはあまりなかった。

ところが、近年の調査のなかで尾北窯と中央との直接的なつながりを示す遺物が見つかった。それは数片の在銘須恵器である。詳細は後述するが、飛鳥地域から出土した須恵器のなかに７世紀末に位置づけられる尾北窯篠岡78号窯で生産された可能性が強いものが出土している。飛鳥時代に中央へ地方窯の製品が搬入されていたという確実な証拠が発見されることは極めてまれである。この製品の流れはどのようなことを意味するのであろうか。これを機に実際にいくつかの要素を取り上げ、飛鳥時代における猿投窯、尾北窯の２つの生産地の性格などについて考えてみることにする。この点をつきつめていくことで、飛鳥時代の須恵器生産の特質についても考える手がかりを得ることができるものと考えている。

２．飛鳥時代における須恵器生産の状況

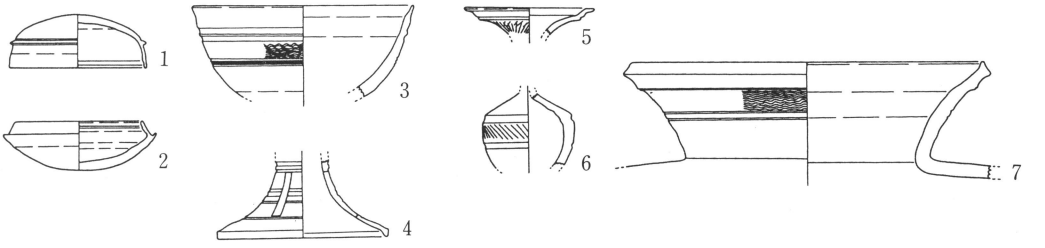
尾張における須恵器の研究は日本窯業史研究の一つの出発点となる昭和30年代の愛知用水工事に伴う猿投山西南麓古窯跡群の調査が行われて以来、30年以上の歳月が経過し、編年研究もほぼ確立してきている[6]。楢崎彰一氏らの研究で猿投窯における古代須恵器・灰釉陶器生産は尾北窯も含めて、大きく６期に区分されている。

飛鳥時代については猿投窯編年の第II期の終わりから第III期にかけてとして位置づられる。猿投窯第III期はさらに東山50号窯式、岩崎17号窯式、岩崎41号窯式、高蔵寺２号窯式に細分される。本論では基本的には既成の猿投窯編年に従うが、若干の相違点もある。それらについてはその都度触れることとして、器種組成と形態変化から奈良時代の初めも含めて飛鳥時代を１～５の５小期に区分して様相を述べる。

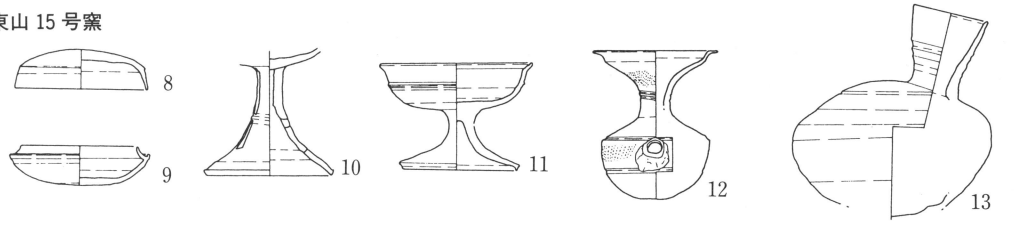
ａ．１期（６世紀末～７世紀前葉）

この時期は猿投窯では第II期の最終段階である東山44号窯式に位置づけられる。この時期までは窯は東山地区のみに築かれる。代表的な窯として東山44号窯[7]が挙げられる。器種組成は古墳時代通有のもので、蓋杯・高杯・椀・甕などが主体である。供膳形態は蓋杯である杯H[8]が全てを占める。蓋の天井部には稜があり、約２分の１に回転ヘラケズリ調整をする。法量では身の口径がおおよそ10～11cmである。高杯は長脚２段３方透かしのものである。

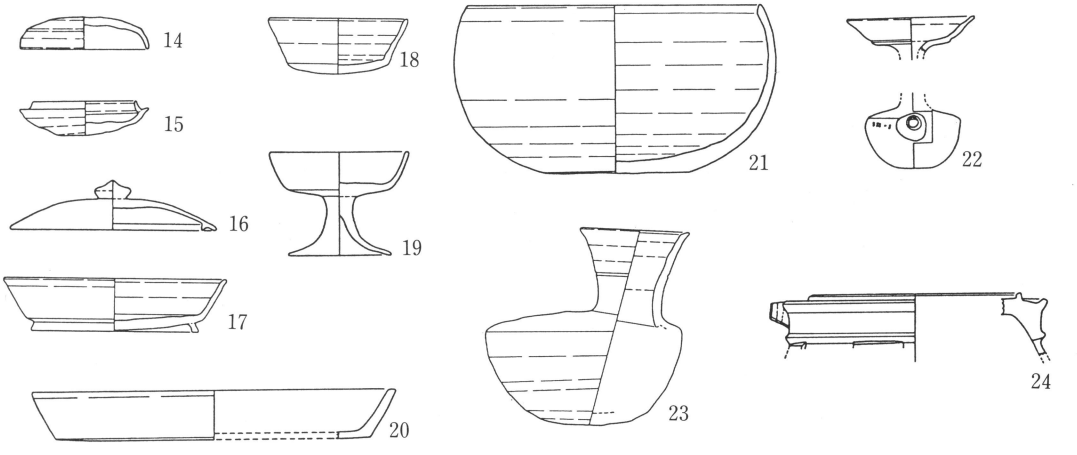
東山 44 号窯



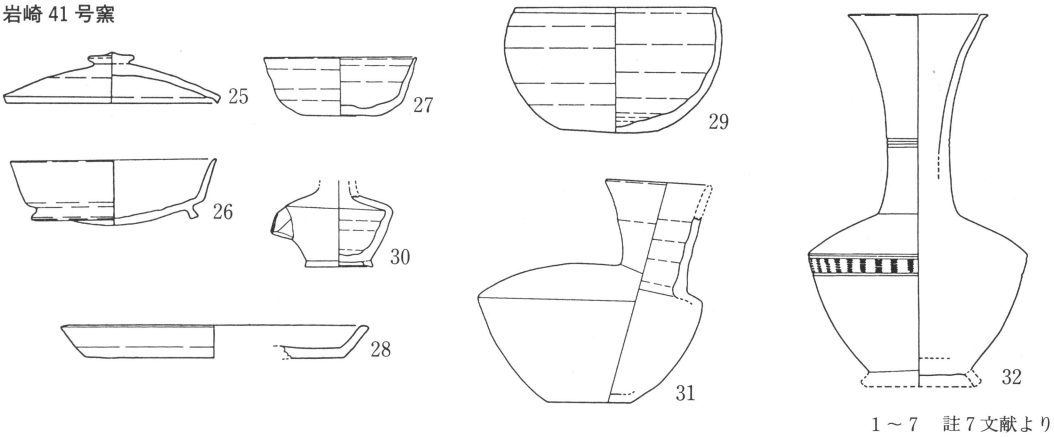
東山 15 号窯



岩崎 17 号窯



岩崎 41 号窯



第 I 図　猿投窯の須恵器（1/6）

1～7　註 7 文献より
8～13　註 36 文献より

尾北窯では下原地区で6世紀前半に生産が開始されるが、中葉には中断してしまう。それ以来しばらく窯は築かれておらず、この時期に相当すると思われる窯は見あたらない。

b．2期（7世紀中葉）

猿投窯で7世紀中葉に該当するのは猿投窯第Ⅲ期第1小期・東山50号窯式である。代表的な窯としては東山50号窯、東山15号窯[9]などがある。この時期の供膳具は基本的には杯Hである。杯Hの口径はおおよそ9㎝で、前段階の東山44号窯の時期よりも1㎝近く縮小する。高杯も見られるが透かしが3方向のものは少なくなり、2方向のものがほとんどとなる。なかには透かしが形骸化し、線状になったものもある。また、この時期より、新たにかえりのついた杯蓋、無台杯身である杯A[10]、盤類の出現を見る。鉢類では底部が丸みを持つ鉄鉢形の鉢や大型の浅鉢がみられるようになる。この時期の後半になると金属器を模倣した形態の器種と円面硯がみられることに注目しておきたい。

尾北窯ではまだ生産は行われていない。

c．3期（7世紀後葉）

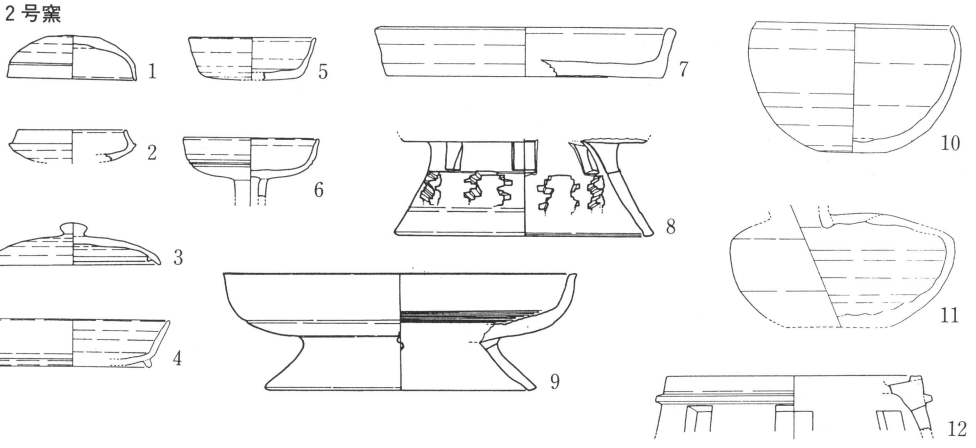
猿投窯ではこの時期に含まれるのは岩崎17号窯式である。代表的な窯は岩崎17号窯である。この時期より器種構成がかなり豊富となり、1つの器種で法量分化が見られるようになる。供膳具では杯Hは口径約8㎝と最少のものとなり、蓋受けのかえりも形骸化する。数量的にもごくわずかなものとなる。これにかわって主体となるのはかえりのついた蓋である。身としては、杯Aに加えて有台杯身である杯Bが登場する。杯A、杯Bは器高の浅いものと深いものの2種類にわかれ、それぞれ口径による器種分化が見られる。鉄鉢では底部の尖った形態のものが出現する。平瓶の肩が鋭角的になってくる。実年代としては7世紀後葉が考えられる。さらに古相と新相の2つに分類が可能であると思われるが、今回は編年が主題ではないので別の機会に述べるつもりである。

尾北窯はこの時期になって操業を再開する。窯が築かれるのは篠岡地区で、代表的な窯として篠岡2号窯[12]が挙げられる。この窯は瓦を併焼する瓦陶兼業窯として生産を始める。器種構成を見てみると篠岡2号窯では主体となるのはかえりを有する蓋と杯身である。量はきわめて少ないものであるが杯Hも見られる。おおよその器形の変化は猿投窯に共通しているが、特徴的な透かしをもつ盤の存在に注目しておきたい。

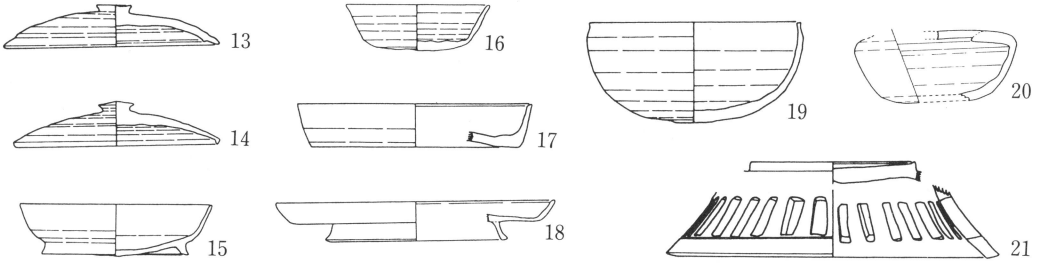
d．4期（7世紀末～8世紀初頭）

この時期には猿投窯岩崎41号窯式が含まれる。代表的な窯としては岩崎41号窯[14]が挙げられる。器種組成では杯蓋でかえりがつく形態のものが少なくなり、口縁端部を折り返す形態のものが主体となる。杯Bの中には底部が高台より突出する形態のものが顕著にみられる。高杯は組成比率が大きく減少する。新たに有台形態の皿Bが出現する。長頸瓶、平

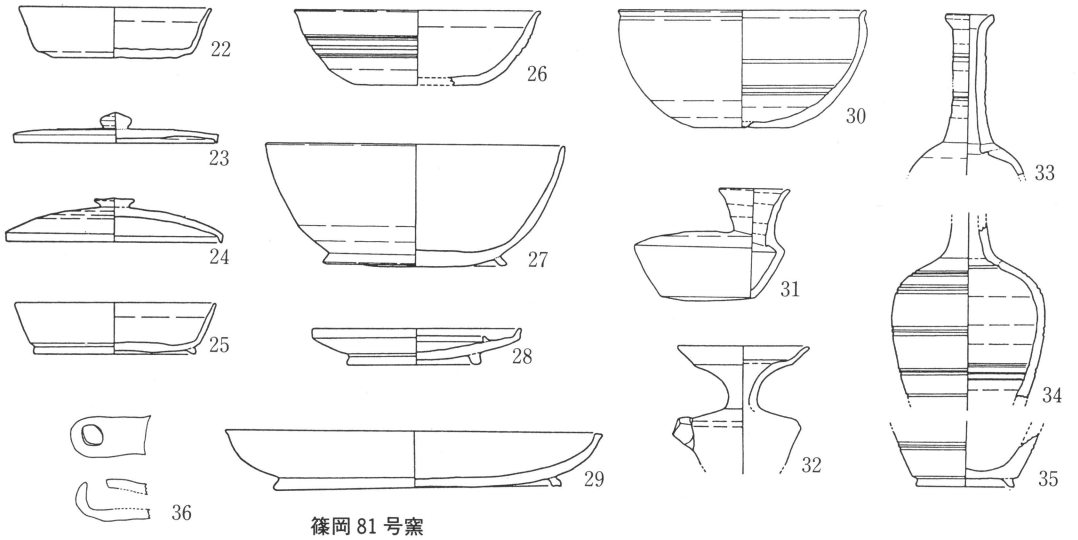
篠岡2号窯



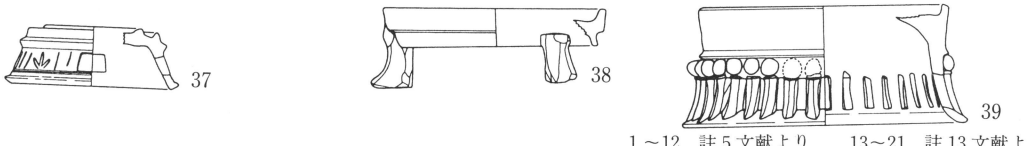
篠岡78号窯



高蔵寺2号窯



篠岡81号窯



1～12　註5文献より　　13～21　註13文献より
38・39　註6文献より

第2図　尾北窯の須恵器（1/6）

瓶、瑞の肩には稜が付き、瑞、細頸瓶には高台がつく。

尾北窯ではこの時期の代表的な窯として篠岡78号窯[13]が挙げられる。篠岡78号窯も瓦陶兼業窯である。器種構成では杯Hはなくなり、かえりのついた蓋とつかない蓋がほぼ同数見られる。灰層下層では前者の量が卓越し、上層では逆転する。おおよその器形の変化は猿投窯と共通しているが、盤類や鉢・壺類にバラエティーがある。

e．5期（8世紀前葉）

この時期には猿投窯Ⅲ期第4小期高蔵寺2号窯式が含まれる。代表的な窯としては良好な報告例が無いが、近年調査されたＮＮ288号窯が該当するものと思われる[15]。この時期になるとかえりの付く蓋がなくなってしまい、口縁端部を折り返すもののみになる。細頸瓶はいままでロクロ上で体部を横方向で成形していたが、この時期には縦にして成形している。

尾北窯ではこの時期の代表的な窯として、高蔵寺2号窯、3号窯[17]が挙げられる。篠岡66号窯は瓦陶兼業窯で[16]あるがこの時期に含まれると思われる。基本的な変化は猿投窯と同じである。須恵器ではかえりのつかない蓋は完全に消滅してしまう。杯類は径高指数により多様に器種分化する。特徴的なのは高蔵寺2、3号窯で金属器模倣タイプの椀・水瓶・鉄鉢や特殊な器形の椀がみられることである。

3．生産内容からみた猿投窯と尾北窯

1．須恵器に見られる特徴

いま、飛鳥時代の猿投窯と尾北窯に見られる須恵器の変遷についてみてきた。両者は基本的にはよく似ている点が多いが、相違点も幾つか見られた。以下、具体的に2つの窯群の須恵器自体の生産内容について検討してみる。

まず、一般的な器種について形態、技法の面からみると共通性が強く、型式変化もほぼ同じである。猿投窯の無台杯身の方が若干丸みが強いが、バラエティーの中に消える差であろう。

法量についてみると、高蔵寺2号窯の法量分化がきわめて激しいのが特徴的である。例えば杯Ｂでは口径が約28cmの杯ＢⅠから約11.5cmの杯ＢⅧまで8つに分かれる[18]（第3図）。また、同じ口径でも器高により高低があるものがある。これに対して猿投窯で時期的に平行関係にあると思われるＮＮ288号窯では法量分化に乏しく、特に有台杯身ではほぼ単一の法量である。高蔵寺2号窯とＮＮ288号窯の法量のあり方の差を単に2つの窯の差ととるのか、尾北窯と猿投窯との関係で考えるのか調査例が少なく、判断するには難しい問題である。該期の集落から出土する須恵器からみると有台杯身の法量は15cmのものが主体で20cmを超えるものはほとんど無く[19]、ＮＮ288号窯の様相に近いものがある。高蔵寺2号窯のもの

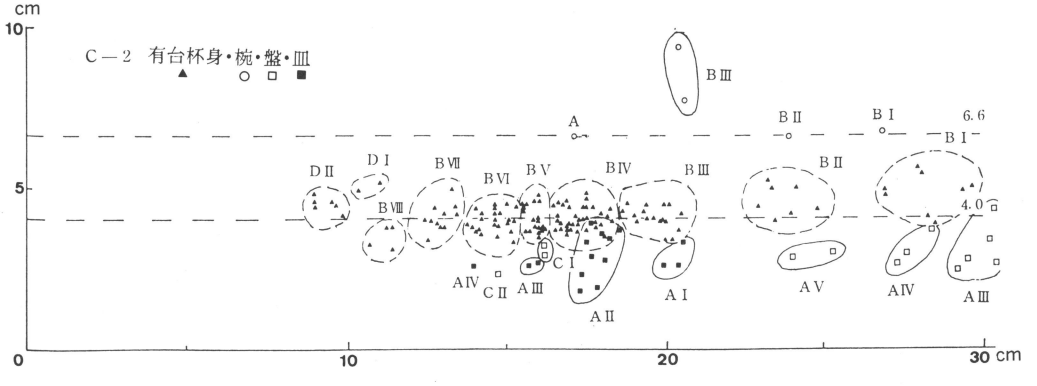
には口径が20cmを超える大型のものが多数あり、口径約28cm（約9.5寸）のもの、口径約24cm（約８寸）のグループに分かれている。これらはすべて蓋を伴うもので、平城宮などに例がある。このような大型品の存在は尾北窯のなかでも特殊である。しかし、全般的に尾北窯の方が法量分化が豊富である。

器種構成の点から見ても一般的な器種は同じである。ただ、尾北窯における盤・皿類の充実が挙げられる。猿投窯では基本的に無台盤がほとんどで、量的にも少ないのに対し、尾北窯ではⅢ期の生産再開当初から無台のもの・高台のついたもの・脚のついたものなど多種類の盤が見られる。篠岡２号窯では脚のついたものの中に複雑な透かし模様をもつものなどがあり、一般的な用途が考えられない。盤のような大型の供膳具はむしろ用途も特殊と考えた方がよい。

次に、特殊な器種についてみてみると若干の差がある。

斎藤孝正氏は金属器を模倣したものが尾北窯で多いとされている[20]金属製仏器については椀が主体で、すでに６世紀代には大陸から日本に入ってきており、全国の古墳などに副葬されている。７世紀になって、仏教文化の流入や半島との交流にともない、佐波理椀・鉢・水瓶などが多数もたらされる。これらの形態を取入れ、金属器指向型として土師器・須恵器の形態も大きく変化したという見解が一般的になりつつある[21]確かに、金属器を直接模倣した器形はいくつか存在する。これらは形態だけでなく、整形・調整が丁寧で、他の器種とは明らかに違っているのが一般的である。

尾張に見られる金属器模倣タイプの器種としては蓋・椀・鉢・水瓶等があるが、量的には少ないものである。ただ、特徴的なものを挙げると蓋（第２図－23）がある。整形・調整は丁寧で、鈕の部分がやや厚めの宝珠形である。このような鈕は他の杯蓋などには全く見られない形態である。天井部は偏平で、凸線が一条巡っている。口縁部はきわめてシャープに折り返している。このような形態の原形となった金属器は法隆寺献納宝物に見られ



第３図　高蔵寺２号窯における器種分化（註18文献より）

る佐波理蓋[22]である。この蓋は白鳳時代にさかのぼるものであると考えられており、時期的にも一致する。この例はきわめて忠実に金属器を模倣した例で、猿投窯・尾北窯に共通して見られる。尾張において特徴的な器形であり、工人集団の系譜を考える上で手がかりになるものと思われる。時期的には3～5期、7世紀後葉から8世紀前葉頃に限られる。椀については尾張国では極めて少ない。無台の椀が若干見られるのみである。そのほか高蔵寺2号窯で見られる有台椀について、金属器模倣形態と考える意見もあるが[23]その原形となる金属器が見あたらず、他にも類例がないことなどから、金属器模倣形態であるかどうかは保留しておきたい。鉄鉢は2期から出現するもので、この時期の窯には比較的よくみられる器形である。高蔵寺2・3号窯は量的に多い。そのほか、水瓶については該期では高蔵寺2・3号窯のみにみられるものである。猿投窯では時期的に少し遅れて8世紀中葉ごろから出現する。

金属器模倣について見るならば、高蔵寺2・3号窯の状況を除くと猿投窯と尾北窯には大きな差は特にないものと思われる。これは金属器模倣ということがきわめて特殊なことではなく、かなり一般化した現象であることの現れであると解しておきたい。

そのほかの器種では、たとえば、硯についてみてみると猿投窯の硯が長条形の透かしを持つオーソドックスな円面硯が多いのに対し、尾北窯の硯は蹄脚式円面硯、有孔把手付円面硯、新羅などにみられる三足の獣脚硯など多様のものが見られる。蹄脚式円面硯は官衙などに多く出土するものとされている[24]有孔把手付円面硯は時期的に最も遡るものが7世紀前半に九州牛頸古窯跡群から出土している。出土状況については楢崎彰一氏がまとめられているが、近年さらに出土例が増加し、九州から静岡県にいたるかなりの地域に見られるようになった[25]管見では九州や近江に多くみられる。

全体的にみれば、集落から出土するような杯・壺・甕といった一般的な器種については尾北窯、猿投窯には大きな差異はなかった。差があったのは大型供膳具である盤や特殊品である硯・水瓶といった器種で、これらの器種が尾北窯に比較的多かったように思える。特に高蔵寺2、3号窯では器種分化や金属器模倣形態など特殊な要素がきわめて多かったのが特徴的である。

2．瓦生産について

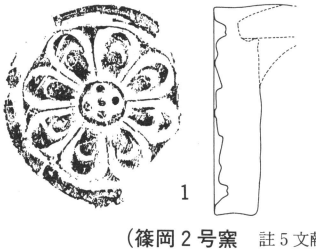
次に2つの生産地の大きく違う点として瓦生産が挙げられる。尾張国において飛鳥・奈良時代に瓦を生産したことがわかっている窯は現在、瓦窯5基及び瓦陶兼業窯4基である[26]このうち瓦窯2基と瓦陶兼業窯4基すべてが尾北窯（春日部郡）に存在する。残りの3基の瓦窯は単独で操業している犬山市官林瓦窯（丹羽郡）、名古屋市若宮瓦窯（愛智郡）、知多郡南知多町奥田瓦窯（智多郡）である。

現在、尾張で見つかっている瓦窯・瓦陶兼業窯のなかで最も古いグループは３期に属するもので、瓦陶兼業窯である篠岡２号窯が挙げられる。この窯の単弁蓮華文軒丸瓦は奥山久米寺のものと同笵であるとされている。笵傷などから奥山久米寺のものが直接、篠岡２号窯にもたらされたものである[27]と考えられる。製品の主たる供給先として東畑廃寺などがある。東畑廃寺は後に国府・国分寺が置かれることになる稲沢市にあり、当時の中心的な寺院であったものと思われる。それに続いて構築された篠岡78号窯も瓦陶兼業窯であったが、供給先などは分かっていない。５期の高蔵寺２号窯式になると尾北窯篠岡66号窯で瓦陶兼業窯が営まれているほか、少し東に位置する高蔵寺地区に高蔵寺瓦窯・白山瓦窯が出現する。高蔵寺瓦窯からは勝川廃寺などに製品が供給されているが、なかに藤原宮式6233Ａｃ型式と同笵の瓦が出土している。この瓦は藤原宮造営のために築かれた日高山瓦窯の製品と同笵であると考えられ、笵傷などから直接高蔵寺瓦窯にもたらされたものと想定されている。瓦窯の構造が煉瓦積みの平窯で、日高山瓦窯に似ていることなどから、笵型のみでなく工人が直接移動していることも想定される[28]。残りの１基は篠岡74号窯で時期的に８世紀中葉に近い時期であると思われる。

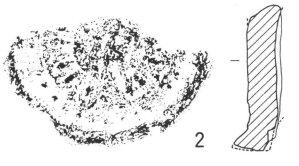
このように瓦の流れを見るとそれぞれの時期に中央から尾北窯へダイレクトに笵型が動いている。高蔵寺瓦窯のように直接工人がやってきたと想定できる瓦窯もあり、中央との結び付きの深さが想定される。

それに対して、猿投窯には古代の須恵器窯が約200基存在するが、基本的に瓦窯・瓦陶兼業窯は存在しない。周辺には尾張国分寺や国分寺元興寺などに瓦を供給していたことがわかっている若宮瓦窯が１基存在するのみである。尾張国の古代寺院の数に対して、瓦窯の数がきわめて少なく、さらに見つかる可能性はあるが、猿投窯は基本的には瓦は焼成していないものと考えてよい。

瓦の生産では対称的な様相をみせる。



（篠岡２号窯　註５文献より）



（高蔵寺瓦窯　註28文献より）

第４図　尾北窯出土軒丸瓦（1/6）

４．猿投窯・尾北窯の性格づけ

１．文字資料からみた尾北窯

近年、飛鳥地方で宮都とも関連した遺跡である石神遺跡から次のような線刻文字を持つ須恵器が出土した[29]。

「尾山寸」　　横瓶体部

「山寸」　　横瓶体部

「久」　　杯底部

「尾」は尾張の省略と考えられる。「山寸」をどの様に解釈するか難しい。「山寸」を一字で「寺」と読むという見解もあり、書き方からすると一字で「寺」と読む解釈の方が妥当性があるかもしれない。この場合、「寺」の造営と須恵器生産が何らかの関係を持っていたことになり、また、製品の流れから寺院造営と中央との関連も考えられる。「久」については不明である。これと全く同じ内容と字体の線刻を持つ須恵器のセットが尾北窯篠岡78号窯から出土している。篠岡78号窯のものは4点あり、横瓶体部に「山寸」と記された須恵器以外ではいずれも杯底部に書かれたもので、「尾山寸」「山寸」「久」が各1点ある。胎土・焼成などを見ても同じである。[30]従って、篠岡78号窯から運ばれたことは確実である。石神遺跡のものは飛鳥Ⅳ・Ⅴ式の土器に伴って出土していることから7世紀後葉～末が考えられ、時期的にも一致する。[31]

しかし、このような刻字を持つ類例がもう1片ある。それには次のような文字が刻まれている。

「尾治山寸□」

この書き方は「尾」の後に「治」が入り、「尾治［張］」＋「山寸」＋□□と表記されることである。「山寸」を「寺」と読むと「尾張寺□□」となる。この場合、尾張寺が非常にあいまいなものとなることや高蔵寺3号窯から「尾(張)春部(郡)岡本(里)」といった「尾」＋地名を表す資料の存在などから、「山寸」を2字として地名を表すものと解した方がよいのかも知れない。

この須恵器は三重県四日市市の西ヶ広遺跡から出土したもので、甕の頸部にかかれたものである。西ヶ広遺跡は7世紀末から8世紀初頭にかけての倉庫5棟を含む比較的整った掘立柱建物を中心とする集落遺跡である。刻字を持つものは土坑ＳＫ88から出土したが共伴する硯は新羅から出土するものに似ており、注目される遺跡である。報文ではなんらかの公的な性格をもつ遺跡であると考えられて[32]



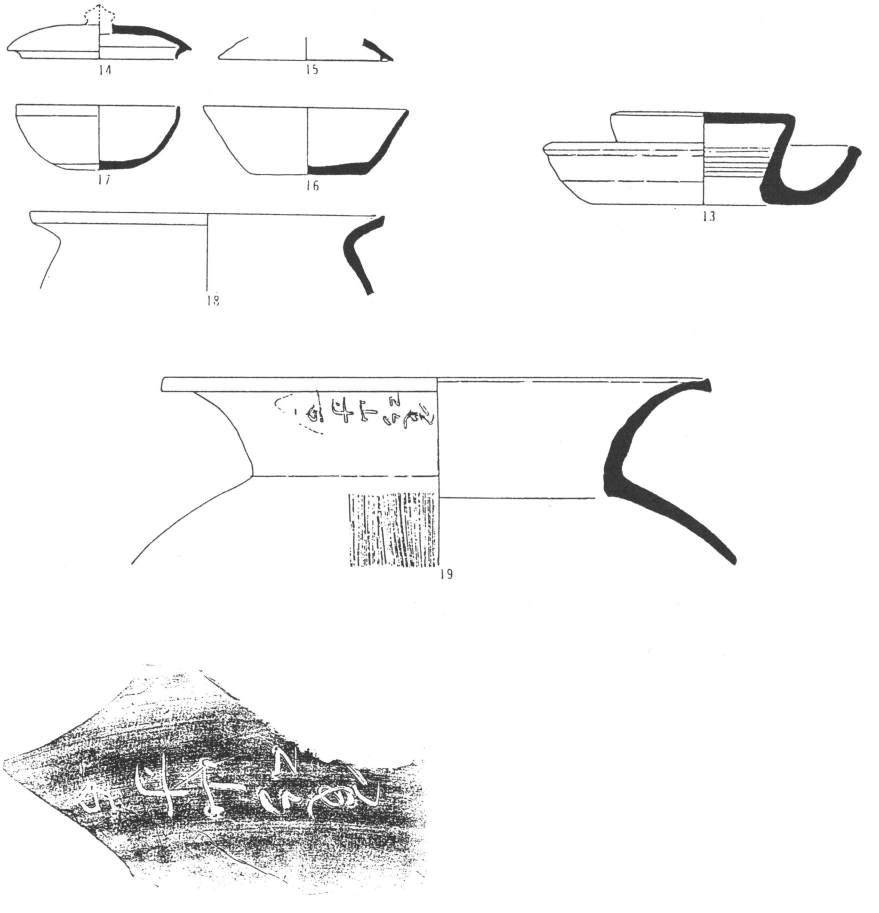
第5図　篠岡78号窯出土文字陶片（1/2）

おり、地方官衙と考えてよいかもしれない。

この須恵器を篠岡78号窯を含む尾北窯の製品と考えた場合、飛鳥地域中枢部だけでなく、国境を越えて公的な性格を持つ施設にも製品がもたらされていたことになる。刻字を持たない須恵器についても飛鳥地域では尾北窯の製品と思われるものが出土している。流通という点をとりあげても、尾北窯と中央とのつながりは濃厚である。

2．飛鳥時代須恵器生産の特質

飛鳥時代における須恵器生産について、基本的な器種を見る限り、猿投窯と尾北窯には大きな差は見られなかった。このことから器種分化の激しい高蔵寺2号窯のあり方を別にすれば、飛鳥時代の尾張における須恵器生産は基本的には在地向けの生産を基盤としていたものと考えられる。ただ、これに特殊な用途をもつ生産が加わるという二重構造的な生



第6図　三重県西ケ広遺跡出土遺物（註32文献より）
1/6（拓本は1/2）

産が行われていた。これは尾張のみにとどまらず全国的にも当てはまることであると思われる。官衙遺跡等で使用される須恵器の形態が一般集落のものと比較して特別であるということはないので、実際に両者を峻別することは難しいことである。区別する要素としては法量分化と大型の杯・盤などの大型供膳具、硯などの特殊な器形が挙げられる。全体的に見て尾北窯は後者の部分の比重が高かったのではないだろうか。

猿投窯は開窯時には埴輪を併焼しており、須恵器生産には在地豪族の関与があったと思われる。丘陵端部に位置する猿投窯東山地区の生産に関わったのは西に広がる平野部先端にある熱田台地上に古墳を築いた勢力が想定される。具体的には当時尾張国造で最大の勢力であった尾張氏を想定する意見がある[33]。猿投窯は形態・技術的にもきわめて個性的、保守的な面がある。例えば杯Hの天井部の回転ヘラケズリ調整や稜線が最後まで残る点などに現れている。このような体質は飛鳥時代になっても残り、基本的には同じ体制で生産を続けていたものと考えられる。

一方、7世紀後葉の尾北窯篠岡地区の開窯[34]に際しては瓦陶兼業窯という新しい形態をとること、しかも瓦の笵型の移動にともなって中央より瓦の生産技術の移入があったことが考えられる。この技術にともなって瓦工人も中央より導入している可能性がある。しかし、須恵器については基本的には猿投窯と同じであり、開窯にあたって猿投窯から須恵器工人を導入していたことが想定される[35]。流通から見れば、尾北窯の製品は開窯当初から飛鳥地域中枢部や伊勢国の公的施設などに運ばれている。これらのことから尾北窯は中央と極めて強いつながりを有していたことがわかる。ただし、この時期の寺院があくまでも豪族の氏寺であることなどから、生産に直接、中央の勢力もしくは地方の公的機関が関わっていたと考えるより、中央と結びつきの強い地方豪族を介してと考える方がよいと思える。

以上、猿投窯と尾北窯における須恵器生産についてみてきた。生産内容でいえば、須恵器自体に大きな差はなかったが、性格に隔たりがあった。

猿投窯は灰釉陶器発生の地として注目されるが、その前の段階である飛鳥時代ではただの在地向けの生産が主流の地方窯であった。それに対して尾北窯は中央と結び付いた形で瓦を含めた生産を行っていた。ところが、8世紀中葉をさかいにして尾北窯の生産は急激に衰退し、逆に猿投窯では新しい技術革新がおこり、原始灰釉が開発されると共に須恵器生産は急激に増加することになる。尾張では8世紀中葉に猿投窯の古い体質が解体し、尾北窯のあり方が否定され、新たな生産体制が再編成されるという大きな画期が訪れることになる。

今回の検討では同じ国のなかに存する2大生産地について生産内容・流通などから、その性格の差などについて考えたものである。両者の差についてはある程度あきらかになっ

たが、その背景にあるものについは論及できなかった。この課題は窯の分布状況等も含めて検討すべきである。また、工人組織の問題等にも触れることはできなかった。これらの問題については後日改めて論じてみたいと思う。 (1993．2．20)

謝辞

本稿を草するにあたり、次の諸氏より種々の御教示を頂いた。深く感謝の意を表する次第です。

伊藤久嗣、宇野隆夫、尾野善裕、斎藤孝正、柴垣勇夫、巽淳一郎、中嶋隆、楢崎彰一、西口寿生、服部哲也、舟山良一（五十音順、敬称略）

註

1）飛鳥時代という用語については美学・美術史や文化史の分野などで7世紀前半を指す場合がある。しかし、本稿では史学の通説に従い、推古朝の成立（592年）から平城京の成立（710年）までを指すものとする。
2）岩野見司1987「古代の寺院跡」『新編一宮市史本文編上』
3）山崎信二1981「軒瓦の考察」『尾張勝川廃寺範囲確認調査概報』春日井市教育委員会
4）田中琢1984「古代窯業の展開」『講座・日本技術の社会史　4　窯業』
5）斎藤孝正1990「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相－篠岡2号窯出土資料を中心として－」『名古屋大学文学部研究論集107』
6）楢崎彰一1958「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』をはじめとし多数の業績があるが、現在一般的なものとしては楢崎彰一・斎藤孝正1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書』Ⅲがある。本論もこの編年を参考とした。
7）小島一夫1979『光真寺古窯址発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
8）基本的に器種の名称は供膳具では飛鳥・平城宮報告の中での分類の記号を用いることとする。（奈良国立文化財研究所1978『平城宮跡発掘報告Ⅶ』などによる。）
9）名古屋市教育委員会1980『H－15号窯発掘調査概要報告書』
10）尾張では飛鳥編年で用いられる杯Gという有蓋の形態が不明確で、杯Aとの形態の相違がはっきりしない。従って、ここでは無台杯身の形態をすべて杯Aとする。
11）楢崎彰一1958『猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
12）大参義一・山田友治1967『東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告　篠岡2・44号窯』愛知県教育委員会
13）中嶋隆1979「桃花台ニュータウン発掘調査報告Ⅱ」小牧市教育委員会
14）註11文献
15）名古屋市見晴台考古資料館尾野善裕氏の御教示による。尾野氏のご厚意により遺物を実現したが、大型の供膳具はほとんど見あたらなかった。
16）立松宏他1976「桃花台ニュータウン遺跡調査報告　小牧市篠岡古窯址群」小牧市教育委員会
17）楢崎彰一1959『猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
18）城ヶ谷和広1984「七、八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察～法量の問題を中心に～」『考古学雑誌』70－2
19）城ヶ谷和広1989「名古屋城三の丸遺跡出土の奈良平安時代土器」『㈶愛知県埋蔵文化財センター年報－昭和63年度』
20）註5文献
21）かつて西弘海氏の提唱した金属器「指向」型（西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論集　考古学論学』）と忠実に金属器を模倣した金属器「模倣」型とは近年混同して使われる傾向にある。金属器指向はあくまでも金属器のもつイメージを追求するものであり、必ずしも全ての形態的な類似は必要ない。金属器模倣についてはモデルとなる金属

器の形を忠実に模倣するもので、区別されるべきである。
22) 東京国立博物館1979『法隆寺献納宝物目録』
23) 註５文献
24) 楢崎彰一1982「日本古代の陶硯－とくに分類について－」『小林行雄博士古希記念論集　考古学論考』
25) 楢崎彰一1984「神屋１号窯出土の把手付円面硯」『春日井市遺跡調査報告８』
26) 名古屋市博物館編1985『尾張の古代寺院と瓦』
27) 註２文献
28) 梶山勝1983「春日井市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館研究紀要　６』
29) 奈良国立文化財研究所1991『藤原宮と京』
30) 実物については小牧市教育委員会中嶋隆氏のご厚意で実現することができた。
31) 奈良国立文化財研究所西口寿生氏のご教示による。なお実物については西口氏の厚意で実見することができた。観察によると胎土などが篠岡78号窯のものに極めてよくにている。
32) 児玉道明他1970「西ヶ広遺跡」『東名阪自動車道関係埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会実物については三重県教育委員会伊藤久嗣氏のご厚意により実見することができたが、胎土などから尾北窯産であるものと思われる。
33) 浅田員由1989「猿投窯における生産構造」『愛知県陶磁資料館研究紀要　８』
34) 同じ尾北窯の範ちゅうにある下原地区の開窯に当たっては、やはり埴輪との併焼から豪族との関連が想定される。しかし、その後６世紀中葉から約100年間の中断期間があり、後の篠岡窯との関連を考えるのは難しい。従って本論では下原地区と篠岡地区を区別して考えることとする。
35) 尾張の場合は田中琢氏の指摘された瓦工人と共に新しい須恵器製作技術が導入された可能性は少ないものと思われる。
36) 名古屋市見晴台考古資料館1981『館蔵品目録Ⅱ』

三河地域出土の土師器皿について

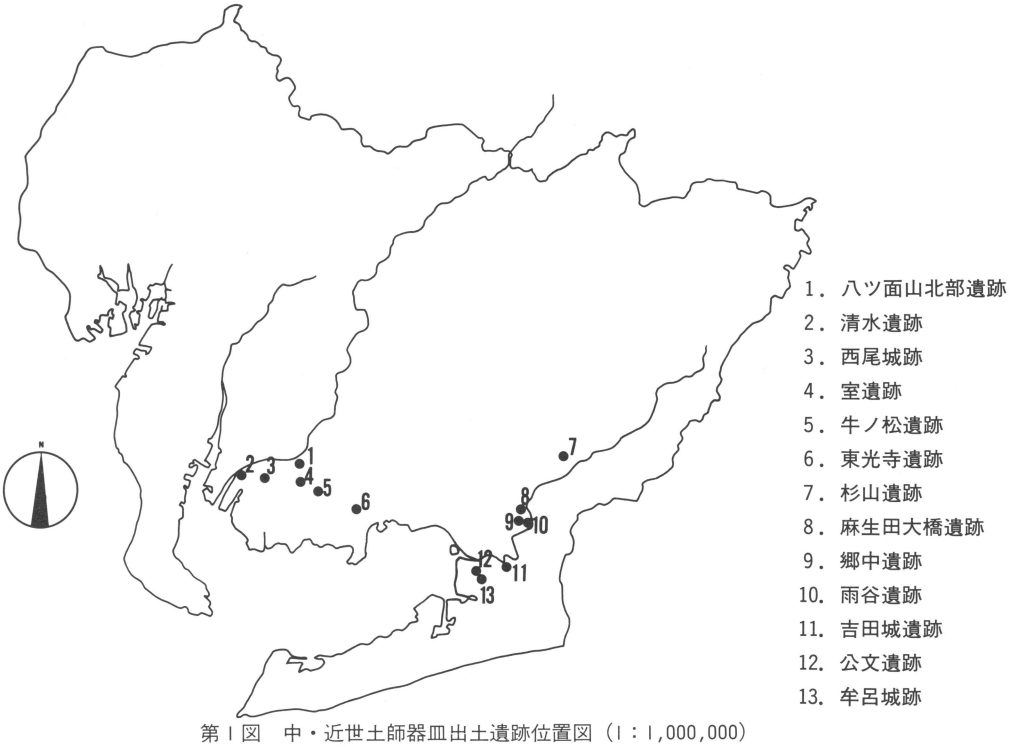
川井　啓介

1．はじめに

今年度発掘調査を行った額田郡幸田町牛ノ松遺跡で確認された、13世紀後半の屋敷地を区画すると思われる溝状遺構や、昨年度行われた西尾市室遺跡の発掘調査において検出された土坑・溝状遺構から、灰釉系陶器等と併せ中世土師器皿（以下、土師皿と略す）が出土している。この土師皿は、近年中・近世集落の発掘調査の進展により、かなりの資料的蓄積が見られるようになっている。事実、尾張低地部や名古屋台地上の土師皿の編年的位置付けは、佐藤公保氏(1)・尾野善裕氏(2)により、その実態が明らかにされつつある。

これに対し、三河地方においては新城市杉山遺跡の発掘調査結果に基づく北村和宏氏(3)のそれが見られるに留まっている。

そこで本稿では、三河地域を西三河地方（＝矢作川流域）、東三河地方（＝豊川流域）に区分し、古代末から近世に至る土師皿の変遷を考えてみたい。但し、資料的制約から西三河地方については特に南部地域（西尾市・額田郡幸田町）に限定して考える。



第Ⅰ図　中・近世土師器皿出土遺跡位置図（1：1,000,000）

2．具体的事例の検討

以下、先に述べた2地域毎に土師皿が出土している個別遺跡を具体的に見てゆくが、その前にここで土師皿の分類を示す。基本的には佐藤・北村両氏の分類に拠るが、今回は成・整形方法を中心とした分類を試みた。

A類：ロクロ成形。体部内外面ナデ調整。(佐藤分類：A類)

A_1 体部下半丸みあり、口縁直立気味。口径15cm前後。

A_2 底部肥厚で突出。口径8cm前後。

B類：ロクロ成形。(佐藤分類：F類)

B_1 体部内外面ナデ調整。口径14cm前後。

B_2 体部内外面ナデ調整。口径11cm前後。

B_3 体部内外面ナデ調整。口径8cm前後。

B_4 内面ナデ、外面無調整。口径15cm前後。

B_5 内面ナデ、外面無調整。口径11cm前後。

C類：非ロクロ成形。体部内面から外面口縁部に横ナデ。(佐藤分類：B類)

C_1 口径12cm前後。

C_2 口径8cm前後。

D類：内面ナデ、外面無調整。(佐藤分類：D類、北村分類：F_b類)

D_1 口径11cm前後。

D_2 口径8cm前後。

E類：非ロクロ成形の小皿。断面「コ」字。(佐藤分類：E類)

F類：非ロクロ成形。口縁端部つまみ上げ。大型品が多い。(北村分類：A類)

(1) 西三河地方（南部地域）

3市町6遺跡から土師皿が出土している。遺物が出土している遺構の時期は、12世紀後半から19世紀半ばに及んでいる。

①八ッ面山北部遺跡[4]（所在地：西尾市八ッ面町蔵屋敷・後土、中原町道東・前畑）

平成3年度発掘調査で検出された土坑（SK12）からA_2類（8～10）、B_1類（1～4）、B_3類（5～7）の土師皿が一括出土している。他に共伴遺物が見られないが、時期は遺構の検出状況から13世紀中葉に比定されている。この報告書で行われている土師皿の分類と今回の分類との関係は、A_2類＝皿A－4類、B_1類＝皿A－2類、B_3類＝皿A－3類となる。また同調査で検出された土坑（SK15）からは土師皿B_2類（11、報告書分類皿A－1類）が、13世紀中葉の灰釉系陶器の椀（14）、皿（12・13）とともに出土している。

また平成４年度の調査で確認された土坑墓（ＳＺ01）からは、13世紀後半の灰釉系陶器の椀（17）とともにC₂類（15・16、報告書分類皿Ｂ－１類）が出土している(5)。

②清水遺跡(6)（所在地：西尾市中畑町地内）

平成元・２年度に行われた発掘調査で、16世紀前半から19世紀前半に及ぶ遺構が検出されている。

16世紀前半：ＳＫ066・067・113（いずれも平成元年度調査）から、土師皿B_2類（18）、B_5類（19）、C_2類（24）、D_2類（22）が出土している。共伴遺物としては、瀬戸・美濃産の天目茶椀（20）、擂鉢（21）がある。

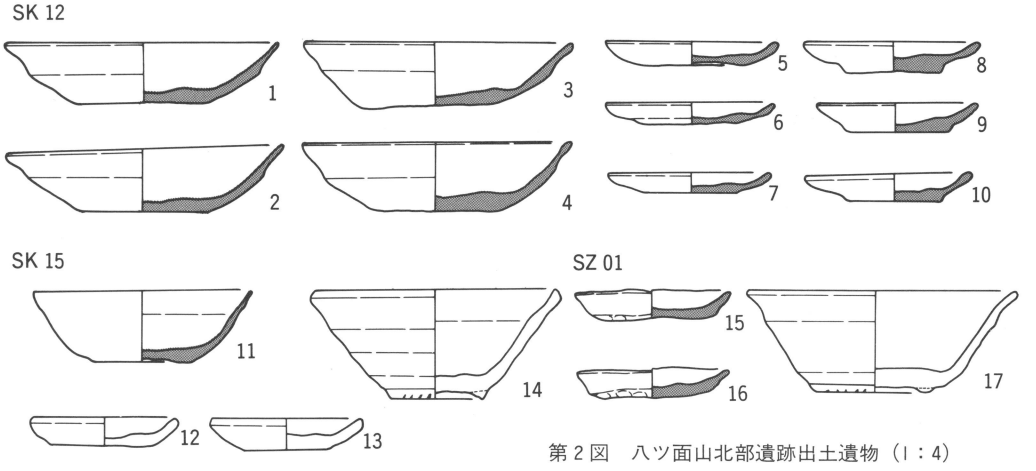
17世紀末～18世紀前葉：ＳＫ25（平成２年度調査）から、土師皿B_2類（26）が出土している。共伴遺物としては、瀬戸・美濃産の御室茶椀（27）、香炉（28）が出土している。

18世紀後半：ＳＤ02（平成元年度調査）から、土師皿D_2類（29・30）が出土している。共伴遺物には瀬戸・美濃産の腰錆茶椀（31）、擂鉢（32）がある。

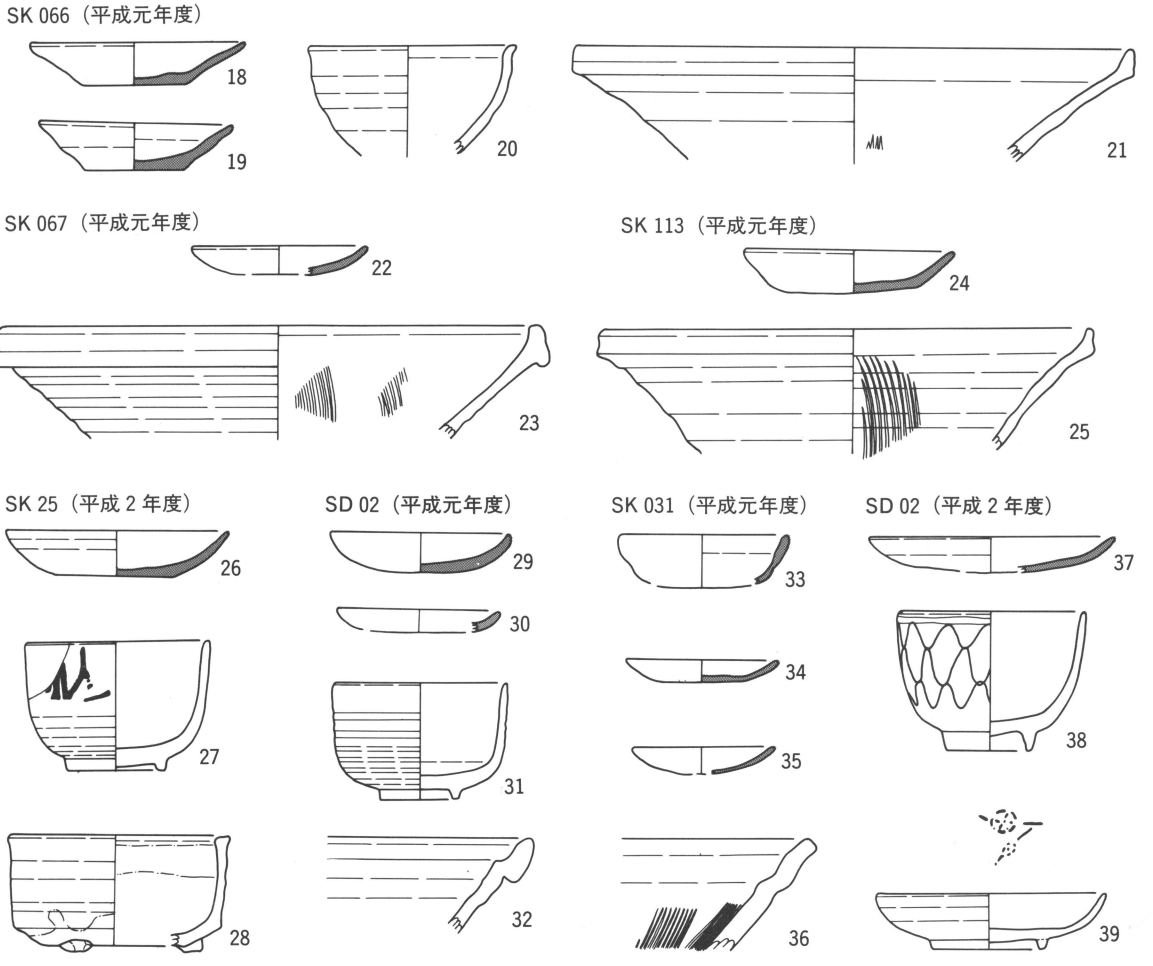
19世紀前半：ＳＫ031（平成元年度調査）からは土師皿D_2類（33～35）が、ＳＤ02（平成２年度調査）から土師皿D_1類（37）が出土している。共伴遺物としては、鉄釉擂鉢（36）、肥前系磁器椀（38）、瀬戸・美濃産の梅文皿（39）がある。

③西尾城跡(7)（所在地：西尾市錦城町地内）

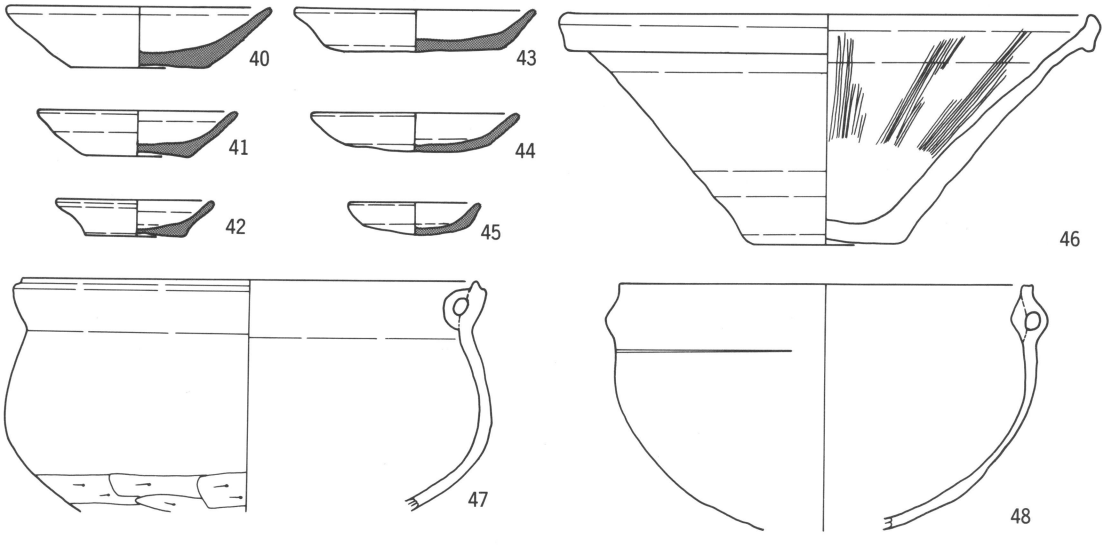
平成元年度調査で検出された区画溝（ＳＤ04）から、土師皿B_1類（40）、B_2類（41）、B_3類（42）、C_1類（43・44）、C_2類（45）が出土している。共伴遺物には瀬戸・美濃産の擂鉢（46）、内耳鍋（47・48）が出土している。このうち、擂鉢は16世紀前半（大窯Ⅱ期）に比定されるが、遺物が出土した区画溝は、1580年代に行われた西条城（＝西尾城）東丸の増改築に伴い廃絶された可能性が高い。したがって、これらの遺物群の時期は16世紀後半と考えるべきであると思われる。



第２図　八ツ面山北部遺跡出土遺物（1：4）



第 3 図　清水遺跡出土遺物（Ⅰ：4）



第 4 図　西尾城跡　SD 04 出土遺物（Ⅰ：4）

④室遺跡[8]（所在地：西尾市室・家武・駒場町地内）

平成３年度の発掘調査で確認された大溝最下層から、土師皿A_1類（49）、B_2類（50）、B_3類（51）、が出土している。共伴遺物は灰釉系陶器の椀（52・53）・皿（54～56）が出土している。いずれの遺物も12世紀後半に位置づけられる。

⑤牛ノ松遺跡[9]（所在地：額田郡幸田町字牛ノ松地内）

平成４年度に行われた発掘調査で検出された、谷地形に沿うように掘削された集落を取り囲む溝から、土師皿B_2類（57～60）、B_3類（61）、C_1類（62）が出土している。共伴遺物には灰釉系陶器の椀（63・64）・皿（65～67）、伊勢型鍋（68）があり、これらの陶器類は13世紀後半から14世紀初頭に位置づけられる。

⑥東光寺遺跡[10]（所在地：額田郡幸田町大字深溝字上天白・天白・城跡）

平成元年度の発掘調査で検出されたＬ字に屈曲する溝から、土師皿C_2類（69・70）、Ｆ類（71・72）が出土している。共伴遺物としては、灰釉縁釉皿（73）、所謂「くの字」状口縁鍋（74）がある。陶器類は概ね15世紀後半（古瀬戸後期）に比定される。

(2) 東三河地方

３市７遺跡から土師皿が出土している。土師皿が出土している遺構の時期は、12世紀中葉から19世紀中葉に及んでいる。しかし、14世紀代の類例は少ない。

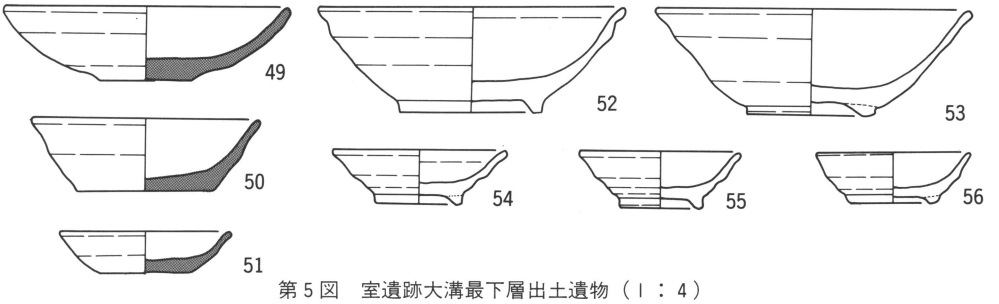
⑦杉山遺跡[11]（所在地：新城市杉山地内）

昭和61・62年度調査で検出された複数の遺構から土師皿が出土している。遺構と出土遺物は以下の通りである。

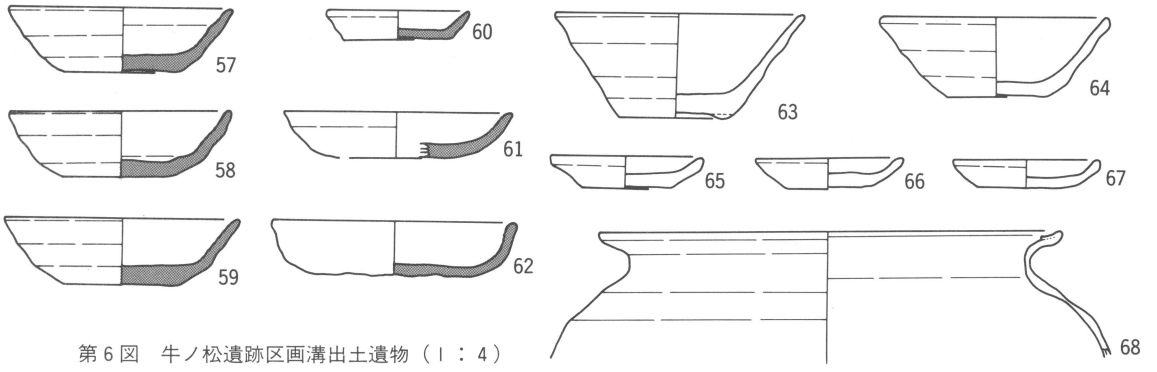
ＳＫ1004：土師皿D_2類（75）、Ｆ類（76）が出土している。共伴遺物には「くの字」口縁鍋（77）があり、時期は15世紀～16世紀初頭に比定される。

ＳＫ1005：土師皿D_2類（78）、Ｆ類（79）が出土している。共伴遺物には「くの字」口縁鍋（80）があり、時期は15世紀後半～16世紀前半に比定される。

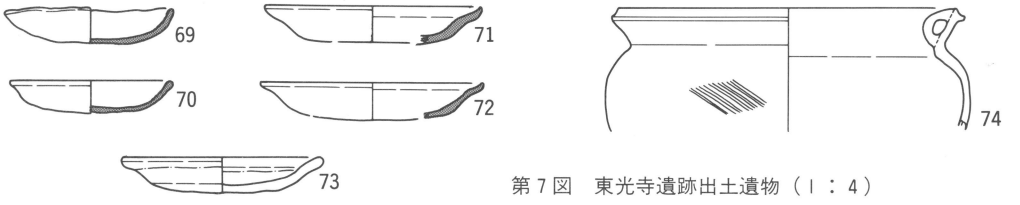
ＳＤ13：土師皿D_1類（82）、D_2類（81）が出土している。共伴遺物には近世陶器椀（83）があり、時期は19世紀代に比定される。



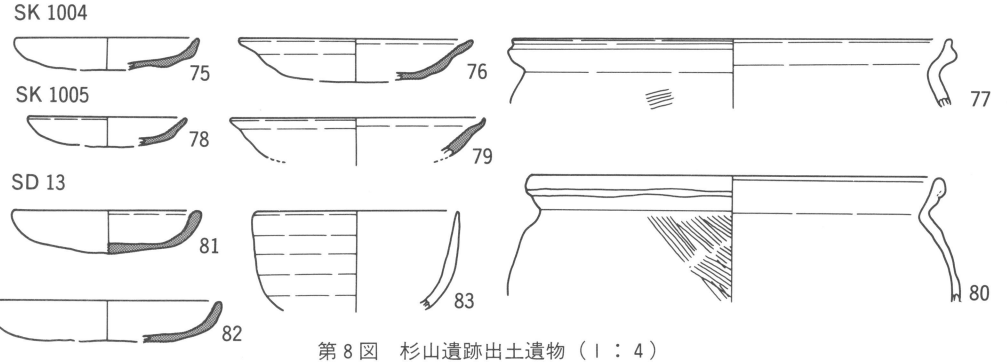
第５図　室遺跡大溝最下層出土遺物（１：４）



第6図　牛ノ松遺跡区画溝出土遺物（1：4）



第7図　東光寺遺跡出土遺物（1：4）



第8図　杉山遺跡出土遺物（1：4）

⑧麻生田大橋遺跡(12)（所在地：豊川市麻生田町大橋）

昭和63年度・平成元年度の発掘調査で検出された13世紀から18世紀にかけての遺構から土師皿が出土している。

ＳＫ600：径３ｍを越える大型の土坑から土師皿C_2類（83～85）、Ｆ類（81・82）が出土している。共伴遺物に伊勢型鍋（86）がある。この遺構の時期は13～14世紀代に比定されている。

ＳＫ650：長径160㎝、短径86㎝の方形の土坑墓から土師皿C_1類（87）、C_2類（88）が出土している。共伴遺物として瀬戸・美濃産の鉄釉擂鉢（89）が出土している。この遺構の時期は15世紀末～16世紀初頭に位置づけられる。

ＳＫ548：長径272㎝、短径190㎝の長方形の土坑。土師皿C_1類（92・93）が出土している。共伴遺物として瀬戸・美濃産の鉄釉擂鉢（94）、折縁盤（95）が出土している。この遺構の時期は16世紀前半以降に比定される。

ＳＤ41：幅0.5～1.0ｍの溝から17～18世紀代に比定される瀬戸・美濃産の香炉（98）とともに土師皿D_1類（96・97）が出土している。

⑨郷中遺跡[13]（所在地：豊川市三谷原町）

昭和63年度調査のＤ地区で検出された幅4.4ｍ、深さ1.75ｍの溝（ＳＤ06）から土師皿が出土している。発掘調査時点で任意に溝を上層、中層、下層、最下層の４層に区分しており、その各層から灰釉系陶器の椀・皿とともに土師皿が出土している。そこから出土している遺物は上・中層が13世紀代、下層が13世紀前葉～12世紀後葉、最下層が12世紀後半に比定される。出土した土師皿は以下に記すものである。

最下層：A_2類（96・97）、B_3類（98）

下層：A_2類（101）、B_3類（102）、C_1類（104）、C_2類（105）、Ｅ類（103）

中層：A_2類（109）、C_1類（110）、C_2類（111）

上層：C_2類（115）

⑩雨谷遺跡[14]（所在地：豊川市三谷原町）

昭和63年度調査のＣ－２区土器集中区から土師皿C_1類（117・118）、C_2類（119・120）が出土している。共伴遺物として灰釉系陶器の椀（121）がある。この遺構から出土している土師皿は13世紀代と考えられる。

⑪吉田城遺跡[15]（所在地：豊橋市八町通）

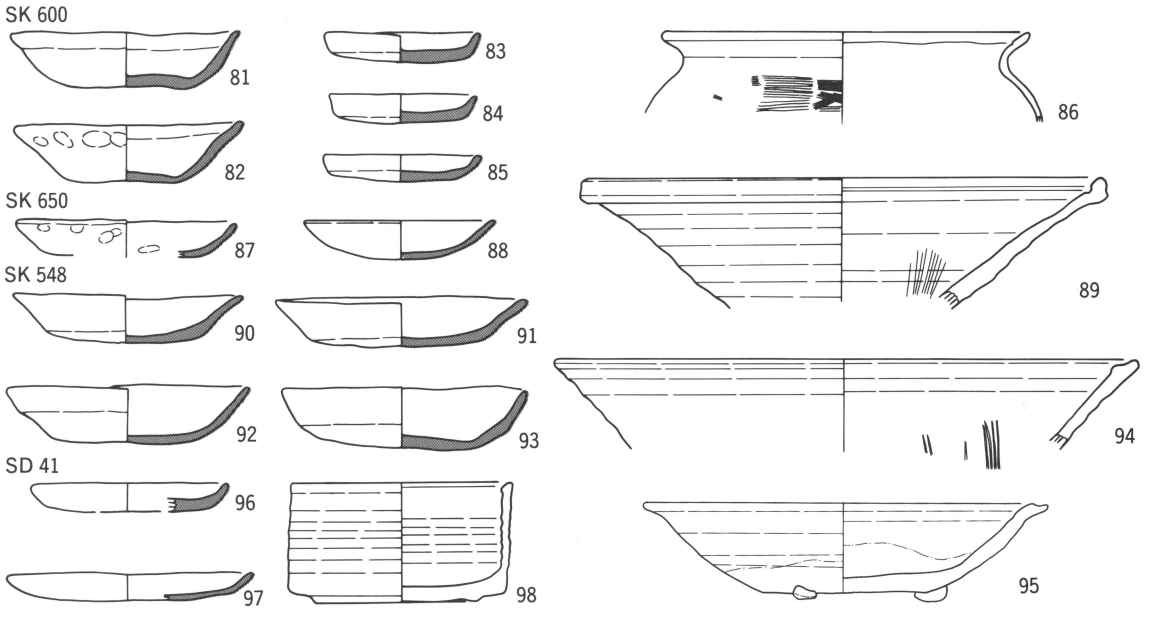
平成元年度調査で16世紀から19世紀に至る遺構から土師皿が出土している。

ＳＤ102：幅6.0ｍ以上、深さ1.5ｍ以上の溝から土師皿C_1類（122～124）、D_1類（125～127）が出土。共伴遺物には、瀬戸・美濃産の天目茶椀（128・129）、鉄釉擂鉢（130・131）がある。遺構の時期は16世紀前葉～後葉に比定される。

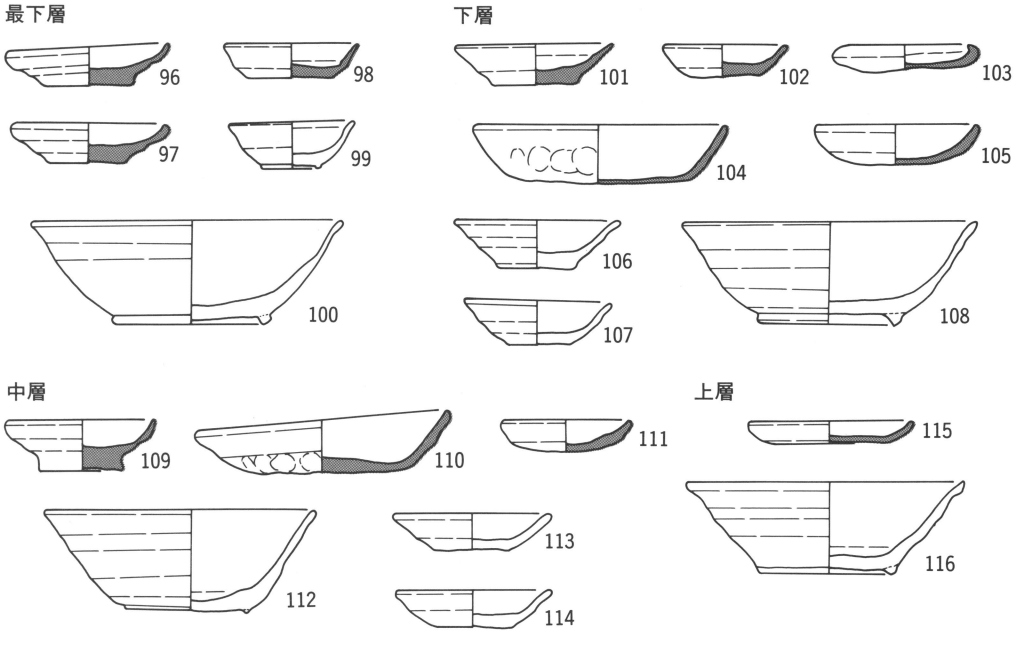
ＳＤ101：幅1.6ｍ、深さ0.7ｍの溝から土師皿C_1類（132～134）、D_1類（135・136）、Ｆ類（137）が出土。共伴遺物には、瀬戸・美濃産の天目茶椀（138・139）がある。遺構の時期は16世紀中葉～17世紀初頭に比定される。

ＳＥ01：径1.5ｍ、深さ4.6ｍの井戸から土師皿C_1類（143）、D_1類（140・141）、D_2類（142）、Ｆ類（144・145）が出土している。共伴遺物に肥前系磁器の段重（149）、瀬戸・美濃産の長石釉皿（146・147）、灰釉小椀（148）がある。遺構の時期は17世紀後半～18世紀前半に比定される。

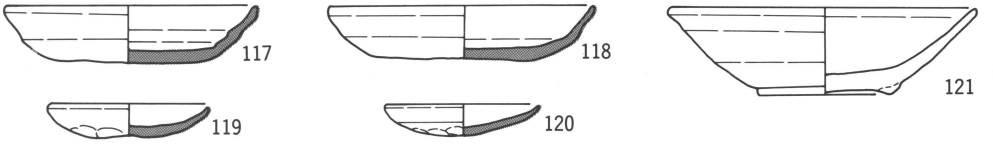
ＳＫ01：江戸時代末期の廃棄土坑。肥前系磁器端反椀（152）、瀬戸・美濃産磁器椀（153）ともに土師皿D_2類（150・151）が出土している。



第９図　麻生田大橋遺跡出土遺物（１：４）



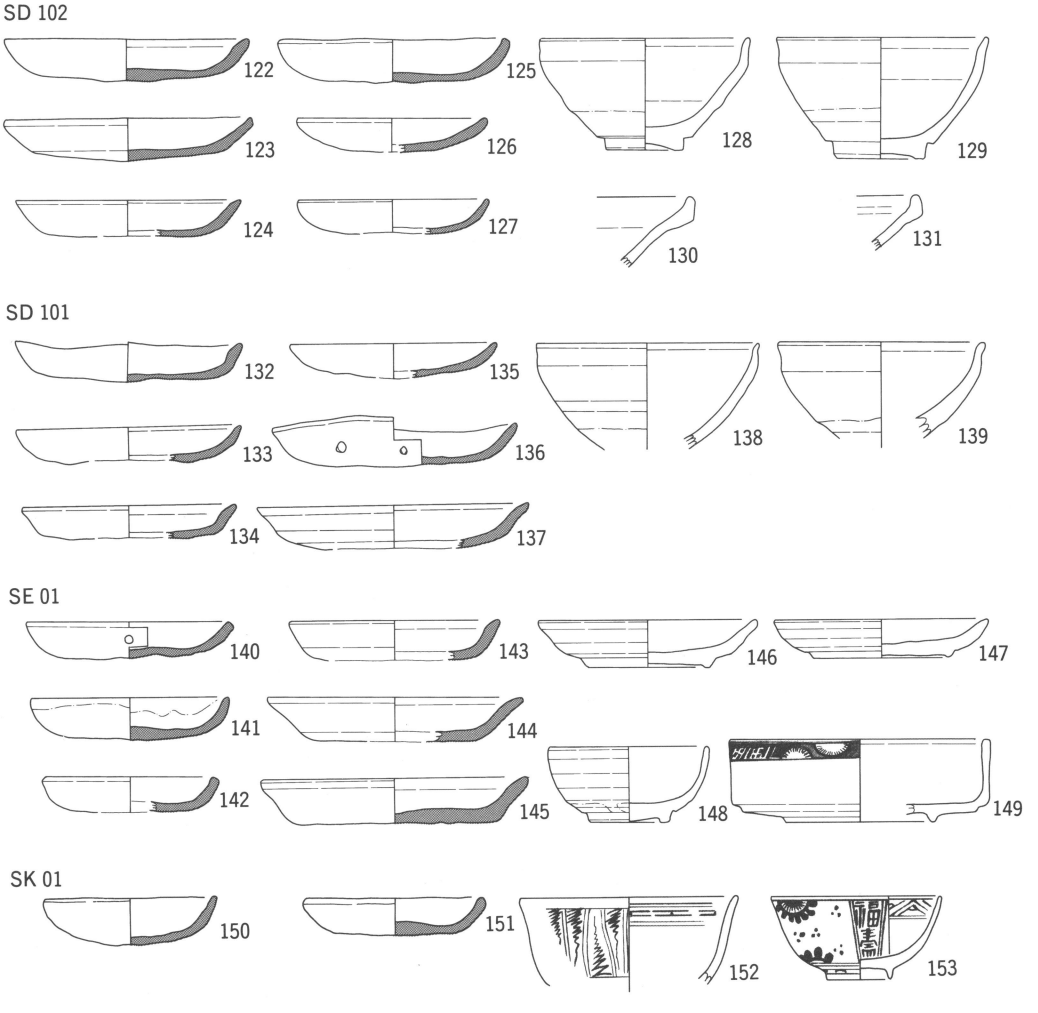
第10図　郷中遺跡ＳＤ06出土遺物（１：４）



第11図　雨谷遺跡Ｃ－２区土器集中区出土遺物（１：４）

⑫公文遺跡(16)（所在地：豊橋市牟呂町字公文）

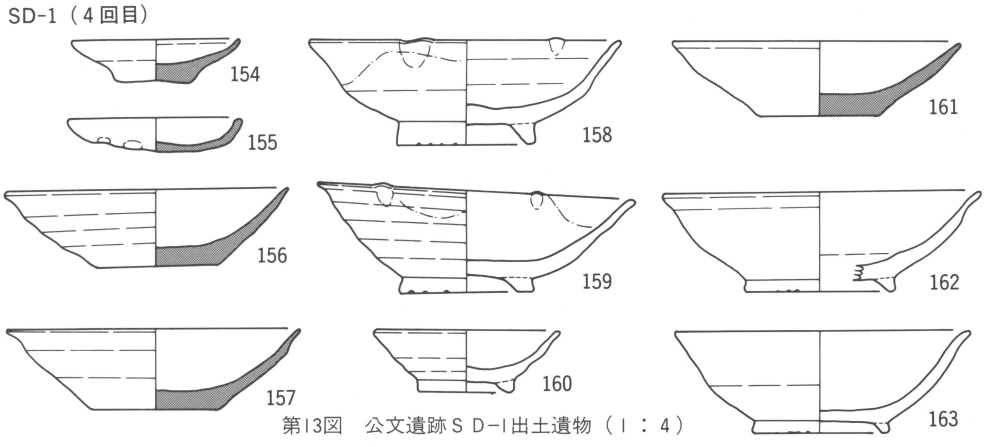
昭和61年度調査で検出された幅4.04ｍ、深さ1.6ｍの溝（ＳＤ－１）から出土している。この溝は発掘調査の掘削時に４回（層）に区分されており、第４回（最下層）からは土師皿A_2類（154）、B_1類（156・157）、D_2類（155）が、第３回（下層）からは土師皿B_4類（161）が出土している。これらの土師皿の時期は、共伴する灰釉系陶器によれば第４回（最下層）は12世紀中葉、第３回（下層）は12世紀後葉～13世紀中葉に比定される。



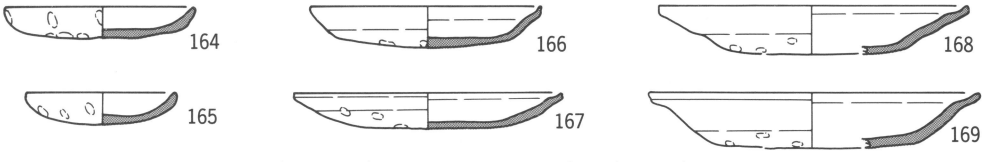
第12図　吉田城遺跡出土遺物（１：４）

⑬牟呂城跡[17]（所在地：豊橋市牟呂町字公文）

昭和61・62年度の発掘調査で確認された土坑（ＳＫ－24）から土師皿D_1（164）、D_2類（165）、Ｆ類（166・167）が出土している。この土坑出土の遺物に付いては小林久彦氏によって分類されているが、今回の分類との関係はＤ類＝皿Ａ類、Ｆ類＝皿Ｂ類である。本遺構の時期は16世紀初頭～中葉にかけてである。



第13図　公文遺跡ＳＤ－1出土遺物（1：4）



第14図　牟呂城跡ＳＫ－24出土遺物（1：4）

以上、遺跡毎に土師皿の出土状況を見てきたが、これを基に西・東三河地方の土師皿の変遷の特徴をまとめてみる。

まず、成形技法の面から見てみると、西三河地方では、図示しえなかったが室遺跡のＳＤ61最下層から非ロクロ成形の土師皿も出土しており、12世紀中葉から19世紀に至るまでロクロ・非ロクロ成形の土師皿が共伴すると考えられる。個別遺構毎の数量的検討を行わないままに言及することについては慎重を要するが、整理途中である室・牛ノ松遺跡共にロクロ成形による土師皿が中心をなしている。さらに八ッ面山北部遺跡や西尾城跡についても同じ傾向を示している。[18]

これに対し、東三河地方においては、郷中遺跡や公文遺跡の出土状況から理解される様に、12世紀後半に非ロクロ成形の土師皿が出現し、13世紀中葉以降はロクロ成形による土師皿は、共伴するものの量的には極少量であり、西三河地方とは逆に非ロクロ成形による土師皿が近世に至るまで一貫して作り続けられている。

このことは、西・東三河地方共に非ロクロ成形の土師皿の出現時期こそ尾張地方のそれと動きを一つにするものの、尾張地方においては13～14世紀は非ロクロ成形の土師皿が中心となり、15世紀代に再びロクロ成形土師皿が出現するという動きに対し、西三河地方では中世を通じてロクロ成形が主流をなし、東三河地方では13世紀中葉以降ロクロ成形が再出現しない、と様相が大きく異なっている。

次に整形技法から考えて見た場合、西・東三河地方共に基本的には内面ナデ・外面口縁部にヨコナデが施されている。これが15世紀以降になると、内面には従来通りナデ調整が施されるが、外面口縁部のヨコナデが省略されること（D類）が多くなってくる。更に、17世紀以降はこのタイプが中心を占めるようになる。

また、口径に関しては時代が新しくなるに従って縮小する傾向が窺わる。12世紀後半以降中世初期は、大（15～13cm）・中（12～10cm）・小（10cm以下）の3セットが存在するが、西三河地方では17世紀以降、東三河地方では14世紀以降、それまでの大（15～13cm）に相当するものが消滅し、中（12～10cm）・小（10cm以下）の2セットへと変化する。但し、東三河地方では15・16世紀代に口縁端部をつまみあげるF類が盛行し、これにあわせ口径も17cmを越える大型品が一時期出現する。

3．まとめにかえて

本稿は、三河地域に於ける土師皿の変遷を明らかにすることを主眼として分析を試みたが、個別遺跡の資料収集に終始した感が強く、課題ばかりが積み残されたものとなった。以下、今後の検討課題を述べてまとめとしたい。

まず第一に、具体的遺跡を例としての数量的分析が一切欠如している点である。西・東三河地方ともに、中近世を通じてロクロ・非ロクロ成形による土師皿が共存し、西三河地方ではロクロ成形が、東三河地方では非ロクロ成形が主流であると述べた事は、あくまで発掘調査時及び報告書作成過程での感覚的な側面に拠るものであり[19]具体的出土量の比較を成しえなかった。今後個別遺跡毎の数量的分析に基づく出土遺物全体に占める割合を具体的に提示することが、地域差を一層明確にすると思われる。さらに土師皿の使用痕の有無がその使用方法の解明に繋がるものと考える[20]。

第二に尾張地方との土師皿の成形方法の相違をどの様に理解すべきであるのか、さらに言及するならば、愛知県内の尾張・西三河・東三河各地方の土師皿のあり方の相違は如何なる事由に起因しているのであろうか。3地方の土師皿の変遷で、唯一その動向が一致する12世紀後半以降非ロクロ成形による土師皿が出現すると言う点に関しては、従来の研究史に示されるように、京都周辺に於ける土師皿生産の影響に拠る[21]ものとして理解するこ

とが可能であると思われる。但しその様に理解した場合、中世を通じてロクロ成形土師皿が主流を占める西三河地方と、非ロクロ成形による土師皿が中心をなす尾張・東三河地域の相違が、京都周辺とのつながりの密・疎に拠るものであるとするならば、それを決定する要因が何であるのかを明らかにする必要がある。

また、尾張地方で15世紀代にみられるロクロ成形土師皿の再出現を、窯業地の影響をうけて成立した在地系の土器と考え、大窯の出現・成立にもとめる点についても[22]それのみでは理解しえない様に思われる。西加茂郡三好町福谷地内の灰釉系陶器窯のK－G－87号窯[23]からロクロ成形の土師皿が出土していることにより、先の考えが示されているのであるが、それならば何故中世においても瀬戸・美濃地方では灰釉系陶器を産出する窯が存在しているにもかかわらず、尾張地方ではロクロ成形の土師皿が出現しないのであろうか。同様に東三河地方に関しても、渥美・湖西地方という灰釉系陶器の生産地が控えているにもかかわらず、ロクロ成形の土師皿が再出現しないのであろうか。さらに最も窯業生産地との直接的関係の薄い西三河南部地域でロクロ成形土師皿が中心となることは理解しがたい。[24]

この事は愛知県以外の他府県での同時期の土師皿の出土状況との比較により理解することも可能である。具体的には、古代末から中世初頭にかけて東北地方の拠点であった奥州柳之御所ではロクロ成形と非ロクロ成形の土師皿が共伴する。[25]中世東国においても幕府が設置された鎌倉では、13世紀初頭に非ロクロ成形の土師皿が出現するが、それ以後もロクロ成形の土師皿と共存している。[26]更に遠江では浜名湖を境として、西岸は非ロクロ成形が中心で少量のロクロ成形のそれが共伴するのに対し、東岸では逆にロクロ成形の土師皿が主流をなし、非ロクロ成形のそれが従となる。[27]また三重県では北伊勢地域では非ロクロ成形の所謂京都系土師皿は出土するが、南伊勢地域での出土例は報告されていない。[28]

この様に土師皿のあり方、特に成形方法に限定して考えるならば、地域によるばらつきが、それもかなり狭い範囲内での相違が看て取れる。この事は土師皿の製作・供給がかなり狭い範囲で行われていた事を物語っている。しかし、多くの地域においてロクロ・非ロクロ成形双方の土師皿が共伴する状況が多いように思われる。そしていずれが主となり、いずれが従となるかは、土師皿の製作地を含む供給範囲の地域性によって決定付けられる可能性が高い。そして、その地域性は、政治史的側面、経済史的側面等の各種の要因によって創出されるものと思われる。例えば、鎌倉期では京・寺社勢力と鎌倉・守護勢力とによる在地支配の問題、鎌倉後期に全国に広がりを見せる北条得宗家領との関係、南北朝期以降は、南・北朝への帰属の問題、守護大名・戦国大名の領国支配の展開等々。[29]

いずれにせよ土師皿の供給圏は先に見たようにかなり狭小であると思われ、狭小であればあるほど土師皿製作が職能として権力によって把握され易く、領主権力の規制を受け、

当該勢力地域での特色を色濃く反映する様になるのではないだろうか。今後の検討課題である。

地方・分類		時期	12C 前	12C 後	13C 前	13C 後	14C 前	14C 後	15C 前	15C 後	16C 前	16C 後	17C 前	17C 後	18C 前	18C 後	19C 前	19C 後
西三河	ロクロ成形	A_1	○○															
		A_2			○○													
		B_1			○○						○							
		B_2	○○		○○						○○○		○○					
		B_3	○○								○○							
		B_4																
		B_5									○○							
	非ロクロ成形	C_1			○○													
		C_2							○○		○○○							
		D_1															○○	
		D_2									○○				○○			
		E																
		F							○○									
東三河	ロクロ成形	A_1																
		A_2	○○		○○													
		B_1	○○															
		B_2	○															
		B_3	○		○○													
		B_4			○○													
		B_5																
	非ロクロ成形	C_1			○○				○		○○		○					
		C_2			○○				○									
		D_1	○						○○○		○○		○	○			○○	
		D_2							○○○		○○			○			○○	
		E			○○													
		F			○				○○○		○○							

註

(1) 佐藤公保 「中世土師器研究ノート(1)」(『愛知県埋蔵文化財センター 年報昭和60年度』 1986)
「中世土師器研究ノート(2)」(『愛知県埋蔵文化財センター 年報昭和61年度』 1987)

(2) 尾野善裕 「名古屋台地出土の中世土師質皿について」(『見晴台遺跡 第30次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館 1992)

(3) 「Ⅴ 考察」『杉山遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1988)

(4) 『八ツ面山北部遺跡 Ⅱ』(西尾市教育委員会 1992)

(5) 西尾市教育委員会松井直樹氏の御好意により未報告資料を掲載させて頂いた。

(6) 平成元年度調査：『清水遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1991)
平成2年度調査：『西尾市清水遺跡発掘調査報告書』(『愛知県埋蔵文化財センター 年報平成3年度』 1992)

(7) 『加美遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1989) 掲載図版を使用した。また、遺物の実見に際しては西尾市教育委員会松井直樹氏・鈴木とよ江氏にご配慮頂いた。

(8) 『愛知県埋蔵文化財センター 年報平成2年度』1991

(9) 『愛知県埋蔵文化財センター 年報平成4年度』1993

(10) 『東光寺遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1993)

(11) 前掲注(3)による。

(12) 『麻生田大橋遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1991)

(13) 『郷中・雨谷』(豊川市教育委員会 1989)

(14) 前掲注(13)による。

(15) 『吉田城遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1992)

(16) 『公文遺跡(1)』(豊橋市教育委員会 1988)

(17) 小林久彦「牟呂城出土の土師器について」(『マージナルNo.9』愛知考古学談話会 1988)

(18) 成形技法からみた西三河地方と東三河地方の境界は、東光寺遺跡周辺と考えられる。また西三河北部地域のそれについては、岡崎城二の丸跡では近世の遺構・包含層中より出土している土師皿は、ロクロ成形と非ロクロ成形の土師皿が共伴している。また、豊田市松平の三斗目・三本松遺跡から出土している中世前半の土師皿は、ロクロ成形のもののみである。
(『岡崎城二の丸跡』 岡崎市教育委員会 1982、
(『三斗目・三本松遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1993)

(19) 吉田城遺跡ではロクロ成形の土師皿は1点出土している。また、麻生田大橋遺跡は近世の遺構からロクロ成形のものが数点出土している。このことからすれば、東三河地域も2タイプの土師皿が共伴する可能性を含んでいる。

(20) 土師皿はその出土状況等からその使用は一度のみであることがとなえられている。但し、牛ノ松遺跡の区画溝からは、その他の陶器類と共に廃棄される状態で土師皿が出土している。また吉田城遺跡からは灯明皿に転用されたものも確認されている。今後は使用方法の相違による成・整形方法や器型による分類が可能か否かを考える必要が有るように思われる。

(21) 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京左京五条三坊十五町』(財古代学協会 1981)、同「平安末～鎌倉の土師器皿」(『中世土器研究 19』 中世土器研究会 1982)、伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集 第1集』 (財京都府埋蔵文化財研究センター 1987)

(22) 前掲注(1)

(23) 浅田員由「山茶碗窯出土の土師器皿について」(『愛知県陶磁資料館研究紀要 5』

(24) 当該地域では、わずかに幸田窯の存在が知られるのみである。

(25) 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 昭和63年度分』(財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989) 等による。

(26) 服部実喜「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」(『神奈川考古 第19集』 神奈川考古同人会 1984)

(27) 『長谷元屋敷遺跡 昭和61年度』(湖西市教育委員会 1987)

(28) 新田 洋「三重における古代末～中世にかけての土器様相」、同「中・南伊勢における中世土師器」(『マージナル No.9』愛知考古学談話会 1988)

(29) 短絡的に捉えることについては慎重を要するが、一つの考え方としては、例えば鎌倉時代においては、三河守護は足利一族であり、その守護所は岡崎矢作宿に置かれていたことが知られてい

る。さらに西三河南部地域は足利一門である東条・西条両吉良氏により中世を通じて支配されていた。これに対し東三河地域には伊勢神宮領が比較的多く存在している。この様な個別の在地支配の状況と土師皿のあり方を具体的に比較検討する事が、さらに理解を深めることに繋がると思われる。この点に関しては前掲註㉘において新田氏が南北朝の勢力範囲との関係について言及している。

濃尾平野における歴史時代の地震痕

服部　俊之

1．はじめに

濃尾平野は第四紀完新世に木曽川の三角州として形成された沖積平野である。この平野の地下は未固結の礫・砂・シルトなどの堆積物で構成されており、また、多量の地下水を含むため非常に軟弱な地盤になっている。そのため、巨大な地震が発生すると地盤の液状化やそれに伴う噴砂、さらには家屋の倒壊・沈降などの沖積平野特有の災害が想定される。事実、巨大地震の記録は「日本書記」以降数多く残されているが、その中にもこうした災害の記録は数多く見られる。

㈶愛知県埋蔵文化財センターでは、年間十数件に及ぶ遺跡の発掘調査を行っているが、その際に地層中に残されている噴砂・地割れ・断層などの大被害を与えた地震の痕跡（以下、地震痕とする）を発見することも多くなっている（第１図参照）。これらの地震痕はいずれも歴史地震の痕跡であり文献中の地震の記録と対比させることにより地震発生当時の被害の様子をより鮮明にイメージすることが可能となる。また、地震痕を用いて地層中に地震発生時の地表面および絶対年代を設定することも可能となる。

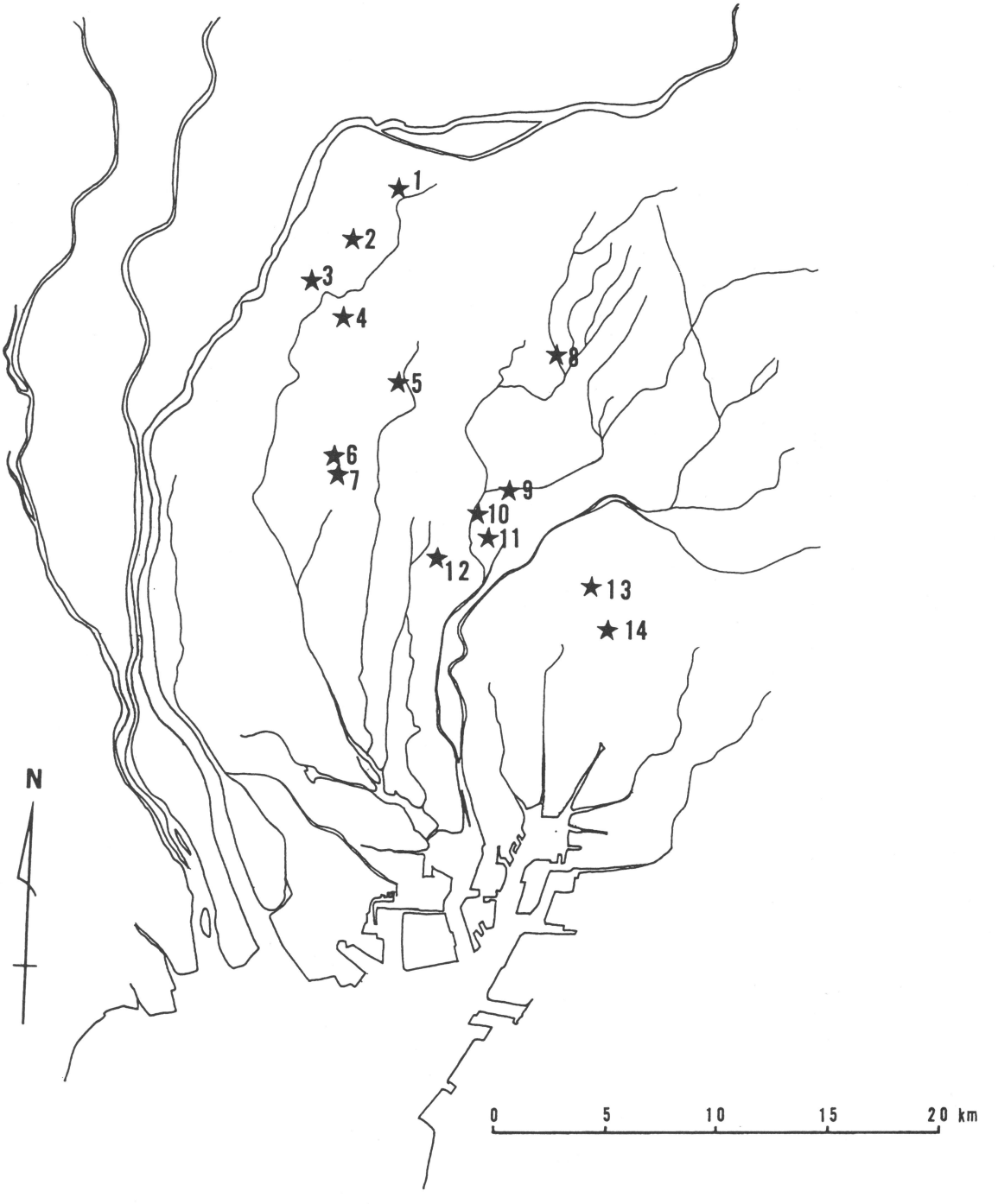
今回は、濃尾平野地域の遺跡の発掘調査で発見された地震痕を紹介し、濃尾平野における地震痕の編年を考えてみたい。

2．地震痕の形態

発掘調査で地層中より発見される地震痕の形態は大きく分類すると断層・地割れ・砂の液状化の３種類となる。(これらは密接に関連しており必ずしも正確な分類とは言い切れないがここでは説明の都合上このように分類する。) ここで、それぞれの簡単な説明をしておこう。

断層：噴砂により地下の砂層の体積が減少し、上位の地盤が陥没することによって形成されるものと地震断層の延長として形成されるものの２種類がある。ほとんどの場合、観察されるものは正断層であるが、その変位量は有名な地震断層の根尾谷断層（濃尾地震の震源）のように数ｍに及ぶものはなく、数㎝～数十㎝程度にとどまる。

地割れ：濃尾平野地域では多くの場合噴砂を伴うため、地割れが単独で確認されることはないが、名古屋地域などの洪積台地などではしばしば見つかる。その１つの例として名

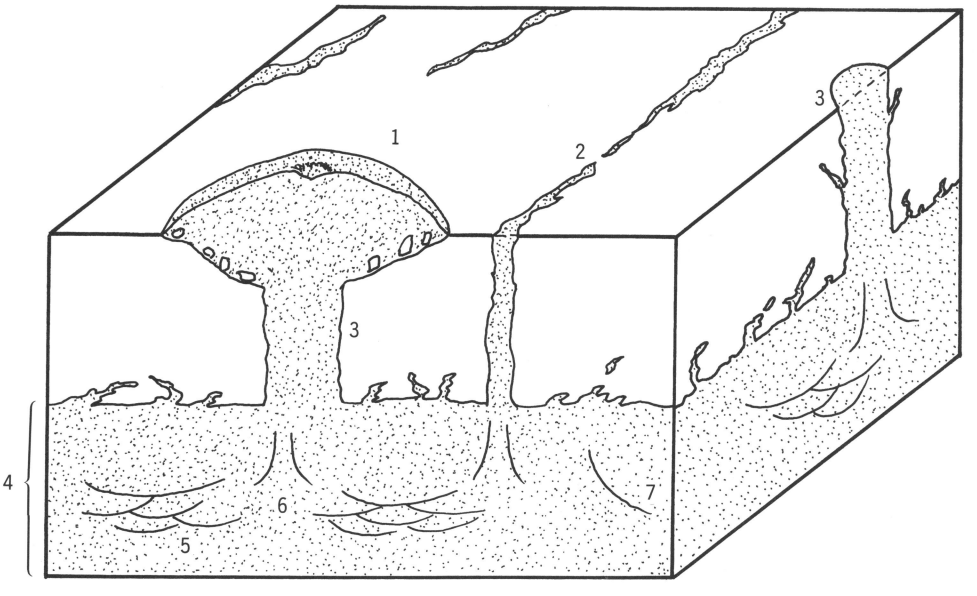


第Ⅰ図　濃尾平野で地震痕の発見された遺跡（平成４年８月末現在）

１．田所遺跡　２．西上免遺跡　３．大平遺跡　４．山中遺跡
５．東畑廃寺跡　６．尾張国分寺跡　７．堀之内花ノ木遺跡
８．岩倉城遺跡　９．朝日遺跡　10 清洲城下町遺跡
11．外町遺跡　12．甚目寺観音境内　13．名古屋城三の丸遺跡
14．富士見町遺跡

第Ⅰ表　各遺跡の地震痕の形態

遺跡名	所在地	地震痕の形態	推定される地震	備考・文献
1．田所遺跡	一宮市田所	噴砂	7世紀末の地震､天正地震？	
2．西上免遺跡	一宮市今伊勢町	砂脈、液状化層	不明	
3．大平遺跡	尾西市三条	砂脈	濃尾地震？	森・鈴木（1990）
4．山中遺跡	一宮市萩原・大和町	砂脈	濃尾地震	伊藤（1991）
5．東畑廃寺跡	稲沢市稲島町	砂脈	明応地震か天正地震、濃尾地震、東南海地震	稲沢市教育委員会（1991）
6．尾張国分寺跡	稲沢市国府宮	砂脈	明応地震？	稲沢市教育委員会（1989）
7．堀之内花ノ木遺跡	稲沢市堀之内町	砂脈	濃尾地震	
8．岩倉城遺跡	岩倉市大市場町	断層、液状化層	天正地震？、濃尾地震	森・鈴木（1990）
9．朝日遺跡	西春日井郡清洲町他	液状化層	不明	森・鈴木（1990）
10．清洲城下町遺跡	西春日井郡清洲町	噴砂、砂脈、液状化層、断層	天正地震、濃尾地震	森・鈴木（1989）
11．外町遺跡	西春日井郡新川町	噴砂	天正地震、濃尾地震	
12．甚目寺観音境内地	海部郡甚目寺町	砂脈	濃尾地震？	
13．名古屋城三の丸遺跡	名古屋市中区三の丸	地割れ	不明	森・鈴木（1990）
14．富士見町遺跡	名古屋市中区富士見町	地割れ	縄文時代後・晩期の地震？	森（1992）



第２図　噴砂の形態と名称

１．噴砂丘　２．砂脈　３．砂道　４．液状化層　５．皿状構造
６．柱状構造　７．擾乱構造

古屋市中区の富士見町遺跡第４次発掘調査では、縄文時代の地震由来と考えられる地割れが見つかっている。こうした地割れの延びる方向は、その地震を起こした断層に影響される可能性が強い。なお、噴砂を伴う場合は砂脈と呼び単なる地割れとは区別している。

砂の液状化：濃尾平野地域で最もよく観察される地震痕の形態で、地震発生時の被害記録としても各地で報告されている。地下の比較的浅い位置に地下水で満たされる砂層が存在することが発生の条件になる。この砂層が大地震の振動を受けることにより液状化する（液状化層の形成。噴砂にまで発達しない場合もある）。液状化した砂はその上位の地層の圧力をうけ水鉄砲のように強い力で地面を突き破り噴き出す（噴砂の発生。参考までに、噴砂の形態とその名称を第２図に示した）。噴砂は上位の地層の薄い部分や溝・井戸などの構造物のある部分など弱い部分を選択的に貫く傾向があるように思える。また、地割れを利用した砂脈を形成することも多いが、この場合の砂脈の延びる方向もやはり地震を起こした断層に影響されやすい。

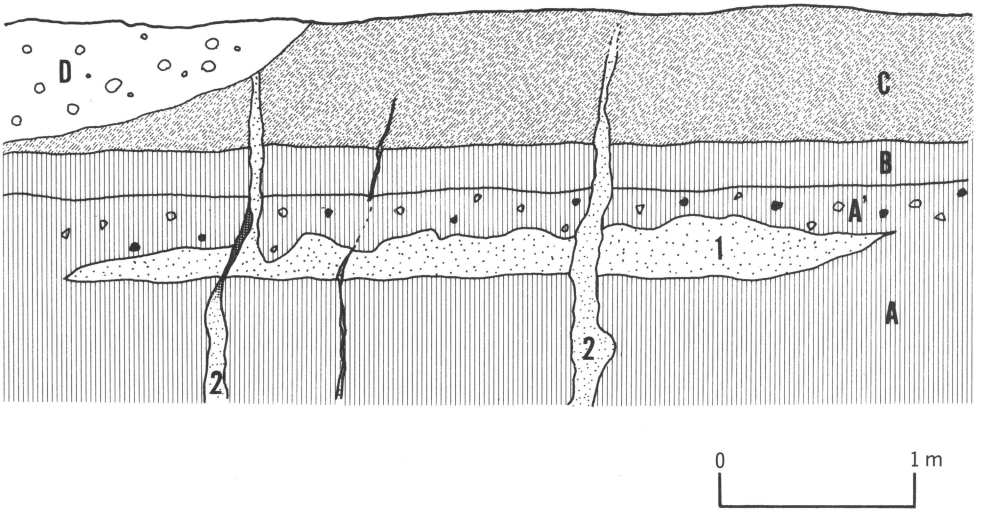
３．発掘された地震痕

濃尾平野で地震痕が発掘された遺跡を第１図に示す。この図は発掘調査によって確認されたものだけを示しているが、津島高校地学部（1977）や若松（1992）の住民への聞き取り調査や文献の記録調査（おもに濃尾地震と東南海地震、それぞれ発生年月日は1891年10月28日、1944年12月７日）を含めると濃尾平野全域で地震痕は残されていることになる。実際、最近の発掘調査においては、規模は異なるがほぼすべての遺跡で地震痕を検出している。これらの地震痕は新しい時代、具体的には濃尾地震相当のものがほとんどであるが、中には清洲城下町遺跡でみられるように約400年前に起こった天正地震（1586年発生）による古い地震痕も発見されている。では具体的な事例を示しながら地震痕の実態に迫ってみよう。

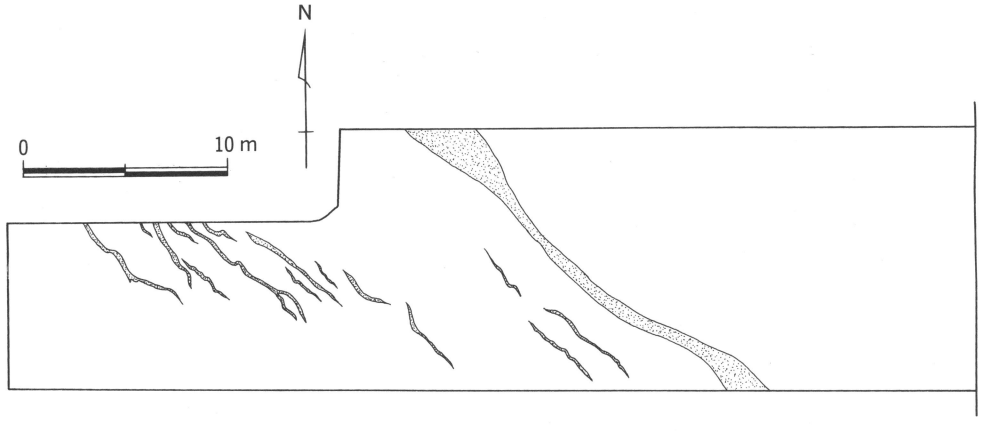
１）清洲城下町遺跡（第１図の10）

西春日井郡清洲町に位置する清洲城下町遺跡は五条川の自然堤防や氾濫原上に位置する中世から近世にかけての遺跡である。この遺跡周辺の地下のごく浅い位置には地下水で満たされた砂（五条川の自然堤防の砂層や沖積上部砂層）が厚く堆積しており、液状化が起こりやすい状態になってる。この遺跡の地震痕については森・鈴木（1989）により詳しく報告されている。それによると、1891年発生の濃尾地震と1586年発生の天正地震の噴砂が確認されている。さらに服部（1992）は、この２時期の噴砂の形態分類を試みている。

もともと、清洲城下町遺跡は濃尾地震を引き起こしたといわれる根尾谷断層の濃尾平野への延長である「岐阜－一宮線」上に位置し、この影響をまともに受ける地域である。当



第３図　清洲城下町遺跡（92Ａ区）における天正地震の噴砂と濃尾地震の砂脈の関係
１：天正地震の噴砂　２：濃尾地震の砂脈　Ａ：城下町期前期の地層（砂質シル層）、Ｂ：天正地震後の整地層（シルトブロックまじりの砂質シルト層）、Ｃ：江戸時代の地層（砂レキまじりの砂質シルト層）、Ｄ：現世の埋土



第４図　堀之内花ノ木遺跡（91Ｈ区）西半分における砂脈の平面分布
Ｎ40°－50°Ｗ方向の砂脈が良く発達している

初から濃尾地震の影響は予想され、実際多くの砂脈が発見された。これとは別に天正地震の噴砂が見つかっているが、この地震では砂脈の形成はあまりみられず、きのこ状の噴砂丘が形成されている。この２つの地震痕の形態の違いについては注目しておく必要がある。

根尾谷断層およびその延長の「岐阜－一宮線」の活動により発生した濃尾地震は地表に断層活動の直接の影響として地割れを形成させ、その部分に砂脈状の噴砂を形成している。これに対して、天正地震は震源となる断層に養老－伊勢湾断層（飯田、1980）、あるいは白川断層という２つの説があるが、いずれにしても清洲城下町遺跡からは遠く離れた地点での断層活動により発生しており、断層の影響を受けた方向性のある砂脈は形成されず、むしろ地震そのものの「揺れ」によりきのこ状の噴砂丘を形成している。この２つの地震痕の形態の違いは1992年度の発掘調査でも確認されている（第３図）。

２）山中遺跡（第１図の４）

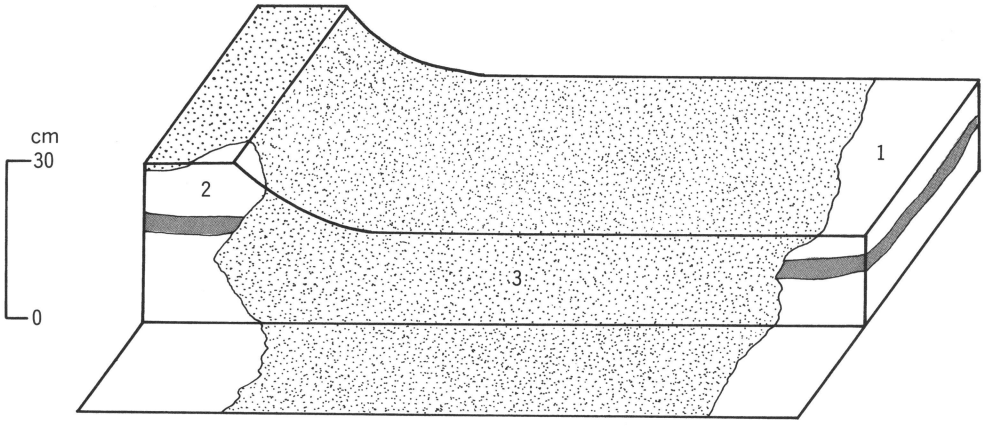
一宮市大和町・萩原町に位置する山中遺跡は弥生時代後期の標識遺跡として全国的にも著名な遺跡である。この遺跡においても濃尾地震の地震痕が発見され、伊藤（1991）により報告されている。ここで発見された地震痕は噴砂と断層である。噴砂は砂脈状のもので弥生時代後期の溝を選択的に貫いている。そのため震源となる根尾谷断層あるいは「岐阜－一宮線」の方向性との関係については不明瞭である。また同時にＮ10°Ｅ方向の断層が観察されている。この断層は噴砂により砂層の体積が減少し、上位の地層が陥没して発生した正断層であり、変異量は約20㎝である。

３）堀之内花ノ木遺跡（第１図の７）

稲沢市堀之内町付近に存在した「尾張国分寺」に関連する遺跡であり、やはり濃尾地震の地震痕（砂脈）が発見されている。この遺跡における砂脈状噴砂は遺構のほとんどみられない低地状の部分に分布している。このことは震源となった根尾谷断層との関係を直接考えることができるため非常に都合がよい。実際に観察された砂脈は第３図のようにＮ40～50°Ｗ方向に「杉型」の雁行配列を示した。最大幅１ｍ強、この規模は濃尾平野でみられる砂脈としては最大級で、断層活動の影響を直接受けて形成された可能性が強い。それは根尾谷断層の濃尾平野への延長とされる「岐阜－一宮線」の活動が根尾谷断層と同様に左横ずれを伴うものと考えたうえでの話であるが、Ｎ40～50°Ｗの方向性を示す砂脈はこの考えを裏づける証拠となりうる（第４図）。

４）田所遺跡（第１図の１）

一宮市大字田所に位置する田所遺跡は、旧木曽川の自然堤防上に位置する古墳時代から鎌倉時代におよぶ複合遺跡である。田所遺跡でみられる地震痕には少なくとも新旧２時期のものがある。このうち新期の地震痕は中世の遺物包含層の上位に広がり近世の遺物包含



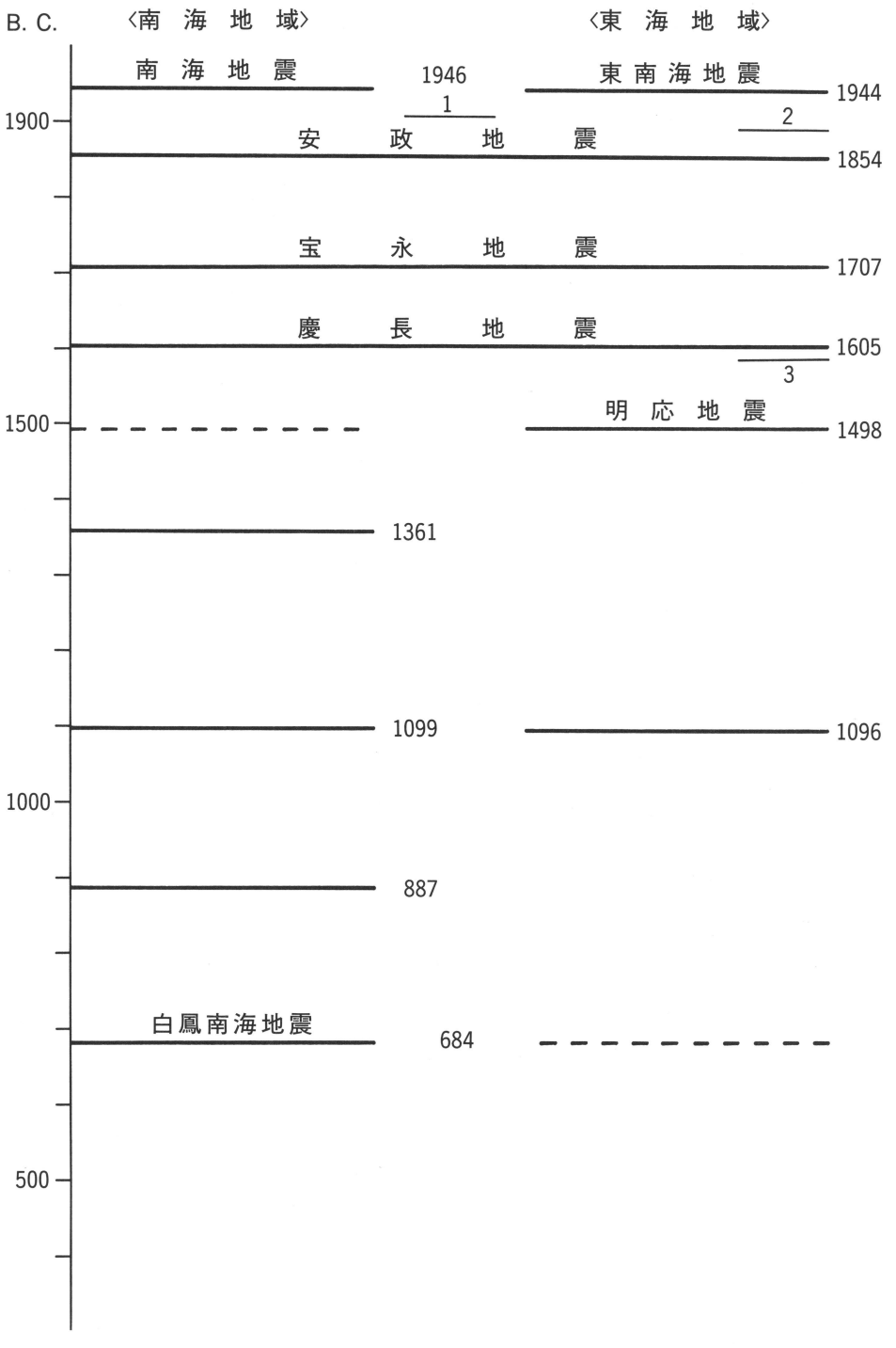
第５図　一宮市田所遺跡92Ａａ区の旧期噴砂のスケッチ
１：古墳時代の水田面、２：畦畔、３：噴砂（上面は奈良・平安時代の遺構に掘り込まれていた。最大幅3.6ｍ）

層に覆われている。この時代に関連する地震としては1586年の天正地震と1498年の明応地震がある。ここでみられる地震痕は砂脈がほとんど発達しない噴砂で、形態的には清洲城下町遺跡の天正地震の地震痕に類似している。しかしながら、時代を決定するだけの確証が得られないので地震を特定することは避けておく。

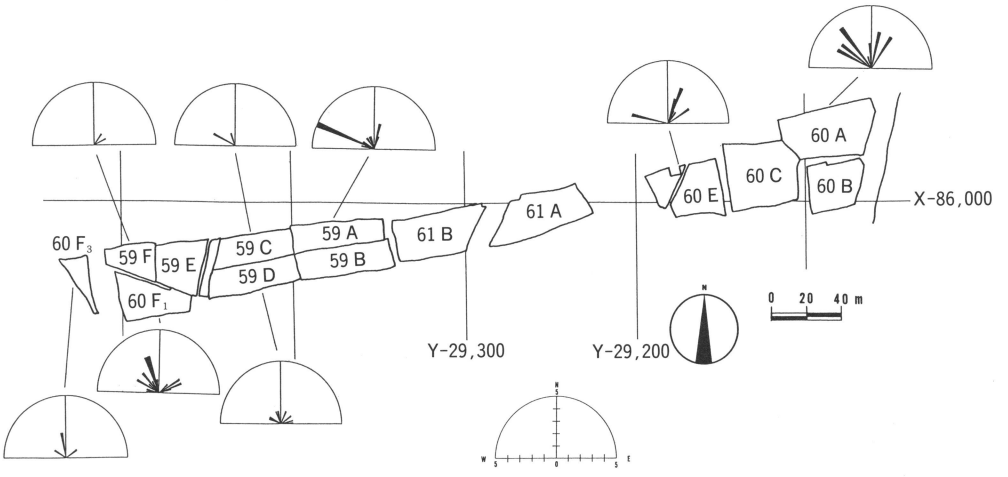
一方、旧期の地震痕は新期の地震痕と同様な形態を示す噴砂で、古墳時代の水田を突き破りその畦畔を覆っている。さらに奈良・平安時代の遺構に掘り込まれていることも確認できる（第５図）。この時代に愛知県で記録されている地震はないが、西日本では684年に、震源が南海トラフ付近にあると考えられる巨大地震が発生している（第１表参照）。この地震を南海地震の１つと考えると、これに対応する東海地震もおそらくこの時代に発生していたと考えられる。その証拠として静岡県埋蔵文化財調査研究所と袋井市教育委員会が発掘した袋井市の坂尻遺跡で７世紀末と考えられる地震痕が発見されている。田所遺跡での旧期噴砂の発見は坂尻遺跡の地震痕とともに文献上の記録にはない東海地震の活動の１つをより確かなものとする証拠であると考えられる。

５）その他

今までに紹介した遺跡のほかにも稲沢市・一宮市・尾西市・岩倉市・甚目寺町・清洲町など濃尾平野で発掘調査が行われたほとんどの遺跡で地震痕は発見されている（地震痕という認識のなかった時代、あるいは発掘調査担当者が地震痕に気づかずに発掘した遺跡は不明）。これらは濃尾地震の地震痕がほとんどを占めるが、天正地震・明応地震・684年頃の東海地震のように古い地震痕も発見されている。今後の調査で過去の複数の地震の痕跡



第2表　濃尾平野に関係する巨大地震年表
1．江濃地震（1909年）、2．濃尾地震（1891年）、3．天正地震（1586年）



第6図　清洲城下町遺跡における砂脈の方向性
(図中の記号は発掘区の記号を表す)

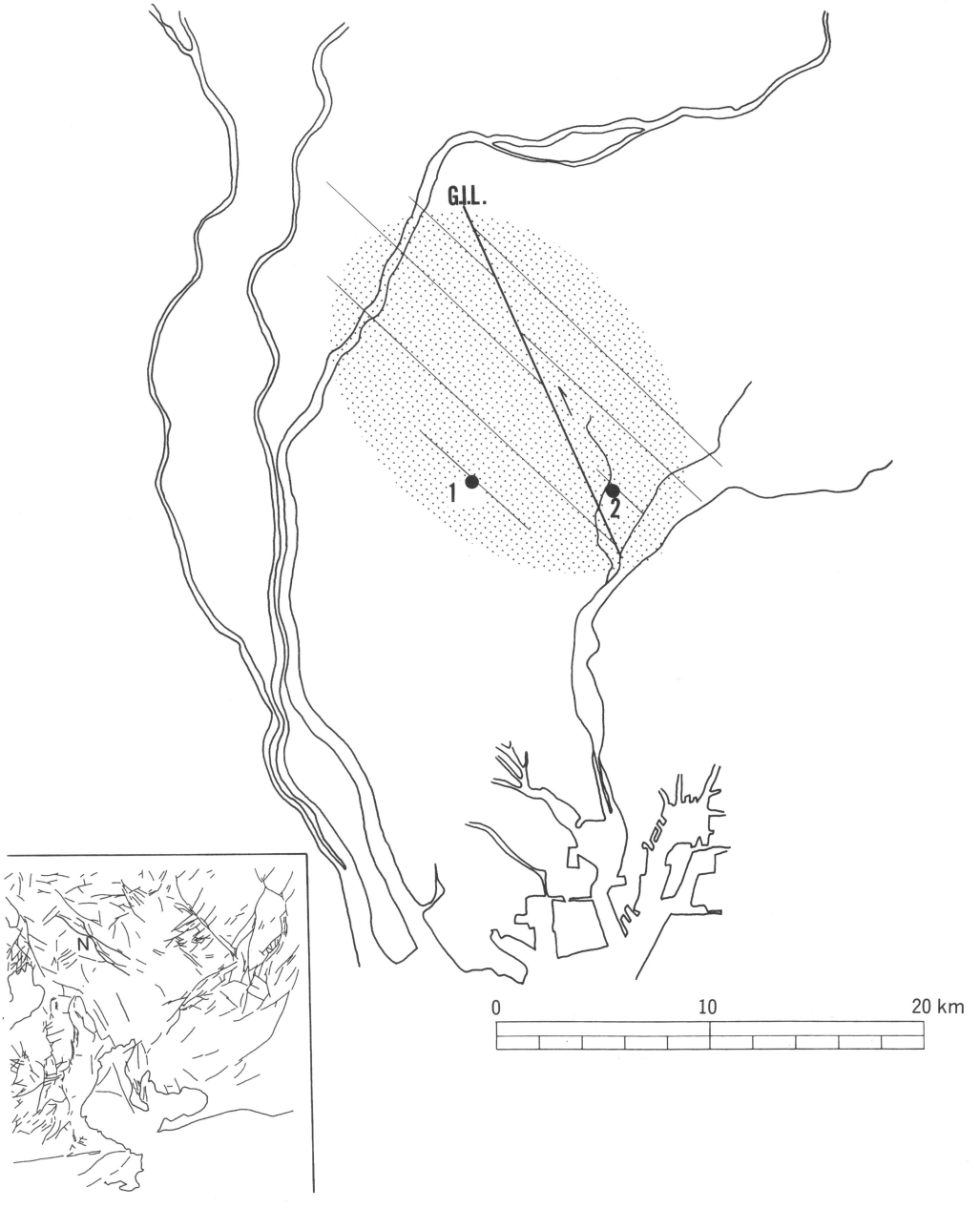
が発見されることが期待される。実際に、近畿地方の遺跡では、縄文時代以降の複数の地震の痕跡が報告され、その発生の周期性まで論議されている。こうした研究が東海地方でも盛んになれば考古学的な年代論に役立つばかりでなく、防災面でも十分に貢献できるものと思われる。

4．まとめと今後の課題

今回は発掘調査によって発見された地震痕およびその発生年代に関する紹介を行った。このことは濃尾平野の発掘調査に、地震活動をもとにしたいくつかの年代の基準を設けることにもつながってくる。また、歴史時代の地震を研究することにより地震の周期性を検討することも可能になる。

ここであらためて地震痕の分布を考えてみると、その範囲は濃尾平野全域に広がる。特に濃尾地震の地震痕の分布は広範囲におよび、尾張西部の発掘調査の際には必ずといってよいほどその影響が確認される。しかも濃尾地震の地震痕については、他の地震痕と異なり断層運動に付随したある種の規則性が見いだされる。そこでこの報告のまとめとして現時点で考えられる規則性（尾張西部地域での）についてここで提案しておく。

筆者は、清洲城下町遺跡の昭和59～60年度の発掘調査地点における濃尾地震の断層活動と砂脈の方向性について検討を行った（服部、1992）が、その後、堀之内花ノ木遺跡の砂脈の方向性分析を加え、その解釈の仕方に若干の修正を行いより断層活動と密接に関連し



第７図　濃尾地震における砂脈の規則性
N：根尾谷断層、G.I.L.岐阜・一宮線
１：堀之内花ノ木遺跡、２：清洲城下町遺跡
(G.I.L.に斜文する細い線は砂脈の方向性を示すものである)

た砂脈配列の規則性を見いだした。第７図にその関係を図示したが、「岐阜－一宮線」を挟んで、１．堀之内花ノ木遺跡、２．昭和59～60年度発掘調査の清洲城下町遺跡（東部）では、N40～50°W方向の砂脈が卓越している（第４図、第６図参照）。この方向性は、根尾谷断層の左横ずれ運動とその結果形成された周辺の断層の方向性の関係にきわめて類似している。いままでに「岐阜－一宮線」が左横ずれ運動をしているとする報告はないが、砂脈の方向性を説明するためには左横ずれ運動を考慮することが妥当であると思われる。第７図に示した範囲では、若松（1992）ほかで示されるように地盤の液状化、家屋の倒壊などの被害が特に多く、「岐阜－一宮線」の左横ずれ運動の影響が強く現れているものと思われる。この地域における今後の発掘調査で濃尾地震の地震痕を多数発見しこの規則性をより確かなものにしていきたい。これにより、他の地震による地震痕との識別が容易になると同時に、より古い地震痕を発見する手がかりにもなり、さらには考古学における編年にも貢献できるものと考える。

謝辞

この研究を進めるにあたって通商産業省工業技術院地質調査所の寒川　旭主任研究官、岐阜大学教養部金折裕司助教授、愛知県立明和高等学校の森　勇一教諭、稲沢市教育委員会の北條献示氏、日野幸治氏、㈶愛知県埋蔵文化財センターの調査研究員の方々に多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

文献

服部俊之（1922），清洲城下町遺跡に見られる地震痕について．清洲城下町遺跡II、㈶愛知県埋蔵文化財センター，187–190．

飯田汲事（1980），天正地震（1586）・明応地震（1498）の地震と津波被害について．自然災害資料解析研究，７，170–182．

稲沢市教育委員会（1989），尾張国府跡発掘調査報告書（XI）．19Ｐ．

――――――（1991），東畑廃寺発掘調査報告書（III）．25Ｐ．

伊藤隆彦（1991），愛知県山中遺跡から発見された地震痕．名古屋地学、53、31–35．

森　勇一・鈴木正貴（1989），愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義．活断層研究，７，63–69．

――――・――――（1990），清洲城下町遺跡及びその周辺から発見された歴史地震の記録．歴史地震，５，33–41．

――――（1992），名古屋市富士見町遺跡より発見された歴史時代を遡る地震の痕跡．富士見町遺跡第４次発掘調査の概要，名古屋市教育委員会，22–28．

津島高校地学部（1977），濃尾平野南西部における流砂現象について．濃尾平野の総合的研究第２集，9–35．

若松加寿江（1992），日本の地盤液状化履歴図．東海大学出版会，341Ｐ．

朝日遺跡で検出された弥生時代後期竪穴住居覆土のプラントオパール分析について

都築暢也・服部俊之・石黒立人

はじめに

本稿で紹介する分析結果は、以下に述べているように10年以上前に採取された土壌サンプルを試料にしている。そのため試料の保存状態などについて不安がなくもないが、これまでわれわれが調査成果を蓄積してきたはずの竪穴住居跡について、その対応の盲点を突いているという感を強く抱かせるものであったので、あえてここに報告することにした。

近年プラントオパール分析は水田土壌の認定に大きな威力を発揮し、水田研究の一翼を担っているが、分析対象は何も水田のみに限定されるものではないだろう。その意味で、今回の分析結果はこれまで植物種子などの比較的大型の遺存体を目標にしていた竪穴覆土の分析範囲を拡げる必要を示したものと言える。

ただ、いずれにしても一定程度の分析データの集積が必要であり、それをもって研究の開始となるものであるから、今回の報告はその第一歩として位置づけ、今後の展開を期待することにしたい。（石黒立人）

１．土壌サンプル採取の経緯

今回報告する土壌試料を採取した住居跡は、1979（昭和54）年度の調査で検出されたものである。愛知県教育委員会1982『朝日遺跡』にＳＡ118 と登録されたこの住居跡は、環濠で囲まれた「北居住域」にあり、出土した土器を根拠に山中期に属すると考えた。南東部が調査区外であるため規模は明らかでないが、形態は隅円方形で周溝をめぐらせ、深さ８～25cmの掘り形を有する。床は黄色シルト層を敷いて貼床とし、その上に建築用の部材も含んだ数cmの厚さの炭化物層が全面に分布していた。肉眼観察すると炭化物層中に炭化米が存在しており、ガラス玉も出土したので、微細な遺物を検出するために土壌サンプルを採取する事にした。具体的には、住居の軸に沿って10cmメッシュを設定し、炭化物層を採取し、ビニール袋に納めた。当時の調査日誌には「何も出てこない」という予測のもとでのサンプリングだったようである。しかし、調査後に水洗選別を行なった結果、多くの炭化米・銅鏃の基部・管玉が出土した。

今回プラントオパールが検出された試料は、その時に水洗選別されずに愛知県清洲貝殻山貝塚資料館に保存されたもので、試料の時期については、①ＳＡ118は建て替えが行なわ

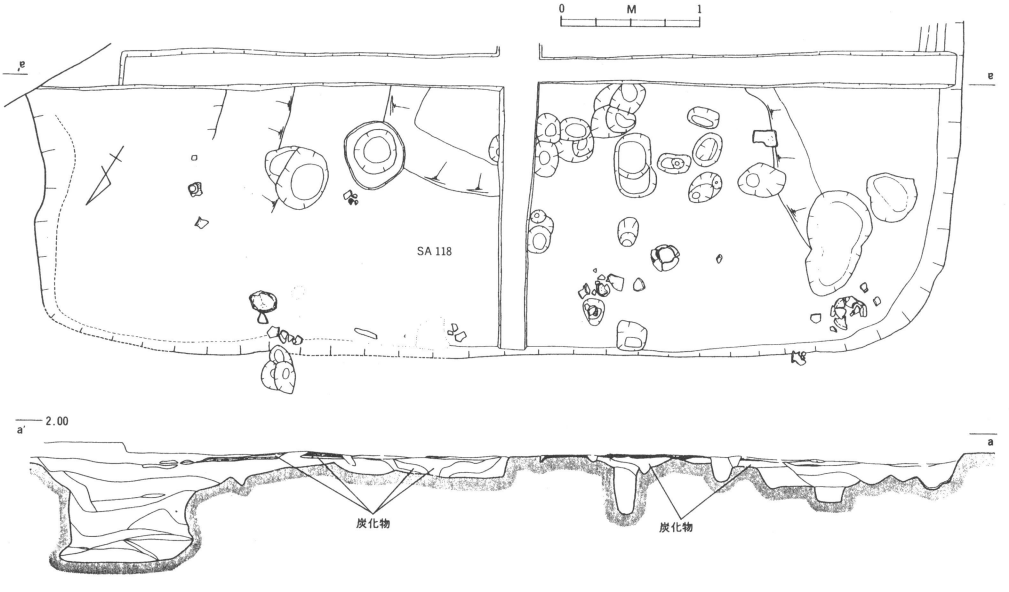
いないこと、②一部の土坑を除いて後世の破壊を受けていないこと、③貼床によって下層の土壌と明確に区分できたこと、などからＳＡ118が廃絶した時間に限定できる。

（都築暢也）

２．植物珪酸体の分析

植物珪酸体の分析は、古環境研究所に依頼した。その結果、住居跡内の黒色土層からは、イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する珪酸体が33,200個／ｇと非常に高い密度で検出され、イネ（機動細胞珪酸体）も2,000個／ｇ検出された。また、棒状珪酸体が極めて多量に検出され、表皮毛起源も多く見られた。上述のように、これらの珪酸体の大半はイネ籾の芒および剛毛に由来するものと考えられる。これらのことから、住居跡内から検出された黒色土層の給源はおもにイネ籾（籾殻）と考えられる。

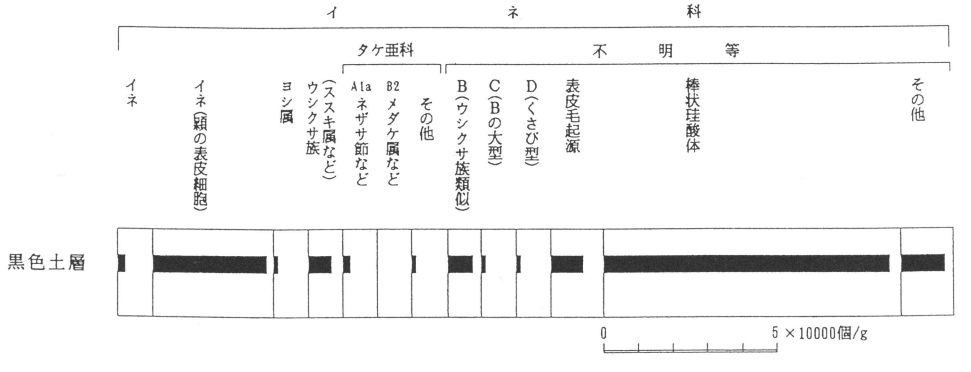
（服部俊之）



第１図　土壌サンプルを採取したＳＡ118

第1表　朝日遺跡における植物珪酸体分析結果
（単位：×100個/g）

分類群	黒色土層 34
イネ科	
イネ	20
イネ(穎の表皮細胞)	332
サヤヌカグサ属	
ヨシ属	14
ウシクサ族(ススキ属など)	61
ジュズダマ属	
シバ属	
タケ亜科	
A1aタイプ(ネザサ節など)	20
B1タイプ(クマザサ属など)	
A2タイプ(マダケ属など)	
B2タイプ(メダケ属など)	
その他	7
不明等	
Aタイプ(キビ族類似)	
Bタイプ(ウシクサ族類似)	68
Cタイプ(Bタイプの大型)	7
Dタイプ(くさび型)	7
Eタイプ	
表皮毛起源	95
茎部起源	
棒状珪酸体	820
その他	129
(海綿骨針)	
植物珪酸体総数	1579



第2図　朝日遺跡における植物珪酸体分析結果

3．若干のコメント

弥生時代の建物は、床面の位置から、竪穴式や平地式の土間系と高床系に大別可能である。そして、倉庫は登呂遺跡で復元されているように、もっぱら高床式が典型であると考えられてきた。しかし、高床構造の建物は柱間２間以上で総柱でもなければ認定は難しいのであり、柱間１間の掘立柱建物ではなおさら高床であるかどうかの判断は難しいと考えざるをえない。

ところで、弥生時代の遺跡で掘立柱建物が検出されることは決して一般的ではなく地域的に差がある。竪穴（式）建物のみで集落が構成されていることも、地域によっては当り前である。こうした地域では掘立柱建物の倉庫はないのだから、それに代わる建物は竪穴（式）建物しかないのである。そして、竪穴（式）建物には規模の大小、炉の有無など、すべてが住居であるとは言えない状況のなかで、そのうちの或ものが倉庫である可能性を否定することはできない。

もちろん、雑穀や水稲を栽培する社会では収穫物を貯蔵するための「穀倉」が必須であるし、民族例ではネズミなどの小動物から守るために高床式の倉庫がある。だが、農耕文化が体系的に波及した地域は別にして、そこから二次的に影響を受けた周辺地域で果して当初から倉庫が存在したかどうかは検討しなければならない問題である。

弥生時代の煮沸痕跡のない大形甕や大形壺などの大形の容器類は、明らかに貯蔵用である。その中に何が貯蔵されたのかは明らかでないが、稲が穂の状態で貯蔵されるとしても大形容器に入れていけないのであろうか。わたしは高床に大形容器を収納することのほうが不都合であり、竪穴式建物・平地式建物が適しているようにも思える。

この意味で竪穴（式）建物の床面直上の覆土を採取してプラントオパール分析することは、竪穴（式）建物内に持ち込まれた稲の状態がどのようであったか、そしてその結果如何によっては倉庫（住居でない竪穴（式）建物）の識別が可能となるように思われる。

今回の分析結果は、多量の籾殻が竪穴内に存在したことを示している。しかし、そのデータのみでは籾殻だけがあったのか、籾もあったのかについては残念ながらわからない。それ以外の部位はなかったようだが､稲穂を刈り取った後の稲藁の利用法を含めて竪穴(式)建物内部に運び込まれた「稲」の実態を明らかにするために、今後も継続的にデータを集積し、比較検討が可能となる条件を整える必要があると考える。　　（石黒立人）

自然科学分析データの活用　その１－花粉分析と樹種同定－

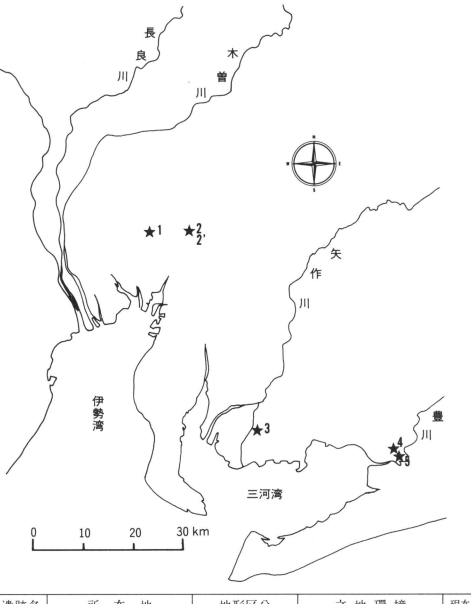
楯真美子・中垣内薫・服部俊之

１．はじめに

近年の遺跡の発掘調査においては、さまざまな自然科学的分析の手法が導入されており、これまでの考古学的な方法のみの調査では知ることができなかった人と環境に関する情報が、かなり正確に得られるようにきた。古環境の復元や石製品・木製品などの道具類の材質解明は、このような人と環境との関わりを複眼的に捉えていくための重要な研究分野になりつつある。

この研究分野のひとつの分析方法として、花粉分析法があげられる。この分析法は、地層の細粒堆積物中に残されている花粉の出現率から、地層堆積時における周辺の植生、気候などを推定する方法で、基本的な環境解析法のひとつとして使われている。また、木質遺物として取り上げられるさまざまな木製品や自然木・種子などの植物遺体も、環境解析のひとつの手段として活用することが可能である。

本論では、これまでに得られた花粉分析・樹種同定の資料をもとに、愛知県域に限定して、古環境の変遷についての検討、および木製品製作における用材選択の可能性の問題について分析を試みた。なお、ここで用いたのは、本センターが調査報告書作成のため、㈱パリノサーヴェイなどに委託しておこなった朝日遺跡（西春日井郡清洲町ほか）・勝川遺跡（春日井市）・町田遺跡（春日井市）・岡島遺跡（西尾市）における土壌の花粉分析と木質遺物樹種鑑定のデータ、および既報告の瓜郷遺跡（豊橋市）、篠束遺跡（宝飯郡小坂井町）における木質遺物樹種鑑定のデータである。



	遺跡名	所　在　地	地形区分	立　地　環　境	現在の標高
1	朝日遺跡	西春日井郡清洲町ほか	濃尾平野	氾濫原（木曽川水系五条川）	3～4m
2	勝川遺跡	春日井市勝川町ほか	尾張丘陵・濃尾平野	低位段丘から氾濫原（庄内川）	11～14m
2	町田遺跡	春日井市町田町ほか	尾張丘陵・濃尾平野	氾濫原（庄内川）	10～11m
3	岡島遺跡	西尾市岡島町	岡崎平野	氾濫原（矢作川）	5～6m
4	篠束遺跡	宝飯郡小坂井町	豊橋平野	氾濫原（豊川）	2～3m
5	瓜郷遺跡	豊橋市瓜郷町	豊橋平野	氾濫原（豊川）	2～3m

第Ⅰ図　遺跡分布図

2．花粉分析

朝日・町田・勝川・岡島の4遺跡において縄文時代中期から古墳時代にかけての花粉組成の変遷を概観できるように、資料の整理を行った（第2～4図）。用いた資料は第1表のとおりである。なお、それぞれの資料の時代については、考古遺物による編年に加え、放射性炭素年代値、火山灰層（松河戸火山灰；森ほか、1990）等によった。

資料番号	遺跡名	発　掘　区	時　　代
①	朝日遺跡	63A区旧河道B	縄文時代後期
②	朝日遺跡	61A・B区	弥生時代中期
③	朝日遺跡	61E区　SD02	弥生時代後期～古墳時代
④	町田遺跡	P－Sトレンチ	縄文時代中期～後期
⑤	勝川遺跡	62F区	弥生時代後期
⑥	勝川遺跡	62F区	弥生時代後期～古墳時代
⑦	岡島遺跡	63A区2地点	縄文時代晩期
⑧	岡島遺跡	63A区3地点	弥生時代中期

第1表　資料一覧

各遺跡の位置および標高は第1図に示した。朝日遺跡と岡島遺跡はともに氾濫平野内に位置しており、その標高は3～4mと5～6mである。また町田遺跡と勝川遺跡は隣接しており、低位段丘上から沖積面にかけて立地している。

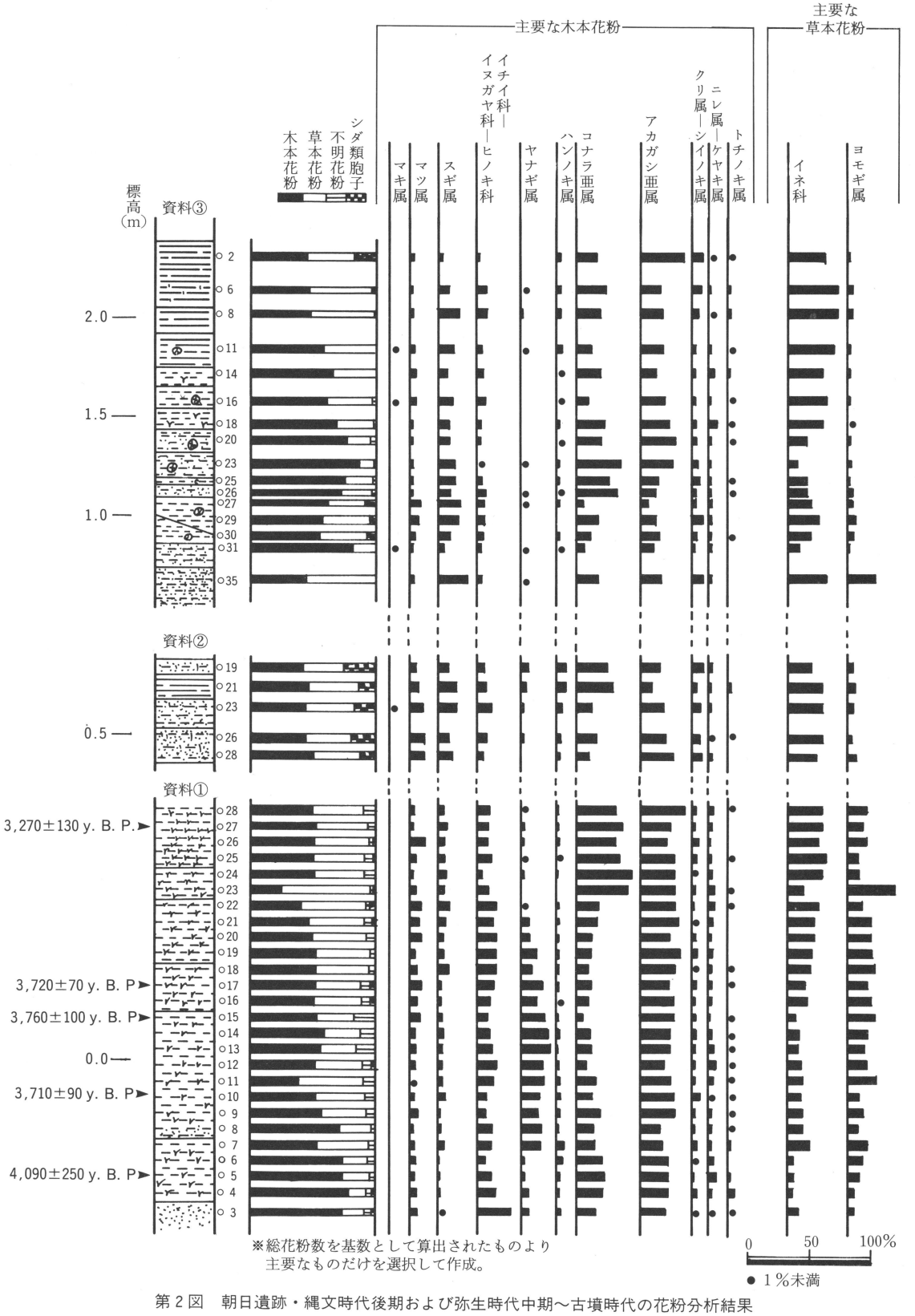
A．各資料の特徴

資料①　朝日遺跡　63A区旧河道B　　：縄文時代後期

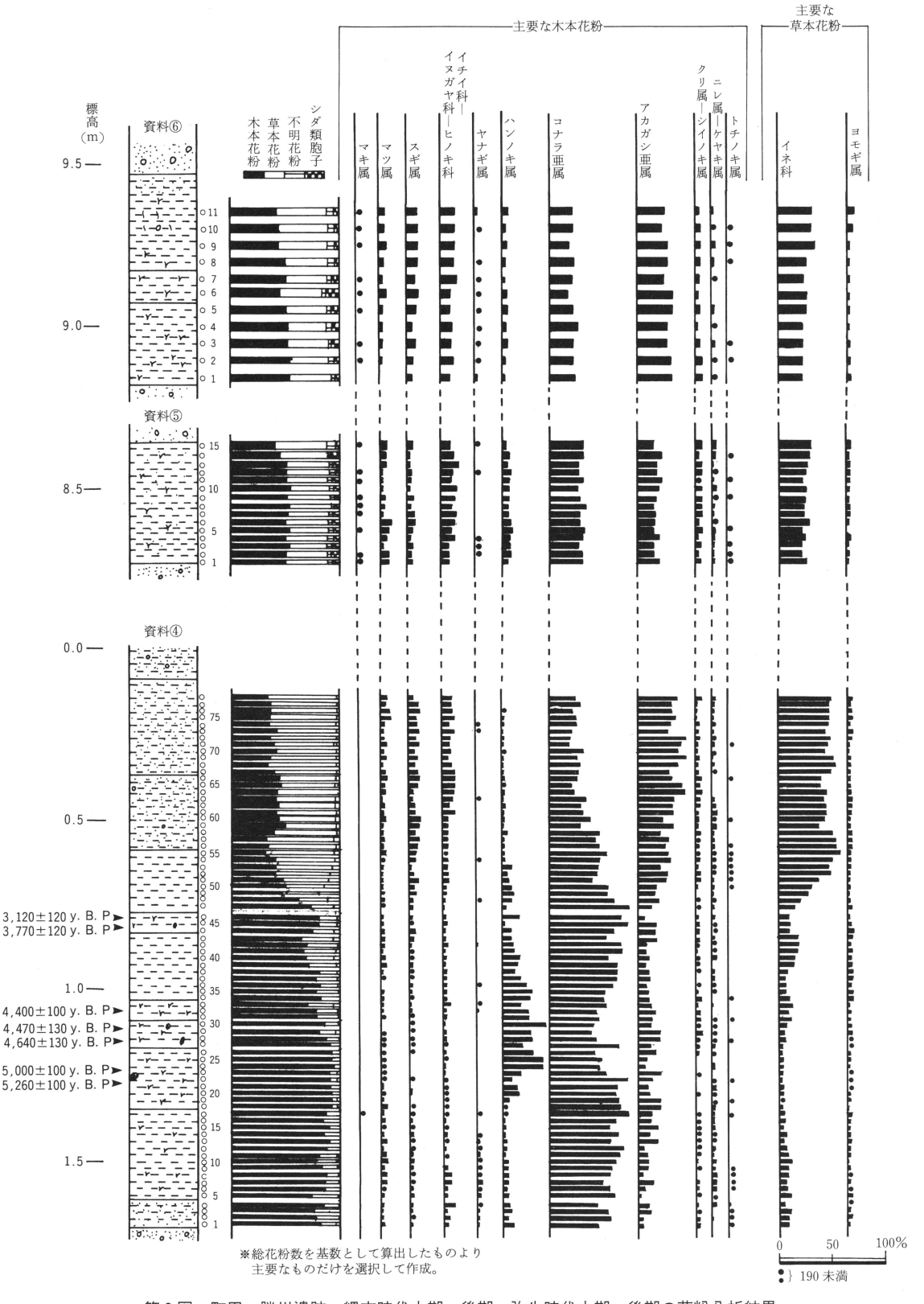
^{14}C年代測定値より試料4～28までは主に縄文時代後期頃の河道堆積物であると考えられる。木本花粉の出現率は平均で54.5%、草本花粉では平均37.3%と、木本花粉の出現率がやや高い。特に優先種は認められないが、アカガシ亜属・コナラ亜属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が多くみられた。ヤナギ属が平均5.1%、最大12.8%の出現率を示したことが特筆される。

資料②・③　朝日遺跡61A・B区・61E区　　：弥生時代中期～古墳時代

考古遺物により弥生時代中期～古墳時代にかけての頃の環濠内に堆積した試料である。木本花粉の出現率は平均で53.8%、草本花粉では平均34.7%であった。資料③の下半部（試料番号29～20）に木本花粉の出現率が増加する層準がみられた。資料①（縄文時代後期）に比べ、草本花粉の出現率が増加している。またスギ属の出現率が増加する傾向が認められ、逆にヤナギ属が減少している。



第2図　朝日遺跡・縄文時代後期および弥生時代中期～古墳時代の花粉分析結果



第３図　町田・勝川遺跡　縄文時代中期～後期、弥生時代中期～後期の花粉分析結果

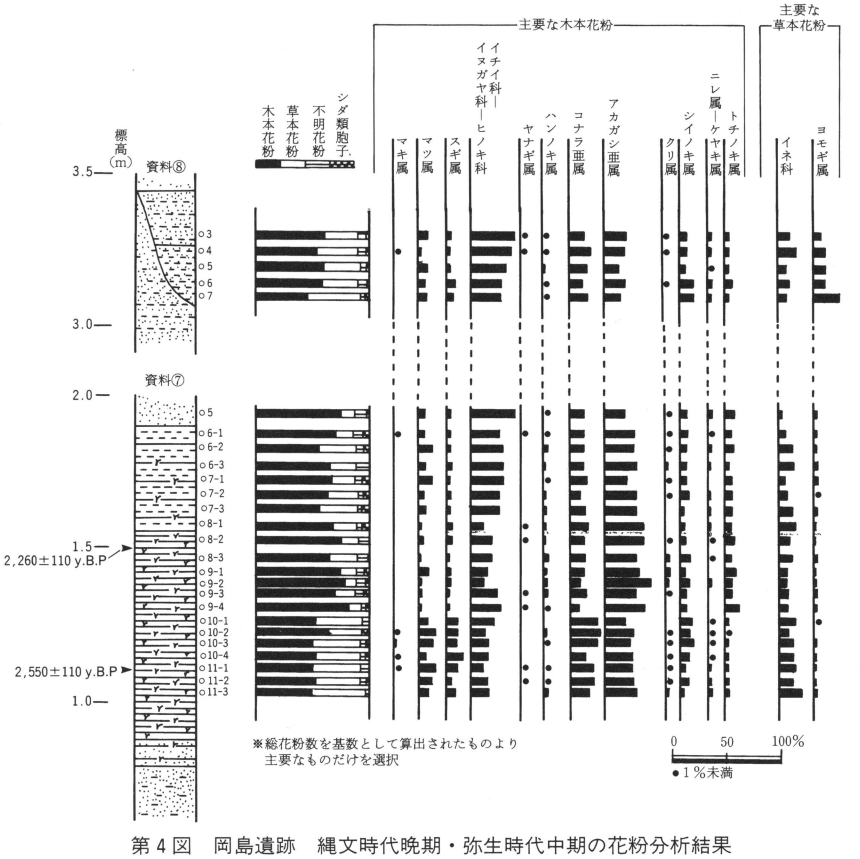
資料④　町田遺跡　P-Sトレンチ（試料番号１～46）　：縄文時代中期～後期

^{14}Ｃ年代測定値および松河戸火山灰層の対比より、縄文時代中期～後期にかけての埋積浅谷に堆積した泥炭層であると考えられる。木本花粉の出現率は平均で83.0％、草本花粉で平均14.2％を示し、木本花粉の出現率が著しく高い。コナラ亜属が優占し平均で47.2％、最大では65.7％の出現率を示した。アカガシ亜属の出現率は平均8.9％と低かった。イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の出現率も平均1.8％、最大でも7.8％と低かった。試料番号１～19ではエノキ属－ムクノキ属の出現率が平均で6.1％、最大で13.3％を示したのが特徴的である。また試料番号20～46（試料の上半部）ではハンノキ属の出現率が平均で16.3％、最大で35.4％を示した。

資料④　　町田遺跡P-Sトレンチ（試料番号56～77）：弥生時代後期～古墳時代

⑤・⑥　勝川遺跡62Ｆ区

考古遺物により弥生時代後期～古墳時代の頃の旧河道に堆積した試料とされる。縄文時代中期～後期の試料に比べ、コナラ亜属の出現率が減少し、アカガシ亜属が増加している。またイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科・スギ属も増加している。



第４図　岡島遺跡　縄文時代晩期・弥生時代中期の花粉分析結果

資料⑦　岡島遺跡　63A区2地点　　：縄文時代晩期

^{14}C年代測定値より主に縄文時代晩期（試料番号11－3～8－1）の頃の河道堆積物であると考えられる。木本花粉の出現率は平均で64.3%、草本花粉では28.3%である。資料①と同様、優占種は認められないが、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の出現率が平均で11.3%、最大23.3%と比較的多く出現した。この資料のうち、下半部の試料（11－3～10－1）ではスギ属・マツ属の出現率が10%前後であった。上半部の試料では（9－4～8－1）ではトチノキ属の出現率は平均で6.5%、最大で11.6%と多く認められた。

資料⑧　岡島遺跡　63A区3地点　　：弥生時代中期

考古遺物により、弥生時代中期の頃の河道に堆積した地層であると考えられる。下位の資料⑦と比べて花粉組成には大きな変化が見られなかったが、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の出現率はやや増加している。

B．各遺跡の植生変遷について

次に各遺跡ごとに植生変遷を試みた。

・朝日遺跡

今回の資料では、縄文時代後期の頃（資料①）と弥生時代中期から古墳時代にかけての頃（資料②および③）の花粉組成が示されている。どの資料にも目立った優占種はみられないが、多種類の木本花粉が出現することが特徴である。これは濃尾平野の氾濫平野内に位置する朝日遺跡の地理的環境を反映しているものと思われる。また縄文時代後期の試料と弥生時代中期以降の試料では、花粉組成に大きな差異はみられないが、草本花粉の占める割合が弥生時代中期以降の試料でやや増加している。

資料①の試料番号22～28においてコナラ亜属が増加する層準が認められ、縄文時代後期の頃に気候が一時的にやや冷涼化したことが考えられる。また資料③下部の試料番号29～20で木本花粉が多く出現する部分がみられるが、この試料を採取した地層中には木片を多く含まれることから、流水などの影響を受けて山岳地帯から木本花粉を多量に含んだ土砂が朝日遺跡付近に流入した可能性も考えられる。

・町田・勝川遺跡

今回の資料では、縄文時代中期～後期（資料④）および弥生時代後期～古墳時代（資料⑤および⑥）にかけての頃の花粉組成を扱った。朝日遺跡や岡島遺跡と比べ、木本花粉の種類が少ないことが特徴である。

縄文時代中期～後期の試料と弥生時代後期以降の試料の花粉組成を比較すると、コナラ亜属の出現率が平均で56.9%と高いことが特徴である。弥生時代後期以降ではアカガシ亜属とほぼ同率かやや低い出現率を示す。このことから縄文時代中期～後期は弥生時

代中期以降に比べ、気候が冷涼化していたと推測される。

また弥生時代後期以降では、木本花粉の割合は平均50.0%となり、縄文時代中期～後期の83.0%に比べかなり減少している。この木本花粉の減少は、人による森林の破壊を示している可能性が考えられる。

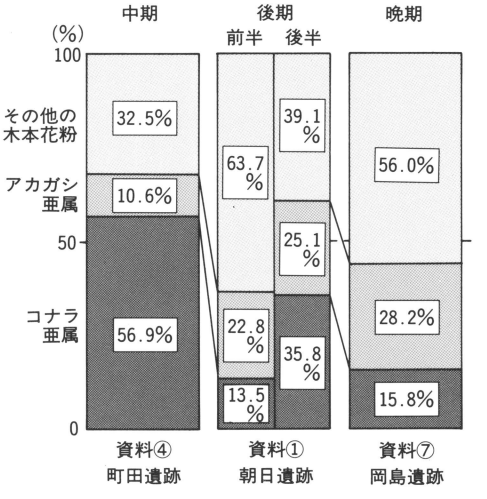
・岡島遺跡

今回の資料では、縄文時代晩期（資料⑦）～弥生時代中期（資料⑧）にかけての花粉組成を扱った。その結果、縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての間に、植生に大きな変化が見られなかったことが明らかとなった。また朝日遺跡、町田・勝川遺跡と比べイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の出現率が高いことが特徴的である。

C．縄文時代中期～晩期にかけての古気候の変遷について

今回取り扱った資料のなかで、縄文時代中期～晩期にかけてほぼ連続した花粉組成を概観することができた。資料④の縄文時代中期～後期にかけての資料（町田遺跡）ではコナラ亜属の出現率が56.9%を占めている。資料①の縄文時代後期の資料（朝日遺跡）では、下半部（試料番号４～22）でコナラ亜属の出現率が13.4%と低いのに対し、上半部（試料番号23～28）では35.8%と高くなる。また資料⑦の縄文時代晩期の資料（岡島遺跡）では、コナラ亜属の出現率（15.8%）は低く、アカガシ亜属の出現率（28.2%）が高い（第５図）。常緑広葉樹のシイノキ属の出現率もわずかながら高くなる。

これらはそれぞれ異なる地域の資料であり、遺跡の立地した地理的環境が異なるものの、同じ愛知県内に位置する遺跡であり標高差も小さいことより、時期による花粉組成の違いを反映しているものとみなすことができる。そこでコナラ亜属とアカガシ亜属の出現率を利用して縄文時代の後半における当時の古気候を推定したとすると、おおよそ次のようなことが考えられる。まず縄文時代中期の頃にはコナラ亜属の出現率が高く、気候はいくぶん冷涼化していたものと推定される。つづく縄文時代後期の前半にはアカガシ亜属の出現率がやや増加することから、気候が温暖化したことが考えられる。縄文時代後期の後半になるとコナラ亜属が増加することから気候が再び冷涼化し、その後縄文時代晩期の頃にはアカガシ亜属の増加によって温



※木本花粉の総数を基数として換算

第５図　縄文時代・中期～晩期にかけての堆積物中のコナラ亜属とアカガシ亜属の出現率の変化

暖化したことを読みとることができる。

D．今後の課題と問題点

古植生および古気候復元にあたっては、愛知県内外の花粉分析の試料数を増やすだけでなく、種実や葉化石、木製品などの樹種データおよび珪藻や昆虫の分析結果とも比較検討し、より総合的な環境復元をめざしてゆかなければならない。それとともに、これらの古生物試料を包含する地層の詳細な観察に努め、広域火山灰の発見とその記載、地形的特徴などについても併せて考察していく必要があろう。

3．樹種同定

ここでは本センターの資料と愛知県下で報告されている木質遺物の樹種同定結果に基づいて、木製品の樹種選択および古植生との関わりという問題を、花粉分析との相関により考えてみる。二つの分析法を併用するためには、同時期・同地域という条件が満たされていなければならない。今回収集した資料の中で、時期的にこの条件に叶っているのは、弥生時代中期と12～13世紀の資料であった。本稿では、比較的分析試料数の多い弥生時代中期の木質遺物のみをとりあげて分析対象にする。

A．弥生時代中期の木質遺物の樹種

瓜郷遺跡（試料数148）、篠束遺跡（試料数65）、岡島遺跡（試料数14）、勝川遺跡（試料数17）、朝日遺跡（試料数99）の５遺跡の資料が得られている（第１図）。ただし瓜郷遺跡と篠束遺跡では花粉分析の資料がないが、三河地方の比較検討資料として扱った。樹種同定を行った試料数には差があるが、それぞれの遺跡の結果を第６ａ図に示した。

ここでみられる樹木の多くは、その花粉が花粉分析によっても検出されている（第２～４図）。また、アカガシ亜属、コナラ亜属、マキ属、ヒノキ属などの樹木はいくつかの遺跡に共通している。その中でも、朝日遺跡ではアカガシ亜属、瓜郷および篠束遺跡ではマキ属の割合が大きい点に特徴がある。これらのことから２つの可能性が考えられる。

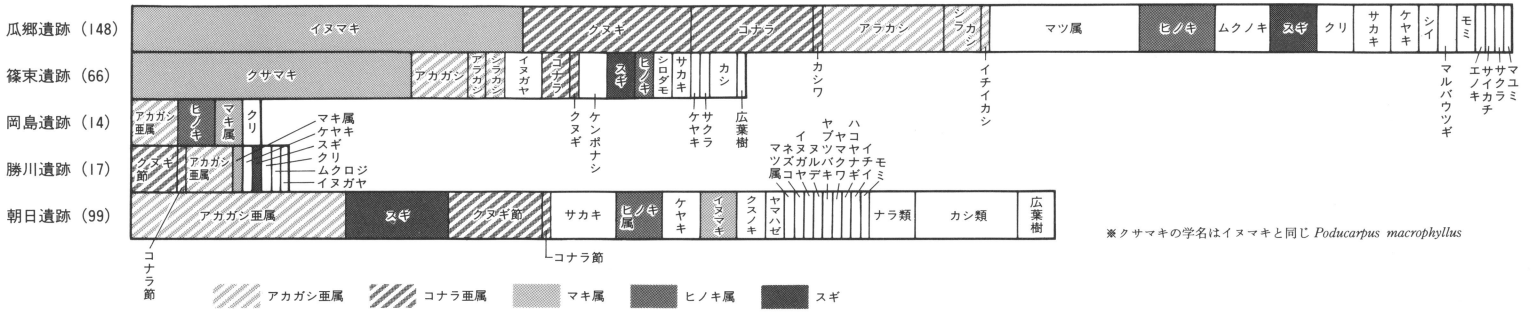
ひとつは弥生時代中期のそれぞれの地域における植生が、木製遺物に反映されている可能性である。同定された樹木は花粉分析結果にも現れているので、当時の遺跡周辺に自生していた可能性が高く、他地域からの搬入材とは考えにくい。この時代の人々は身近に自生している木を利用して、木製の道具類をつくったとみられる。

もうひとつは意図的な用材選択の可能性である。これについて、次に考えてみる。

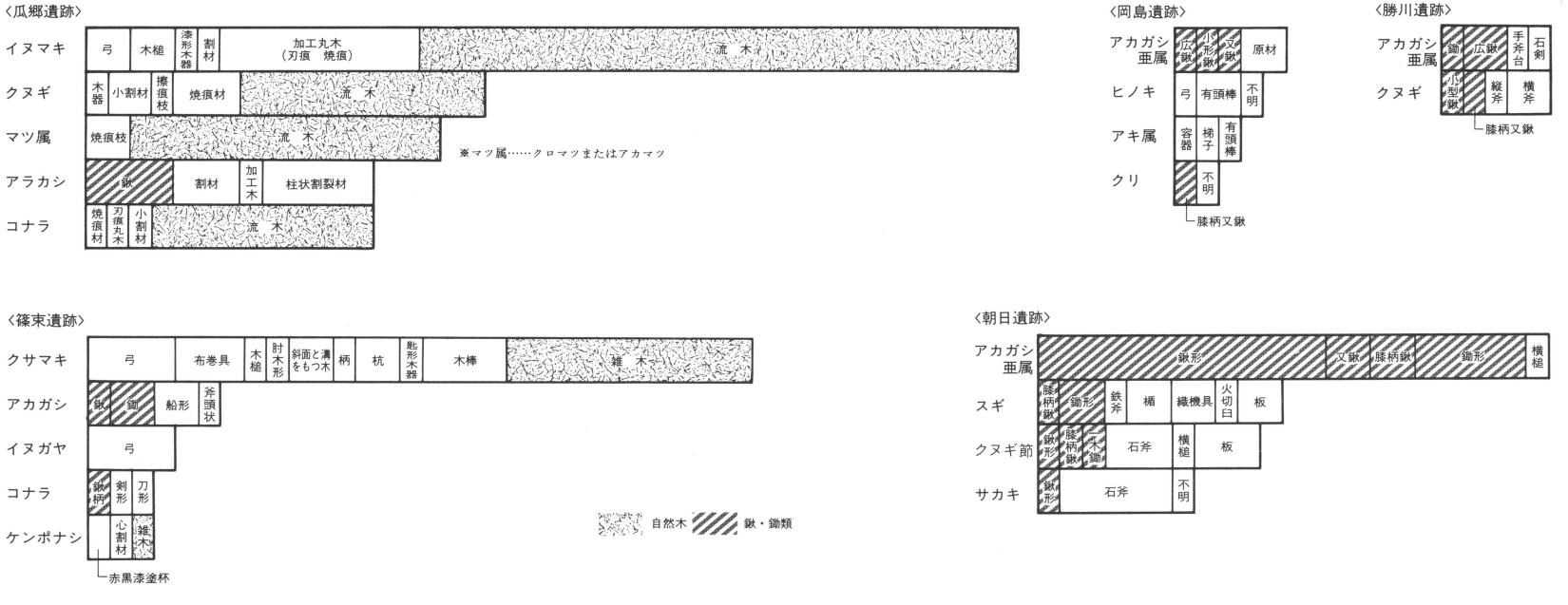
B．用材選択の志向性

各遺跡で大きな割合を占める樹木がどのような器種に用いられているかを第７図に示した。朝日遺跡で一番多いアカガシ亜属は、23例中22例が鍬・鋤の類に分類されている。ア

第６ａ図　遺跡別樹種同定結果



第６ｂ図　遺跡別主要材の分類



カガシ亜属は、他の4遺跡でも報告されており、器種としてはやはり鍬・鋤類がめだって多い（第7図）。花粉分析から、この時期アカガシ亜属が優勢で増加の傾向にあることがうかがえ、比較的手に入りやすい樹木であったと考えられる。いろいろな器種一般にみられてよいはずであるが、鍬・鋤類がめだつことは用材選択の可能性を示しており、注目される。

入手しやすさの面からみると、アカガシ亜属の次に花粉が多く検出されているのはコナラ亜属（コナラ節・クヌギ節）で、アカガシ亜属と同じコナラ属に分類される。瓜郷遺跡には、コナラ亜属の鍬・鋤類の出土例はない。篠束・勝川・朝日遺跡では出土例がみられるが、アカガシ亜属よりその比率は小さい。

このようなアカガシ亜属とコナラ亜属の鍬・鋤類としての使用率の違いは、どこからくるのであろうか。ここで出土樹木の材としての強さについて、圧縮・引張り・曲げ・せん断の4項目から比較してみた（第8図）。アカガシは、他の樹木と比べてその強さが優れていることがよくわかる。割裂しにくく、緻密で堅硬、ねばりが大で弾力性に富む。これに比べてコナラは割裂しやすく、生木から乾燥材となるまでの収縮率が10～12％である。アカガシが4～6％であるのに対し、かなり大きい値である。コナラの性質は、水田等で使用する鍬や鋤の用材として優れているとは言えないものである。

強さの面からみると、アカガシに次ぐのはケヤキである。ケヤキは堅硬でねばりも強く、弾力もある。しかも、収縮率は2～4％で、比較的加工も容易である。しかし、篠束、勝川、朝日遺跡でのケヤキの出土例はすべてが容器類である。試料の数が少ないとはいえ、どの遺跡においても鍬・鋤類に用いられてはいない。材としてのケヤキは、強さの点で鍬や鋤に向くといえるのになぜ使用されなかったのか。ケヤキは弥生時代中期には、アカガシ亜属・コナラ亜属に比較し花粉出現率が非常に少ない。したがって手に入りにくかったようであり、また壊れやすい道具としての使用は避けられていたのではないだろうか。ケヤキの水湿に強い性質と、乾燥したものは虫食害に強いとされる耐久性、さらには黄白色で光沢がある辺材の優美さは、容器類として非常に適していたと考えられる。

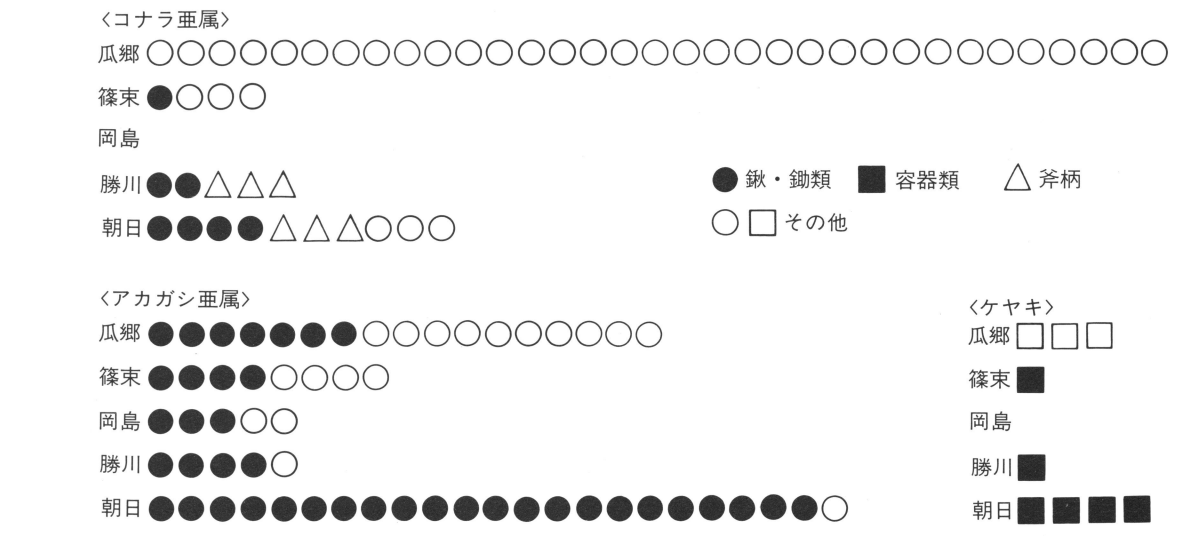
以上のことから、樹木の材としての特性より、鍬・鋤類にはアカガシ亜属が、容器類にはケヤキが選択された可能性が大きく、はっきりした用材選択の志向性がうかがわれる。

C．問題点

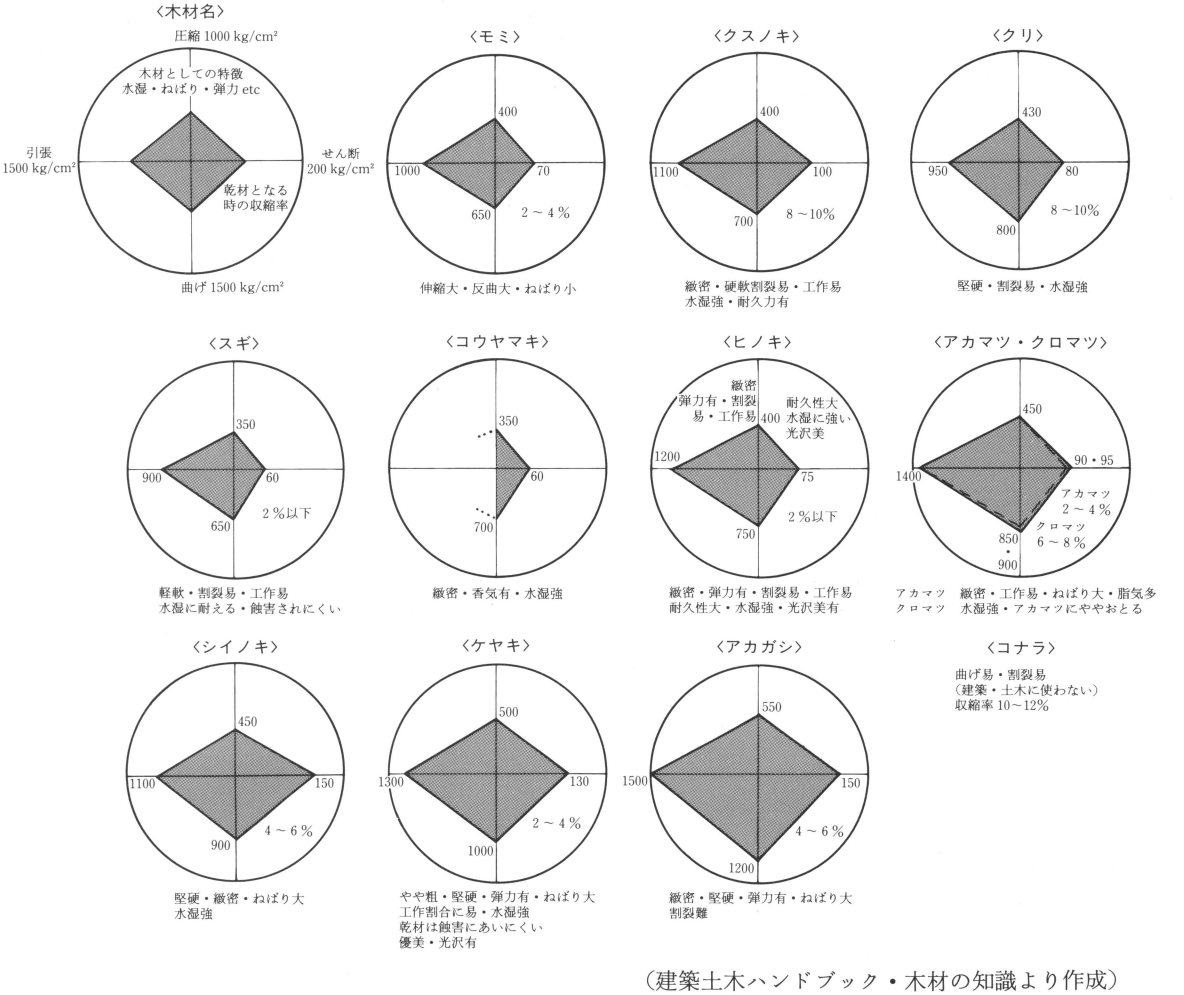
ここで取り扱った資料は、各遺跡の調査報告書作成時における研究目的に応じて収集・分析されている。しかし、樹種同定された資料の中でも、時期や器種分類がもう少し具体的に行われておれば、より多角的に活用できたと思われるものも含まれている。

篠束遺跡では雑木、瓜郷遺跡では流木がたくさん同定されている。遺跡で出土した加工

第 7 図　樹種別鍬・鋤類、容器類利用割合



第 8 図　木材の強さと特徴



（建築土木ハンドブック・木材の知識より作成）

されていない、いわゆる自然木にも目を向けることは重要で、種子や植物遺体同様、古環境復元の資料として十分に活用することができる。流木が何処から流れてきたのかという問題はあるにしても、古環境復元への一助となり、木製品の同定とは別の意味をもっている。

最後に、用材選択にあたっては、材の価値を認識した在地選択と、外来の文化による影響（木製品・原材の流通と規格の有無）とがあったことが考えられる。このため、広い範囲での他地域との比較が必要であり、この点が今後の課題として残されている。

4．まとめ

これまでに蓄積された花粉分析と樹種同定の資料をもとに、古環境の変遷および木製品製作における用材選択の可能性について検討した。

特に花粉分析結果からは、縄文時代中期から晩期にかけての気候変動に対応するコナラ亜属とアカガシ亜属の出現率の変化が認められた。また、樹種同定結果からは、アカガシ亜属が鍬に、ケヤキが容器に選択的に使用されていた可能性が指摘できた。

しかし、これまでの分析結果には、地域および時代に欠落しているものが多く、多角的な分析に発展させる資料が少なかった。今後こうした反省をふまえ、計画的に層位を確実に押さえた資料採取および分析を行うことが、より効果的な自然科学分析のデータ活用につながるであろう。

謝辞

この研究を進めるにあたり、名城大学理工学部の吉野道彦助教授、愛知県立明和高等学校の森　勇一教諭、および本センター職員の方々には多大なる協力・助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

文献

文化庁（1973）天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図23・愛知県，26ｐ．国土地理協会
藤　則雄（1987）考古花粉学，251ｐ．雄山閣
北村四郎・村田　源（1971）原色日本植物図鑑　木本編Ⅰ，453ｐ．保育社
北村四郎・村田　源（1971）原色日本植物図鑑　木本編Ⅱ，545ｐ．保育社
吉野道彦・萬谷さつき（1992）花粉化石からみた朝日遺跡．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ（自然科学編）」，59－69．愛知県埋蔵文化財センター
伊藤隆彦・森　勇一（1990）花粉分析．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集「岡島遺跡」，48．愛知県埋蔵文化財センター
森　勇一・伊藤隆彦（1989）愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第９集「町田遺跡」，60－63．愛知県埋蔵文化財センター．
森　勇一（1992）花粉分析．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集「勝川遺跡Ⅳ」，67－

76．愛知県埋蔵文化財センター
亘理俊次・山内　文（1963）植物性出土品．瓜郷，84－94．豊橋市教育委員会
後藤守一・久永春男（1963）木器．瓜郷，111－116．豊橋市教育委員会
山内　文（1976）篠束遺跡出土の木材．小坂井町誌．篠束遺跡調査報告書，50－53．小坂井町
山内　文（1976）篠束遺跡出土木材．小坂井町誌．篠束遺跡調査報告書第２次，96－97．小坂井町
㈶愛知県埋蔵文化財センター（1992）「朝日遺跡Ⅲ」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
樋上　昇（1990）木器．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集「岡島遺跡」，25－29．愛知県埋蔵文化財センター
樋上　昇（1992）木製品．㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集「勝川遺跡Ⅳ」，47－52．愛知県埋蔵文化財センター
狩野春一監修著（1969）建築材料・工法ハンドブック，11－23．地人書館
岸谷孝一編（1987）建築材料ハンドブック，304－307．技報堂
林業試験場編（1973）木材工業ハンドブック，234－235．丸善
上村　武　編著（1985）木材の知識，㈶経済調査会
上村　武　著（1988）木材の実際知識，東洋経済新報社
牧野富太郎（1989）牧野新日本植物圖鑑，1435ｐ，北隆館